

京都大学構内遺跡調査研究年報

1987年度

京都大学埋蔵文化財研究センター

序

この年報は1987年度に医学部構内と農学部構内の遺跡でおこなった発掘調査成果の報告と、それに関連する研究をまとめたものである。

第Ⅰ部第2章は、医学部構内での調査の報告である。ここで検出した密教法具の鋳型は、これまで調査してきた梵鐘鋳造遺構やほかの鋳造関連遺物とあわせて、古代から中世にかけて鴨東の地でおこなわれていた鋳物生産を考える貴重な資料である。第3章は、北部構内の調査の報告である。縄文晩期の土器の良好な資料を検出し、近年、研究の進んでいるこの時期の土器編年に関する新たな資料として、その位置づけをおこなうことができた。稲作をはじめとした、新たな文化要素の流入が想定される直前段階の資料と考えられ、文化の変容のありさまを考える重要な資料となろう。第Ⅱ部は、本研究センターの研究テーマのひとつとしている中世の鋳物生産について、わが国の各地の資料を素材に、中国との技術交流を視野に入れつつ考察したものである。

これまで発掘調査によって出土した膨大な資料は蓄積される一方であったが、さいわい昨年5月本学の歴史的建造物である尊攘堂の保存修復の工事がおこなわれ、埋蔵文化財研究センター資料室として利用することになった。5月31日には、西島安則総長はじめ関係者に資料室の展示を披露した。過去十数年間の調査によって得た資料を展示し、京都大学構内の歴史的変遷を解説し、学内、学外に公開し、歴史的建造物の保存とともにその有効な活用をめざしている。

各調査、資料室の開設にあたっては学内、学外の多くの関係者の方々に御指導、御協力、御助言をいただいた。とりわけ、本学の施設部、学生部、放射性同位元素総合センター、農学部の関係者各位に対し、あらためて謝意を表したい。今後とも変わらない御指導、御協力のほどをお願いする次第である。

1990年3月

京都大学埋蔵文化財研究センター長

西川幸治

例 言

- 1 本年報は、京都大学構内で1987年4月1日から1988年3月31日までに発掘、整理作業を終了した埋蔵文化財調査と保存の報告、および京都大学埋蔵文化財研究センターにおける研究成果をまとめたものである。
- 2 国土座標にしたがって一辺50mの方形の地区割りをして、遺跡の位置を表示した。
- 3 層位と遺構の位置については、国土座標第Ⅵ座標系 ($x = -108,000$ $y = -20,000$) が ($X = 2,000$ $Y = 2,000$) となる京都大学構内座標によって表示した。
- 4 遺構の略号は、奈良国立文化財研究所の方式にしたがって、井戸：SE，土坑：SKのように表示し、各調査ごとに通し番号を1から付した。
- 5 遺物には、遺跡の調査名を示すローマ数字と、調査ごとの通し番号を1から付した。この遺物番号は、本文、実測図、写真を通して表示を統一した。
Ⅰ：京都大学北部構内BH35区の試掘調査
Ⅱ：京都大学医学部構内AL20区の発掘調査
Ⅲ：京都大学北部構内BD33区の発掘調査
(例ⅠⅠ：京都大学北部構内BH35区出土遺物1番)
- 6 原則として、遺物の実測図は縮尺1/4、遺物の写真は約1/2に統一した。他の縮尺のものは、それぞれに縮尺を明記した。
- 7 第Ⅰ部の参考文献は、本文中に、〔著者名 発表年〕の形式で表わし、第Ⅰ部の末に一括した。第Ⅱ部については、章末の注に一括して記載した。
- 8 遺構・遺物の実測と製図は、清水芳裕、五十川伸矢、浜崎一志、宮本一夫、難波洋三、千葉豊、森下章司、家根祥多、上野京子、谷口由利子、西川恵美子がおこなった。遺物の撮影は、森下章司が担当した。
- 9 本文の執筆者名は各章の初めに記した。
- 10 編集は西川幸治の指導のもとに森下章司が担当し、清水芳裕、五十川伸矢、浜崎一志、千葉豊、辰巳ゆかり、西川恵美子が協力した。

京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度

目 次

第 I 部 1987年度京都大学構内遺跡発掘調査報告

第 1 章 1987年度京都大学構内遺跡調査の概要	1
1 調査の概要	1
2 調査の成果	1
3 北部構内 B H35区の試掘調査	2
第 2 章 京都大学医学部構内 A L20区の発掘調査	5
1 調査の経過	5
2 層 位	5
3 遺 構	6
4 遺 物	7
5 小 結	12
第 3 章 京都大学北部構内 B D33区の発掘調査	15
1 調査の経過と遺跡の概要	15
2 層 位	16
3 遺 構	17
4 遺 物	19
5 SK5 出土縄文土器の編年的位置づけ	32
6 小 結	34
参 考 文 献	36
京都大学構内遺跡調査要項	38

第Ⅱ部 京都大学埋蔵文化財研究センター紀要Ⅷ

中世前半の大型鑄鉄鑄物	47
1 はじめに	47
2 大型鑄鉄鑄物資料	48
3 資料の年代観	52
4 大型鑄鉄鑄物の製作技術	54
5 大型鑄鉄鑄物の鑄造技術と鑄物師	57
6 中国の鑄造技術	60

図 版	卷末
-----	----

図 版 目 次

- 1 京都大学吉田キャンパスの地区割と調査地点
- 2 京都大学医学部構内 A L20区
 - 1 江戸後期の遺構 (西から)
 - 2 江戸前期の土取り穴 (西から)
- 3 京都大学医学部構内 A L20区
土取り穴出土遺物(1)
- 4 京都大学医学部構内 A L20区
土取り穴出土遺物(2)
- 5 京都大学医学部構内 A L20区
土取り穴出土遺物(3)
- 6 京都大学北部構内 B D33区
 - 1 江戸後期の遺構 (北から)
 - 2 縄文晩期の遺構 (西から)
- 7 京都大学北部構内 B D33区
 - 1 土坑 S K 5 (西から)
 - 2 土坑 S K 3 (西から)
 - 3 土坑 S K 4 (西から)
- 8 京都大学北部構内 B D33区
 - 1 縄文前期・中期・後期の土器
 - 2 縄文晩期の土器
- 9 京都大学北部構内 B D33区
縄文晩期の土器
- 10 京都大学北部構内 B D33区
縄文晩期・弥生前期の土器
- 11 京都大学北部構内 B D33区
 - 1 縄文土器細部
 - 2 石 器
- 12 京都大学北部構内 B D33区
灰褐色土・黄色砂混り暗褐色土・茶褐色土出土遺物

挿 図 目 次

1987年度構内遺跡調査の概要		
図1 TP1・TP2の層位……………2	図16 縄文前期・中期の土器……………20	
図2 試掘調査位置……………3	図17 縄文後期の土器……………21	
図3 TP4・TP3・ TP1の層位……………3	図18 SK5出土縄文土器(1)……………23	
図4 TP1黒色土・ TP3表土出土遺物……………4	図19 SK5出土縄文土器(2)……………24	
医学部構内AL20区の発掘調査		
図5 調査区北壁と東壁の層位……………6	図20 SK5出土縄文土器(3)……………24	
図6 江戸前期の遺構……………7	図21 SK4出土の縄文土器……………25	
図7 土取り穴出土遺物(1)……………8	図22 縄文晩期の土器(1)……………26	
図8 土取り穴出土遺物(2)……………9	図23 縄文晩期の土器(2)・ 弥生前期の土器……………27	
図9 土取り穴出土の鋳型と取瓶, 完成品想定図……………11	図24 縄文晩期の土器(3)……………28	
図10 福勝院の九躰阿弥陀堂……………13	図25 縄文晩期の土器(4)……………29	
北部構内BD33区の発掘調査		
図11 調査区と周辺の おもな調査地点……………15	図26 石鏃・磨製石斧・ 凹石・磨石……………29	
図12 調査区東壁の層位……………16	図27 灰褐色砂質土・黄色砂混り 暗褐色土・茶褐色土出土遺物……………31	
図13 縄文晩期の遺構……………17	中世前半の大型鋳鉄鋳物	
図14 土坑SK5・SK6……………18	図28 中世前半の大型鋳鉄鋳物(1)……………49	
図15 土坑SK3・SK4……………19	図29 中世前半の大型鋳鉄鋳物(2)……………50	
	図30 中世前半の大型鋳鉄鋳物(3)……………51	
	図31 儀式用羽釜の変遷……………53	
	図32 大型鋳鉄鋳物の鋳造模式図……………56	
	図33 少林寺鉄鍋の模式図……………60	

表 目 次

表1 深鉢外面の調整手法……………32	表4 京都大学構内遺跡の おもな調査……………42
表2 凸帯の分類……………32	表5 中国鐘の鋳型分割……………61
表3 SK5の器種構成……………32	

第 I 部 1987年度京都大学構内遺跡発掘調査報告

第 1 章 1987年度京都大学構内遺跡調査の概要

第 2 章 京都大学医学部構内 A L20区の発掘調査

第 3 章 京都大学北部構内 B D33区の発掘調査

第1章 1987年度京都大学構内遺跡調査の概要

西川幸治 久馬一剛 清水芳裕 森下章司

1 調査の概要

京都大学埋蔵文化財研究センターは、吉田キャンパスおよび附属施設の敷地内における建物新営やその他掘削工事の際には、当該部局の報告にもとづき、予定地の埋蔵文化財の調査を、既知の遺跡との関係や過去の調査結果より、発掘、試掘、立合にわけて実施している。1987年度には、以下の発掘調査2件、試掘調査2件、立合調査6件、資料整理1件を実施した。

発掘調査	農学部総合館棟（第Ⅱ期）新営予定地（北部構内B D33区）	（第3章 図版1-180）
	工学部電気系学科校舎新営（本部構内A W27区）	（発掘中 図版1-181）
試掘調査	北部グラウンド改修工事（北部構内B H35区）	（第1章 図版1-182）
	理学部動植物学教室新営（北部構内B D28区）	（発掘中 図版1-183）
立合調査	病院精神科棟新営給排水その他工事（病院構内A H10区）	（図版1-184）
	農学部農学科実験温室取設工事（北部構内B I28区）	（図版1-185）
	病院地区基幹整備工事排水管理設（病院構内A H20区）	（図版1-186）
	吉田キャンパス情報ネットワーク施設整備工事（北部構内B A29区）	（図版1-187）
	吉田キャンパス情報ネットワーク施設整備工事（本部構内A T25区）	（第1章 図版1-188）
	本部構内身障者用通路柵その他取設工事（本部構内A U24区）	（図版1-189）
資料整理	放射線同位元素総合センター 有機廃液処理設備室新営予定地（医学部構内A L20区）	（第2章 図版1-169）

2 調査の成果

前節で記載した調査のうち、1987年度に整理を終えた9件について、その成果を略述する。なお、北部構内B H35区の試掘調査については本章第3節で、また、個々の発掘調査については第2章以下で詳述する。

縄文晩期の遺構 北部構内B D33区において、縄文晩期の土坑3基を検出した。うち1基は滋賀里Ⅳ式の良好な一括資料であり、近畿地方縄文土器編年の重要な資料となるものである。北白川扇状地上に営まれた縄文時代の集落は、時期によって少しずつ場所を移動させていたことが指摘されている。調査区一帯が縄文晩期後半において生活の中心地であったことがうかがわれた（第3章参照）。

鑄造関係遺物 医学部構内A L20区の土取り穴から、平安後期のものと思われる六器、器台などの密教法具の鑄型や取瓶が出土した。従来の調査で教養部構内A P22区、医学部構内A N18区、病院構内A J19区において梵鐘鑄造遺構や鑄型、坩堝、鑪の羽口等が検出され、この地が古代・中世の鑄造に関わる工人集団の一本拠地であったことが明らかとなりつつある。今回の調査の出土品は、この集団が梵鐘や鏡に加えて、仏器など幅広い製品の鑄造に関わっていたことを示している。さらに、この近辺に存在し、文献から密教法具の用いられていたことが知られる福勝院との関連も注目されよう（第2章参照）。

近世土取り穴 医学部構内A L20区で江戸前期の土取り穴を検出した。周辺では中世から近世におよぶ土取り穴が広く検出されており、この一帯で場所を移動させながら継続的に土取りのおこなわれていたことが明らかとなった（第2章参照）。

尾張藩邸堀 本部構内A T25区の立会調査で、東西方向の堀を検出した(図版1-188)。A T27区検出の幕末～明治初頭の尾張藩邸堀[五十川81]に続くものと考えられる。

3 北部構内B H35区の試掘調査

北部グラウンド改修工事が計画されたため、発掘調査に先立って試掘調査をおこなうことになり、学生部の協力を得て実施した。本調査地点を含む北部構内は、北白川追分町遺跡に含まれる西日本の著名な縄文時代遺跡として古くから知られている。1973年度におこな

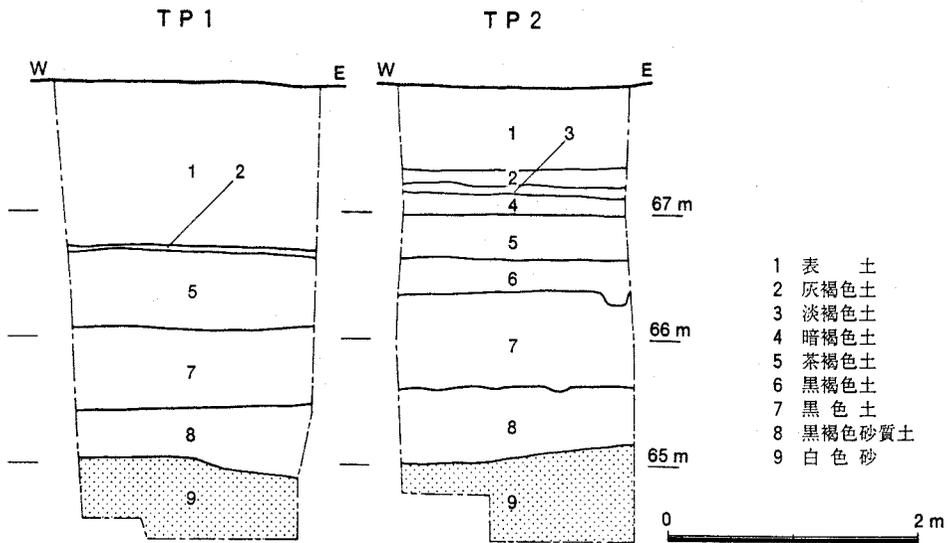


図1 TP1・TP2の層位 縮尺1/60

北部構内B H35区の試掘調査

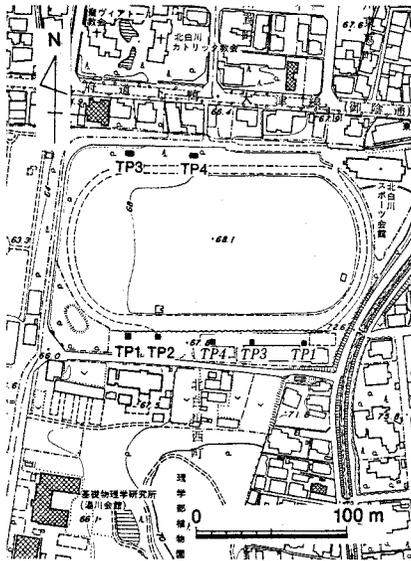


図2 試掘調査位置 縮尺1/5000

った理学部ノートバイオトロン装置室新営予定地内の調査では縄文後期の甕棺をともなう配石墓群〔中村74b〕, また1982年度の北部構内B F 33区の調査では, 縄文中期の堅穴住居跡が2棟発見されている〔清水84〕。いずれも北白川追分町縄文時代遺跡の重要性を示す遺構として, 前者は, 植物園内に移築し, 後者は現地で埋め戻して保存されている。

試掘地点周辺は北白川扇状地の端部にあり, 東から西へ向けて急に下がる地形をなしており, 東半は削平されていることが現地形と1979年におこなった北白川合宿研究所新営予定地の試掘調査から明らかになっていた〔岡田ほか 80

pp.31-2〕。グランド東半部層位は図3に示すように基盤の白砂及び礫層が急激に下がり, 旧地形の状況をよく表わしている。第5層では縄文土器とともに平安時代の遺物を, 第3・4層では室町時代の遺物を主として含むことが明らかになっており, 東端部の TP1 ではこのうち第3層のすべてと第4層の一部が削平されていることが明らかになった。

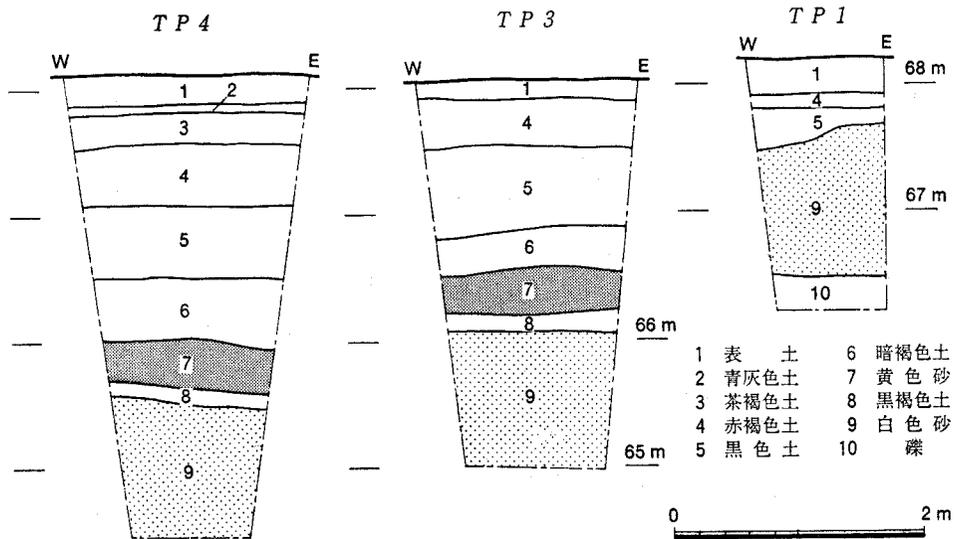


図3 TP4・TP3・TP1の層位 (1979年度の試掘調査) 縮尺1/60

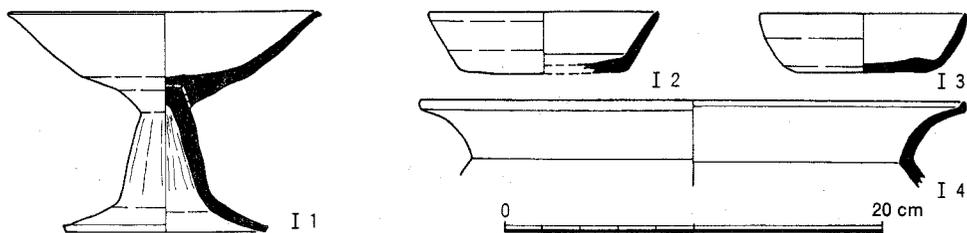


図4 TP1 黒色土出土遺物(I1・I4土師器, I2須恵器), TP3 表土出土遺物(I3須恵器)

このたびの試掘調査は、改修工事がグラウンド全域にわたるため、遺物包含層の存否が不明な西半部を中心としておこなったものである。4 m × 2 m と 2 m × 2 m のそれぞれ 2ヶ所計 4ヶ所の試掘坑を設けて層位と出土遺物の確認をおこなった(図2)。グラウンド西半部にあたる4ヶ所の試掘坑の基本的な層位は、上から表土(第1層), 茶褐色土(第5層), 黒色土(第7層), 白色砂(第9層)である(図1)。一方, TP3, TP4ではこれらの層はいずれも約1 m低い位置にあり, 表土が厚く覆う。

今回の西半部と, 1979年度の東半部の調査結果からグラウンド全域にわたる旧地形と遺物包含層の関係は以下のように復原できる。両者で共通する層は西半の第7層と東半の第5層にあたる黒色土と, 第9層の白色砂である。これらはいずれもグラウンド東端部にあたるTP1とTP3の間で急激に下がり, 西半部へ向かって緩やかに傾斜をもつ。さらにTP3・TP4のある西北部では西へと同時に北へ向かって急激に下がることが認められている。こうした各層の堆積はグラウンドをとりまく周辺の現地形によく反映されており, 現在のグラウンド面は, 東端部で一部旧地形を削平し, 西半部では西および北西へ傾斜する地形上に盛土を施して平坦面を作り出していることがわかる。遺物包含層は東半部で一部削平を受けているが, ほぼ全域にわたって残っていることが明らかになった。

遺物はTP1第7層から奈良時代の土師器や須恵器がまとまって出土し, TP3表土からも同時期の須恵器が出土している(図4)。I1は土師器高杯で脚台柱状部外面は削りののちに撫でが施されて面取りは明瞭でない。また内面には絞りが残る。I2は口縁部にまっすぐ立ち上がる須恵器杯で底部の篋切り痕は明瞭でない。I3はやや内湾する口縁部をもつ須恵器杯である。I4は土師器鍋で外面には刷毛目が残る。本部構内A T27区の奈良時代の竪穴住居跡S B1で同種の鍋が出土している〔五十川81p.30〕。

以上のように1979年度と今回の試掘調査から, グラウンド全域にわたって縄文時代から中世にわたる遺物が出土することがわかり, さらに奈良時代から平安時代の遺物包含層がほぼ全域にわたって良好に残っていることが明らかになった。

第2章 京都大学医学部構内AL20区の発掘調査

浜崎一志

1 調査の経過

本調査区は吉田山の西麓、京都大学医学部構内の東南端に位置する(図版1-169)。ここに放射性同位元素総合センター有機廃液処理設備室の新営が計画されたため、新営予定地全域の発掘調査を実施することになった。発掘調査は、1986年12月15日に開始し、1987年1月31日に終了した。調査面積は、331㎡であった。

すでに、本調査区に近接する111・134地点では弥生時代の溝と水路を、74・134地点で中世の土取り穴を、154・155地点で近世の大規模な土取り穴などを検出している(図版1、表4)。本調査区でもこれらと一連の遺跡の存在が予想された。

また、本調査区のすぐ東には『兵範記』などの文献から、鳥羽法皇の皇后高陽院泰子の御願の御堂である福勝院が比定されている[杉山62, 川上77]。この福勝院には九躰阿弥陀堂、三重塔、寢殿、護摩堂などがあったことは知られているが、寺域の正確な位置や規模はいまだ不明である。

発掘調査を実施した結果、近世初頭の土取り穴を検出した。医学部東北部で検出される中世の土取り穴、および病院構内北半部の近世後半の土取り穴とともに、本調査区一帯の土地利用の変遷を知るうえで貴重な資料となった。また、中世の遺構は土取り穴に攪乱され、検出できなかったものの、密教法具の鋳型や輸入陶磁器をはじめ、12~14世紀の遺物が多量に出土した。密教法具は寺院に関わるものであり、遺物の時期も福勝院の存在時期と一致することから、福勝院となんらかの関わりをもつ遺跡があったと考えられる。

2 層位

本調査区の基本層位は、上から表土(第1層)、黒色土(第2層)、黒灰色土(第3層)、不定形土坑埋土(第4層)、黄灰色シルト(第5層)からなっている(図5)。現地表は東北端で標高51.5m、西北端で50.8mを測り、東から西へ下がる緩傾斜を呈するが、近世の遺物を含む黒色土と黒灰色土はほぼ水平に堆積しており、現地表面の傾斜は近・現代の盛土によるものと思われる。

不定形土坑は黄灰色シルトを採取した土取り穴であり、茶褐色土、黄色細砂などがプロ

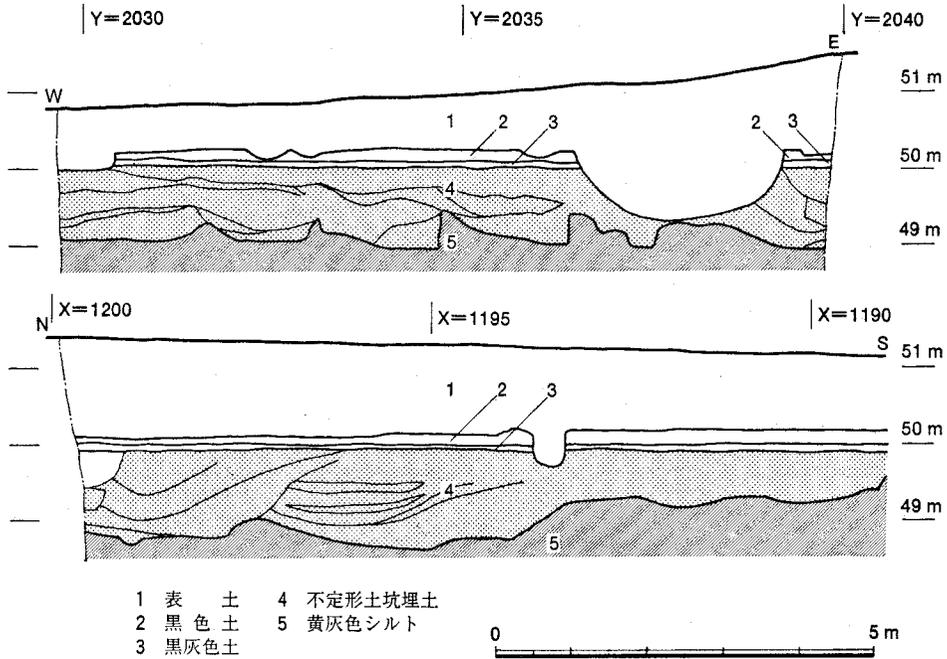


図5 調査区北壁(上)と東壁(下)の層位 縮尺1/100

ック状に埋積している。埋積状況は、74・134地点で検出した土取り穴とよく似た様相を呈する。ブロック状の埋土は全体的な傾向としては西から東へと傾斜しており、土取り穴が掘り進められた方向を知ることができる。土取り穴の埋土は少量の江戸前期の遺物と、多量の中世の遺物を含む。黄灰色シルトを採取するときに、中世の遺跡が攪乱されたと考えられる。

黄灰色シルトは採取の対象となった粘質の土で遺物を含まない。この黄灰色シルトは、134地点の調査で弥生前期末～中期初頭に堆積した黄色砂の下で検出されており、弥生時代以前のものと考えている。

3 遺 構

本調査区では、江戸後期の溝・柵列・柱穴と、江戸前期の土取り穴を検出した(図版2)。江戸後期の溝は全部で5本検出したがいずれも浅く、畑の耕作用の溝と考えられる。溝はいずれも南北方向のもので、方位は約4～8°東にふる。柱穴は多数検出したが、柵列と認められたのは2列だけであった。柵列は南北方向のもので、その方位は東に約2～3°ふる。柵列の柱間は2.0～2.4mを測る。

遺 構

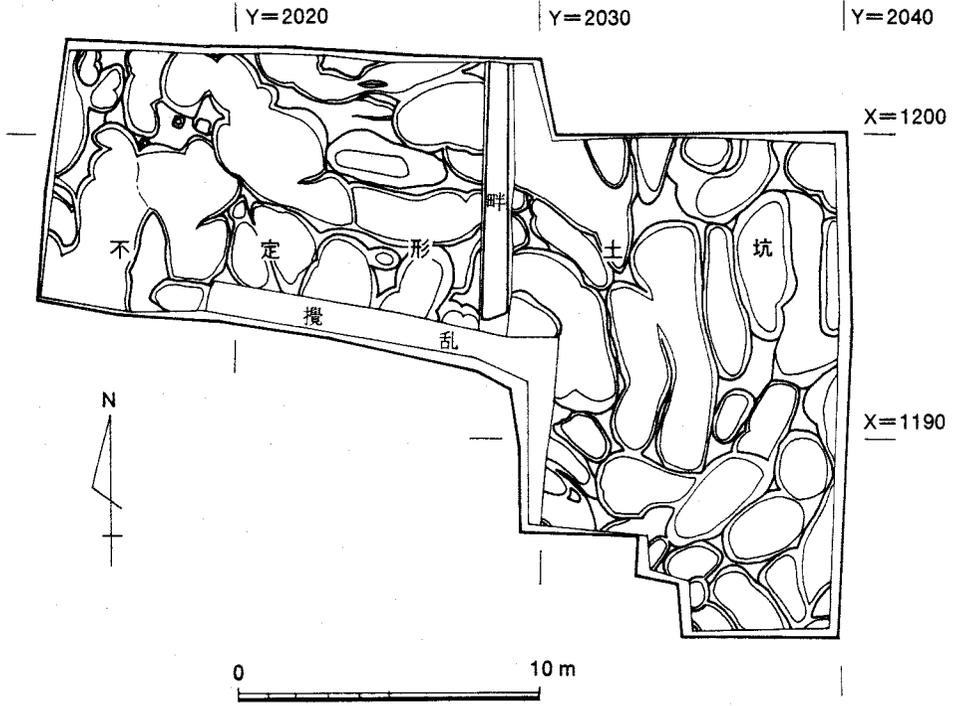


図6 江戸前期の遺構 縮尺1/250

江戸前期の土取り穴は、調査区の全域で検出した(図6)。たがいに大きく切り合うことなく、接するように検出されることや、黄灰色シルト層の下部でとまることから、74・134・154・155地点と同様の土の採取跡と考えられる。本調査区の土取り穴の大きさは1～5㎡と一定せず、154・155地点で検出した18世紀のもののような規格性はなく、形態のうえでは74・134地点の中世の土取り穴に似る。埋土の状況から、土取りは西から東へ、南から北へと掘り進められたことが判明した(図5)。

4 遺 物

遺物は整理箱に22箱出土した。その大半は江戸前期の土取り穴から出土したものであるが、土を採取するときに中世の遺跡を破壊したものとみられ、出土した遺物のほとんどが平安時代の後期から鎌倉時代にかけての遺物である(図版3～5, 図7～9)。

Ⅱ1～Ⅱ3は見込みに圈線をもつ土師器の皿。Ⅱ1は口縁部がやや外反し、圈線は浅く口径は11.4cmを測る。Ⅱ2・Ⅱ3はV字形の圈線をもち、口径はそれぞれ11.4cmと11.0cmを測る。Ⅱ4は志野の高台付きの皿。見込みに2本の圈線と鉄絵を施す。Ⅱ5は初期伊万

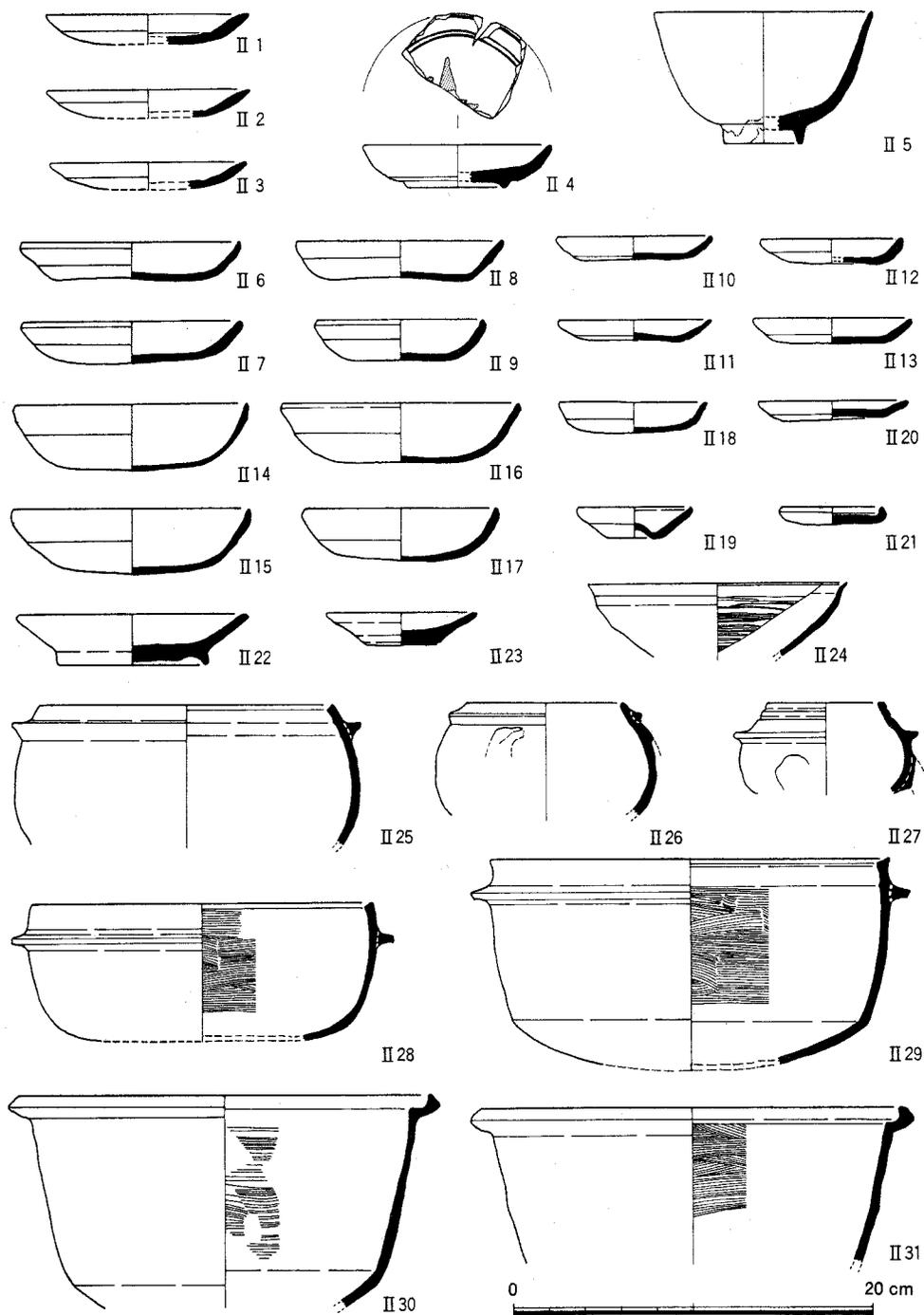


図7 土取り穴出土遺物(1)(II 1~II 3・II 6~II 23土師器, II 4陶器, II 5磁器, II 24~II 31瓦器)

遺 物

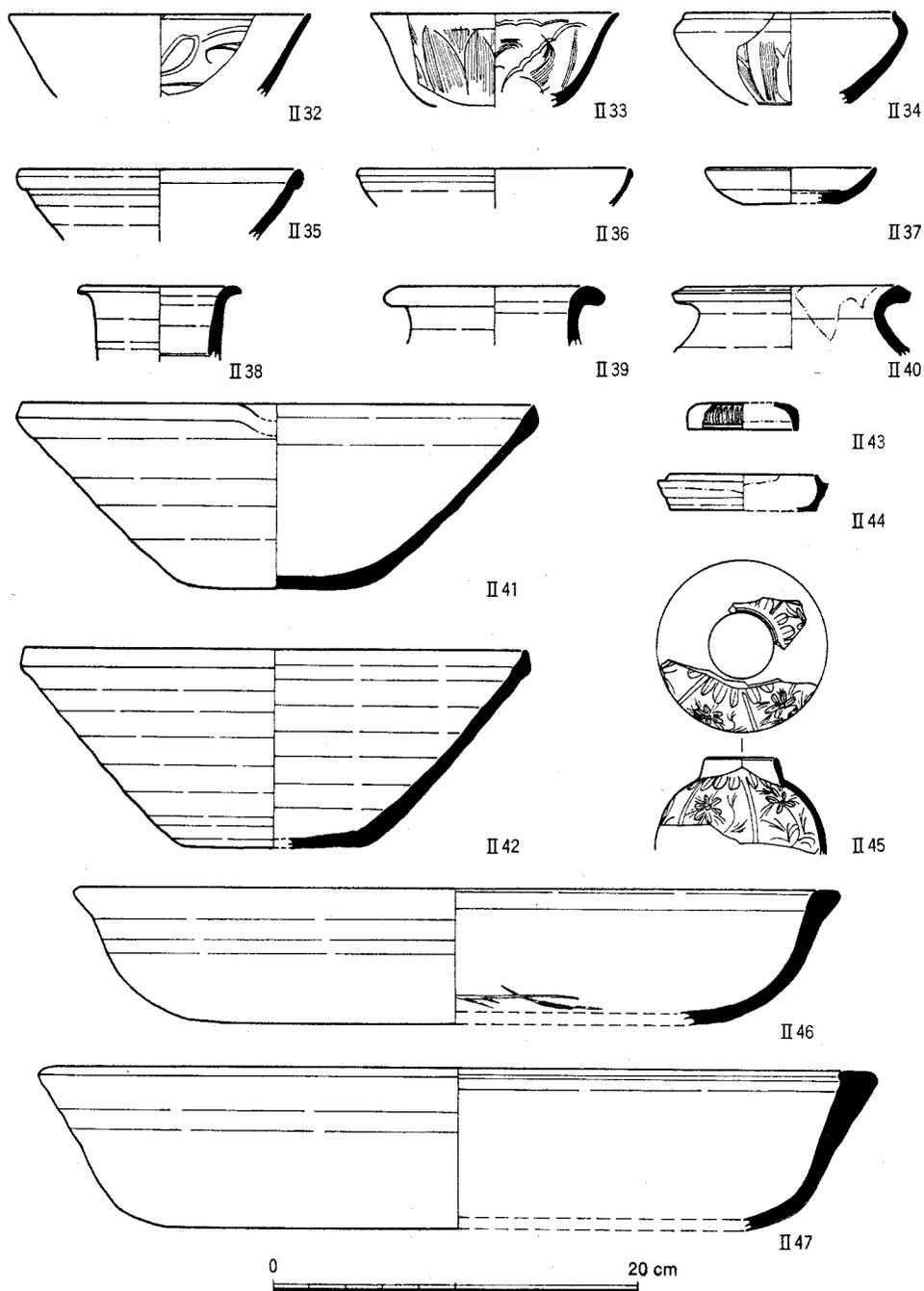


図8 土取り穴出土遺物(2)(II 32～II 34青磁, II 35～II 39白磁, II 40褐釉陶器, II 41・II 42須恵器, II 43～II 45青白磁, II 46・II 47瓦器)

里の高台無釉の青磁碗。器壁はやや厚く、器高は高い。Ⅱ 1～Ⅱ 5は17世紀後半の資料で、土取り穴が埋め戻された時期のものと考えている。

Ⅱ 6～Ⅱ 23は土師器の碗と皿。Ⅱ 6・Ⅱ 7は1段撫で面取り手法D₅類の大型の皿で、口径はいずれも12.5cmを測る。Ⅱ 8は1段撫で素縁E₁類の大型の皿で、底の一部に板圧痕を残す。Ⅱ 9は1段撫で面取り手法D₅類の皿。Ⅱ 10～Ⅱ 13は1段撫で素縁E₁類の小型の皿で、口径は8.2～8.4cmを測る。Ⅱ 14～Ⅱ 17は1段撫で素縁手法E₁類の碗で、Ⅱ 14～Ⅱ 16の口径は13.2～13.4cmを測る。Ⅱ 18・Ⅱ 20は1段撫で素縁E₂類の小型の皿で、灰白色を呈し、口径はそれぞれ8.3cmと8.9cmを測る。Ⅱ 19は1段撫で素縁E₂類の凹み底小碗。Ⅱ 21は土師器受け皿。灰白色を呈し、口縁端部のかえりはあまく、口径も6.0cmと小さい。Ⅱ 22は高台付き土師器皿。高台は後から貼付けたもので、底部には糸切り痕を残す。Ⅱ 23は底部に糸切り痕を残す土師器皿。

Ⅱ 24は内面に暗文を施した瓦器の碗。口縁端部で外反する。Ⅱ 25～Ⅱ 29は瓦器の羽釜。Ⅱ 25～Ⅱ 27は胴部が球形をなし、Ⅱ 28・Ⅱ 29は直線的である。Ⅱ 25の口縁端部は横撫でによる内傾した面をもつ。口縁端部内面直下には横撫でによる凹線を施す。Ⅱ 26・Ⅱ 27は三脚をもつ小型の羽釜。Ⅱ 26は鏝直下に脚の痕跡を残し、外面に煤が付着する。Ⅱ 27は鏝からやや下がったところに脚がつく。口縁部外面下端には2条の凹線がめぐり、Ⅱ 28・Ⅱ 29は大型の羽釜で口縁端部にやや内傾する面をもち、内面は刷毛目調整である。Ⅱ 30・Ⅱ 31は瓦器鍋。蓋受け部分の屈曲はあまく、やや新しい傾向を示す。

Ⅱ 32～Ⅱ 34は青磁の碗。Ⅱ 32は内面に片切り彫りによる劃花文を施す。Ⅱ 33は外面に蓮弁文と櫛描文を施し、内面に片切り彫りによる劃花文と櫛描文を施す。Ⅱ 34は口縁部が強く内湾する碗で、外面に蓮弁文と櫛描文を施し、内面は無文である。Ⅱ 35・Ⅱ 36は白磁の碗。Ⅱ 35は玉縁が大きく器壁が厚い。Ⅱ 36は玉縁が小さく器壁が薄い。Ⅱ 37は白磁の皿で、見込みに圈線がめぐり、底部は露胎である。Ⅱ 38・Ⅱ 39は白磁の壺の口頸部。Ⅱ 38は口縁部が外折し、Ⅱ 39は口縁端部が丸く肥厚する。Ⅱ 40は褐釉陶器四耳壺の口頸部。

Ⅱ 43・Ⅱ 44は青白磁合子の蓋と身。Ⅱ 44は断面が箱形を呈する合子の身で、蓋受けと底部は露胎である。Ⅱ 45は青白磁の水注。2本の縦線で外面を六分割し、間に陽刻の花文を施す。頸部には蓮弁文を飾る。注ぎ口の痕跡はあるが、その形状は不明である。

Ⅱ 41・Ⅱ 42は須恵器のすり鉢。Ⅱ 46・Ⅱ 47は瓦器の盤。いずれも底部に板圧痕を残す。Ⅱ 46は見込みにまばらな暗文を施す。Ⅱ 47は口縁端部がすどく内にはりだす。Ⅱ 6～Ⅱ 47は12～14世紀の資料である。

遺 物

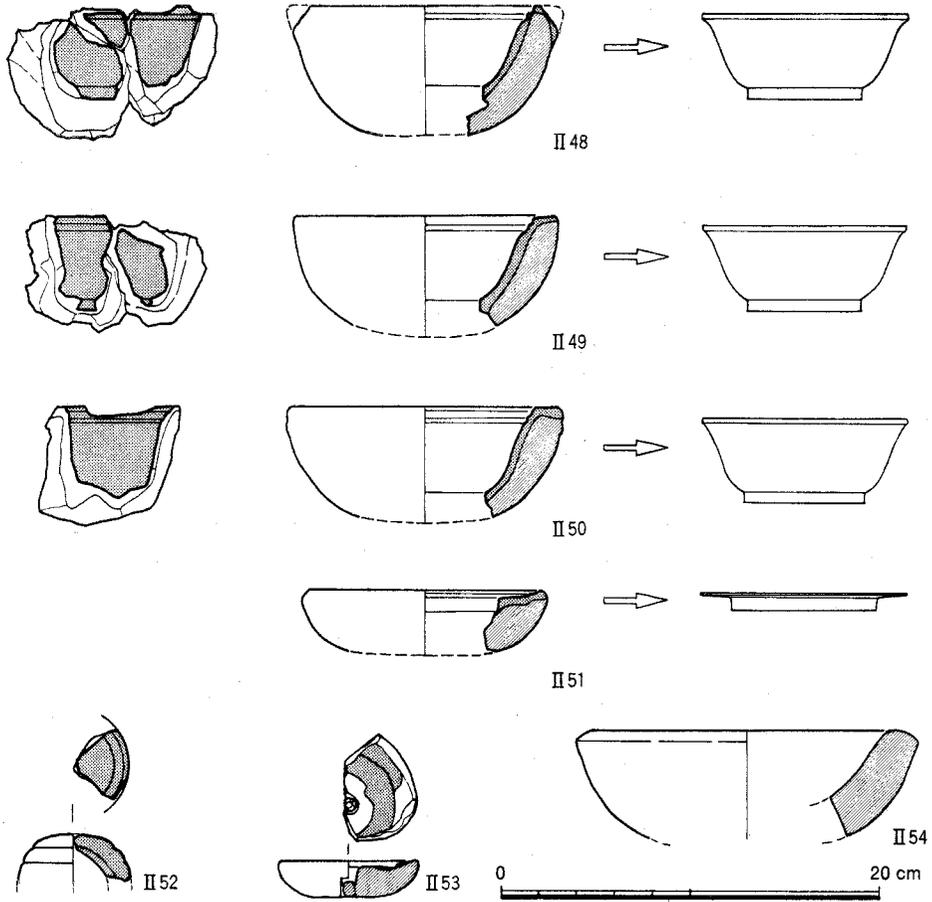


図9 土取り穴出土の鋳型と取瓶，完成品想定図

このほか、鋳型、取瓶の破片が炭や灰とともに、土取り穴の埋土からまとまって出土した(図9)。II 48～II 51は、密教法具のひとつ六器とその台皿の鋳型である。II 48～II 50は六器の外型で、いずれも^{すま}坩を混ぜた粘土で碗形の粗型(斜線部分)をつくり、焼き締めたあとで、内側を粒子の細かな^ま真土(梨地部分)で仕上げる。鋳型の口縁部内側には、内型をはめ込んで固定するための幅木受けが彫りくぼめてある。これらの鋳型から鋳造した製品を復原してみると、六器はいずれも口径約11cm、器高約4.5cmを測る。口縁部の外側を垂直に面を取ったもので、仁平3(1153)年の紀年銘をもつ経筒に共伴した花背別所経塚出土の六器(福田寺藏)のように、鋳造後口縁部を面を取るように削り、「しのぎ」をたてたものと考えられる。全体として器高、高台がともに低い低平な形であり、平安後期の特徴をもつ〔奈良博77〕。土取り穴からは図示したほかにも六器の鋳型の小片が多数出土したが、蓮

弁飾りを施した、いわゆる慈覚大師請来形のものではなく、素文系の法具のみが作られたと考えられる。

Ⅱ51は六器の台皿の外型で、皿形の粗型をつくり、焼き締めた上に真土を塗って仕上げる。六器の鋳型と同様に、口縁部内側に幅木受けを彫る。鋳造された台皿は口径約11cm、器高約1cmを測る偏平な皿である。皿はわずかに内傾する。六器の高台の滑り止めとなる「かえし」の痕跡は不明である。一般に素文の六器と台皿の口径はほぼ同じであるものが多い。Ⅱ51の口径もⅡ48～Ⅱ50とほぼ同じであり、Ⅱ51はⅡ48～Ⅱ50と組みになる台皿の鋳型である可能性が高い。Ⅱ52は3段に段をなす蓋の内型で、火舎香炉の蓋に似るがやや小さい。Ⅱ53は鳥目の痕跡を残す鋳型である。鳥目を中心に引型を回転させ、真土を塗りつけながら回転体状の器形を仕上げたものと思われる。Ⅱ54は半球形の取瓶。表面は平滑で、堅く焼き締められている。

以上のような結果から、これらの密教法具の鋳造に関連する遺物は、いずれも平安後期のものと考えられる。

5 小 結

今回の調査では江戸前期の土取り穴を検出した。本調査区の北約200mの74地点〔清水・吉野81〕や、北約60mの134地点では14世紀前葉～中葉ごろのもの〔五十川86〕を、また、約100m南の154・155地点では18世紀の土取り穴を検出している〔五十川・浜崎89〕。本調査区で検出した土取り穴が17世紀後半の遺物を含むことから、京都大学構内では土の採取が、本調査区の北の医学部構内東北部から南半部へ、そして病院構内北半部へと移動していったことが判明した。なお、17世紀の地誌『菟藝泥赴』には、寛文年間(1661～1673)に河の彦四郎なる男が熊野社のすぐ西で土を掘り、あきなっていたことが記されている。熊野社は本調査区の南約500mの地点にあたり、周辺の黒谷、岡崎とともにこの地一帯でさかんに土の採取がおこなわれていたことがわかる。

また、今回検出した土取り穴の形態は規則性をもたず、74・134地点の中世の土取り穴に似る。154・155地点の土取り穴が規模や方位に多少ながらも規格性をもち、組織的な土の採取がおこなわれていたことをうかがわせるのと大きく異なる。『立杭窯の研究』によれば、丹波多紀郡の立杭焼きの陶土は坪単位で売買され、この売買のため土取り穴は方形で規格性のあることが報告されている〔藪内55〕。本調査区の土取り穴と、154・155地点のものとの形態の相違が時期差によるものか、土地の権利関係や、土を採取する組織のあり

小 結

方によるものかなどの解明は今後の課題である。

また、平安後期のものと思われる鋳型、取瓶がまとまって出土したことは注目に値する。これらの鋳造に関する遺物が在地の工房の存在を示すものか、施主の注文に応じて出張して鋳造した一時的なものかは不明である。ただ、本調査区の周辺では111地点で平安中期の、142地点で鎌倉時代の鋳造に関連する遺構や遺物が発見されている。また、155地点でも時期は不明ながら、鋳型、坩堝、鑪の羽口が出土しており、京都大学の教養部、医学部、医学部附属病院の位置する吉田山西麓一帯は、古代・中世の鋳造にかかわる工人集団の本拠地のひとつであったと考えられている〔五十川88〕。また、前述のように黒谷、岡崎の土は陶土として有名であるが、諸国の特産物にまで言及した17世紀の俳論書『毛吹草』

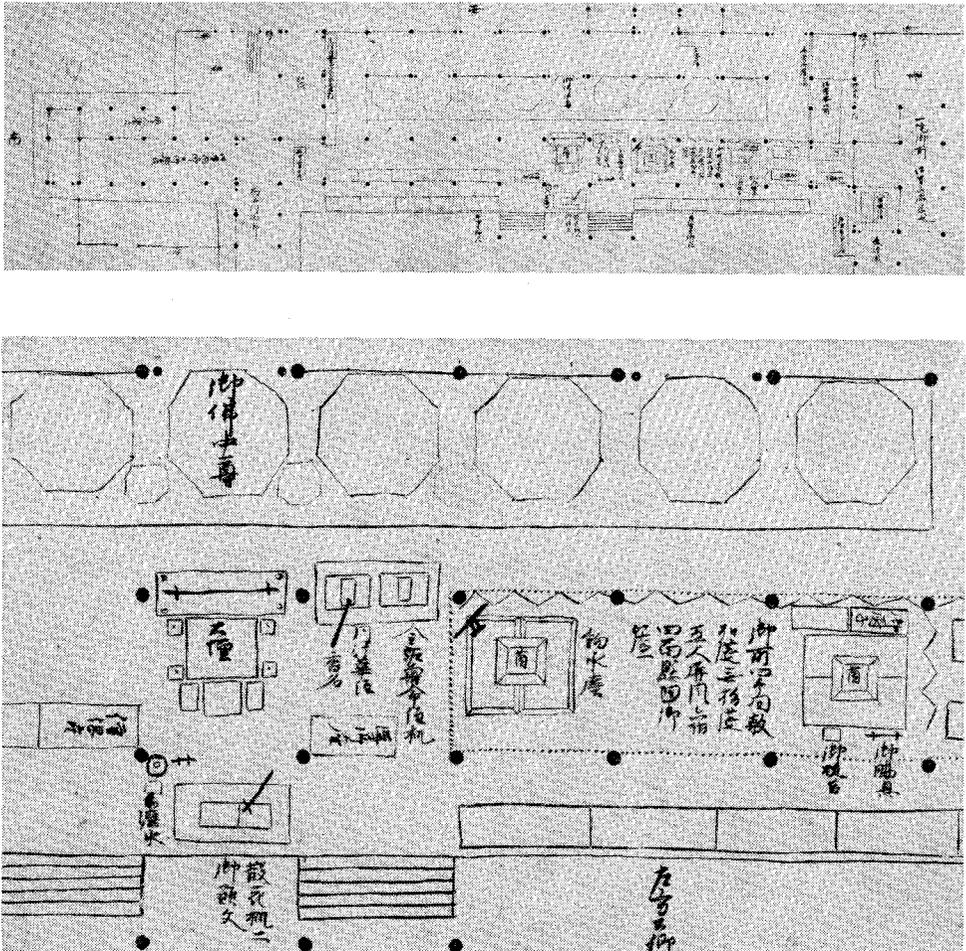


図10 福勝院の九鉢阿弥陀堂(重要文化財『兵範記』京都大学附属図書館所蔵より)(下)は拡大図

には、黒谷の名産として、陶土と梵鐘の鋳型の型土をあげている。黒谷は本調査区の東南東約800mの地点にあたる。本調査区一帯で採取した土が鋳型の型土に適しているとすれば、工人集団が吉田山西麓一帯を本拠地にした理由もうなずける。

その一方、本調査区出土の鋳型の場合、平安後期のものであること、鋳造したものが密教法具であることから、本調査区のすぐ東に比定されている福勝院の注文を受け、その周辺で鋳造した遺物の可能性もある。平信範の日記『兵範記』の仁平2(1152)年8月28日の条に、鳥羽法皇の五十賀算を設けたときのこと記されている。この五十賀算は鳥羽法皇の皇后高陽院泰子の父である前太政大臣藤原忠実が、泰子の御願の御堂福勝院で設けたものである。この日の記事には宴の様子とともに、福勝院の九輪阿弥陀堂の詳細な平面図が記載されている(図10)。この九輪阿弥陀堂には丈六仏が供養されていたが、その中尊の前に方六尺、高さ一尺一寸、螺鈿地蒔の大壇が据えられていた。大壇の四角には鑑を立てて、五色の糸をひき、「四面備闕伽器盛造花」とある。六器はもともと闕伽器と称されていたが、火舎、飯食器、花瓶とともに、6口が1組で一面器をなすことから、六器と称されるようになった〔佐和・濱田84〕。4組の一面器を四面具として、大壇の4面を飾る。福勝院の場合も四面具を備え、六器には各面に6口ずつ、計24口ならべて用いられたと考えられる。このような、本調査区と福勝院の位置関係、鋳型の年代、鋳造製品の性格から、Ⅱ48～Ⅱ51の鋳型が福勝院で用いられた六器の可能性もある。

以上のような調査の成果により、医学部・病院構内一帯の中世から近世にかけての、土地利用の変遷と、工人集団の動向や福勝院についての貴重な資料を得ることができた。

なお、六器に関しては京都国立博物館の難波洋三氏、鋳型については京都市埋蔵文化財研究所の梅川光隆氏の御教示をいただいた。末筆ながら、お礼申し上げます。

第3章 京都大学北部構内BD33区の発掘調査

浜崎一志 千葉 豊

1 調査の経過と遺跡の概要

本調査区は北白川扇状地の西端、京都大学北部構内の中央やや南よりに位置し、北白川追分町遺跡のほぼ中央にあたる(図版1-180, 図11)。ここに農学部校舎の新営が計画されたため、これまでの発掘調査の成果を勘案し、新営予定地全域の発掘調査を実施することになった。北白川追分町遺跡は、上終町遺跡、別当町遺跡、小倉町遺跡とともに、北白川扇状地に形成された遺跡のひとつである。本調査区周辺では、123地点で縄文中期の竪穴住居跡を、125地点では縄文中期～晩期の河川を、11地点では縄文後期の甕棺墓と配石墓を検出している。56・135地点では北白川扇状地内の微高地の北西斜面と低湿地の埋没

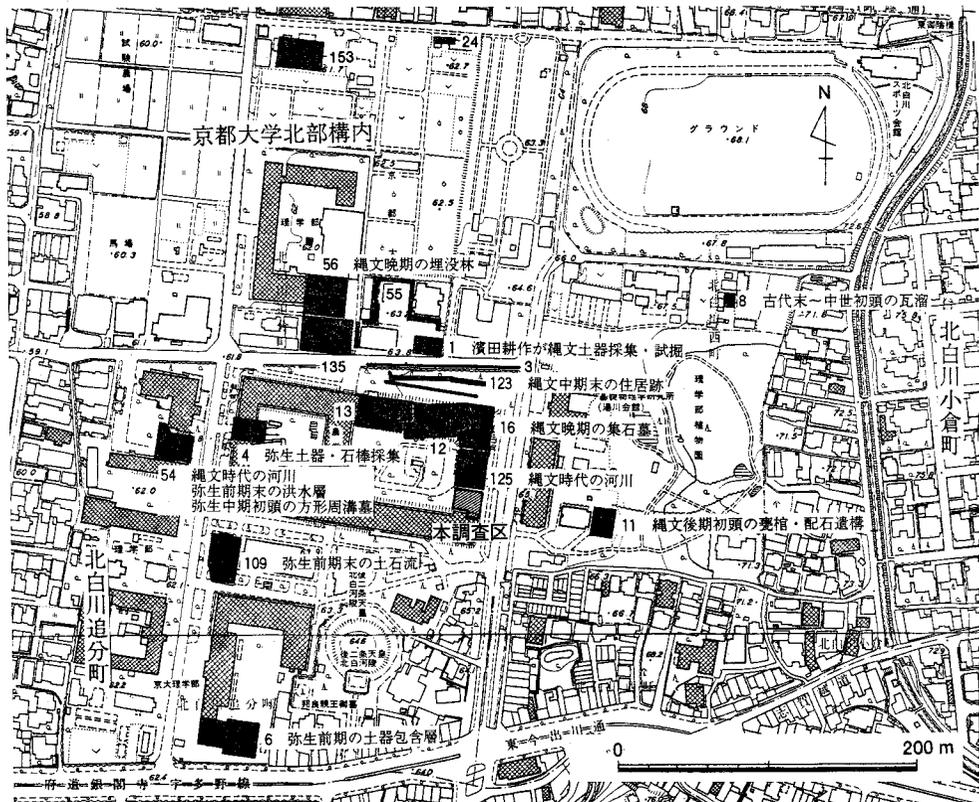


図11 調査区と周辺のおもな調査地点 縮尺1/5000

林を発掘し、出土した多量の動植物遺体から、縄文晩期を中心とする自然環境の復原を試みた。このほか、54地点では弥生中期の方形周溝墓を発見している。

また、歴史時代の遺跡としては、8地点で平安後期～鎌倉初頭の瓦溜め、54地点で鎌倉時代の火葬塚、125地点で平安末期～江戸後期の水田跡を検出している(図11, 表4)。

発掘調査を実施した結果、歴史時代の遺構は農学部旧本館の基礎による攪乱のため著しく破壊されていることが判明したが、縄文晩期の遺構と包含層は良好な状態で遺存しており、北白川追分町遺跡を知るうえで貴重な資料を得ることができた。

2 層 位

本調査区の現地表は、盛土によりほぼ平坦に造成され、標高は約65.5mを測る。遺物包含層は地表下約4.5mまで達しており、北部構内から本部・教養部構内にかけて通有の鍵層である黄色砂(第8層 弥生前期末～中期初頭)をはさんで、上下で堆積の状況が異なる。上層群は青灰色土(第2層)、灰褐色土(第3層)、茶褐色土(第4層)、黄色砂混り暗褐色土(第5層)、暗褐色砂質土(第6層)、灰褐色砂質土(第7層)からなり、下層群に比して有機物を多く含む(図12)。

江戸後期の遺物を含む青灰色土と近世初頭の遺物を含む灰褐色土は、X=2086付近で南から北に段状に下がり、棚田があったことを示す。段状に下がった部分には土留めがおこなわれており、杭の痕跡が残る。杭は鉛直方向だけではなく、斜めにも打ち込まれていた。125地点でも北に下がる棚田を検出しており、近世の本調査区一帯は南から北に下がる棚田のひろがる景観が復原できる。以下に平安後期～鎌倉時代の遺物を含む茶褐色土、平安中期～後期の黄色砂混り暗褐色土、平安中期の灰褐色砂質土が黄色砂上面までつづく。

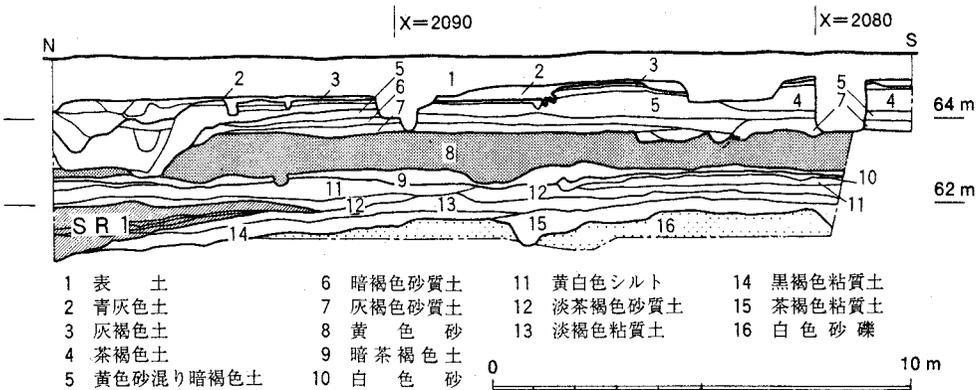


図12 調査区東壁の層位 縮尺1/180

層 位

これらの上層群は農学部旧本館の基礎により、その大部分が攪乱されており、この時期の遺構はほとんど検出できなかった。

黄色砂の上面は、 $X=2095$ 付近で南から北に向かって約0.9m下がる。黄色砂の上面は北隣の125地点の $X=2108$ 付近で立ち上がり、本調査区の北端部から125地点の南半部に谷地形のあったことが判明した。

厚さ約1mを測る黄色砂の下に堆積している下層群は、弥生土器と長原式と船橋式を含む暗茶褐色土(第9層)、黄白色シルト(第11層)、滋賀里Ⅳ式の土器を含む淡茶褐色砂質土(第12層)、淡褐色粘質土(第13層)、縄文前期～後期の土器を含む黒褐色粘質土(第14層)、茶褐色粘質土(第15層)からなる。白色砂礫(第16層)は無遺物であった。調査区の北部では、黒褐色粘質土を切り込む河川SR1の南の端を検出した。125地点では、蛇行するSR1の北の端を検出しており、扇状地上の流路の状況を知ることができた。

3 遺 構

本調査区では、上層群の遺構はその大部分を農学部の旧本館の基礎で攪乱されており、

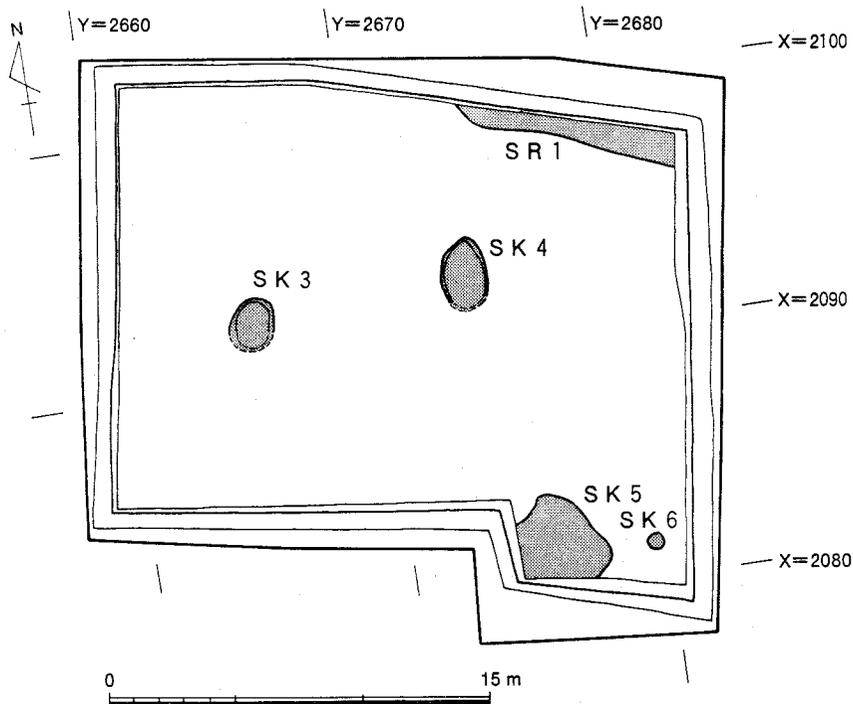


図13 縄文晩期の遺構 縮尺1/300

断片的に棚田と、土留めの柱穴を検出したにとどまった。下層群では土坑SK3～SK6の4基と河川SR1を検出した（図版6・7，図13～15）。

河川SR1は調査区の東北端で検出した。SR1は南東から北西にむかって流れ、125地点で検出したSR1につづく。検出面からの深さは約1m，幅は125地点のSR1とあわせて約5mを測る。SR1は、125地点で北東から南西へと流れのむぎをかえ、扇状地上を蛇行していたことが判明している。

SK3は暗茶褐色土の直下で検出した。不整形な円形をなし、東西1.8m，南北の検出長1.6m，検出面からの深さ0.2mを測る。小児頭大の石からなる集石をともない，縄文晩期後葉の平底の土器の底部が1点だけ出土した。

SK4は淡褐色砂質土層の中で検出した。平面は楕円形を呈し、東西1.9m，南北の検出長2.4m，検出面からの深さは0.1mを測る。SK4からは、口縁部を欠く縄文晩期の壺(Ⅲ61)がおしつぶされた状態でまとも出土した。

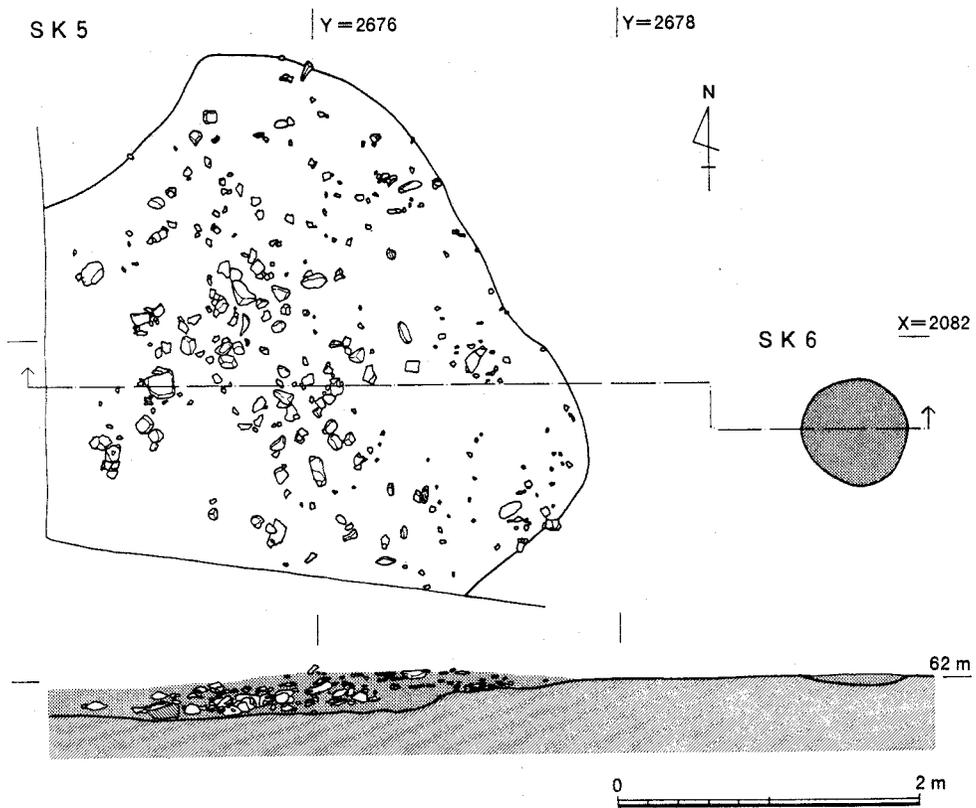


図14 土坑SK5・SK6 縮尺1/50

遺 構

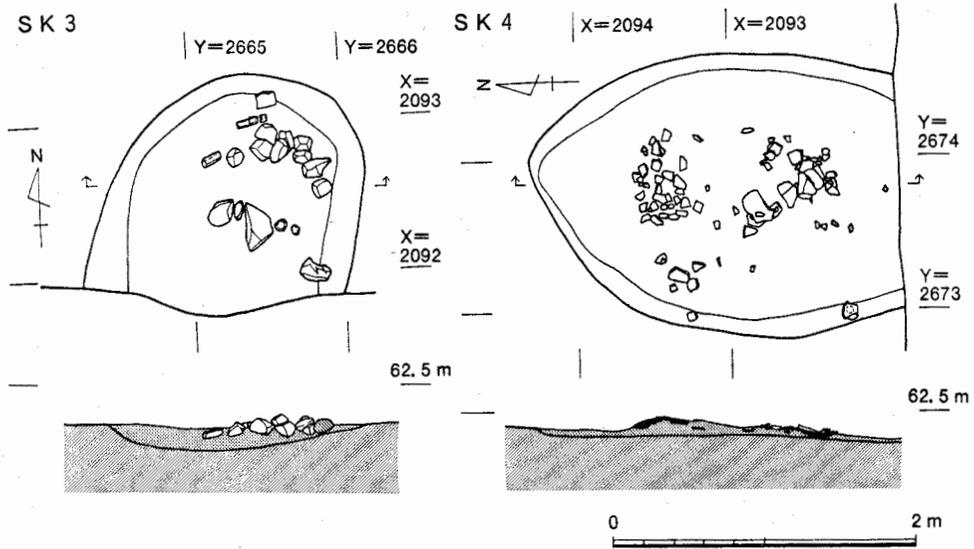


図15 土坑SK 3・SK 4 縮尺1/50

SK 5は調査区の南端部で東西3.5m南北3.5mにわたって検出した。深さ0.2mを測り、全体になだらかに落ち込む。SK 5からは、滋賀里Ⅳ式の土器がまとまって出土した。SK 5の東約4mの所で直径0.7m、検出面からの深さ0.1mの焼土のつまった土坑SK 6を検出したが、遺物をともなわず性格は不明である。

4 遺 物

遺物は、北部構内から本部・教養部構内にかけての鍵層である黄色砂層で大きく2群に分離できる。上層群出土の遺物は歴史時代に属し、下層群出土の遺物は縄文・弥生時代に属する。とくに、縄文時代の遺物は約1500点に達した。

(1) 縄文・弥生時代の出土遺物 (図版8~11, 図16~27)

黄色砂層より下位で見つかった遺物は、少量の弥生前期土器および石器を除くと縄文土器である。縄文土器は前期末葉~後期前葉と晩期後葉の2つの時期に大別できるが、主体をしめるのは晩期後葉の土器である。以下、時期別に説明を加えることにしよう。

Ⅲ1~Ⅲ3は、前期末葉、大歳山式。地文にRL縄文を施し、刻みを加えた凸帯をめぐらす。Ⅲ1・Ⅲ2は凸帯上をΣ状に加工した施文具で押し引き状の刻みを加え、口唇の内外部にも同一の施文具で刻みを加えている。Ⅲ3は篋状工具による軽い刻みを加えた凸帯を垂下させる。

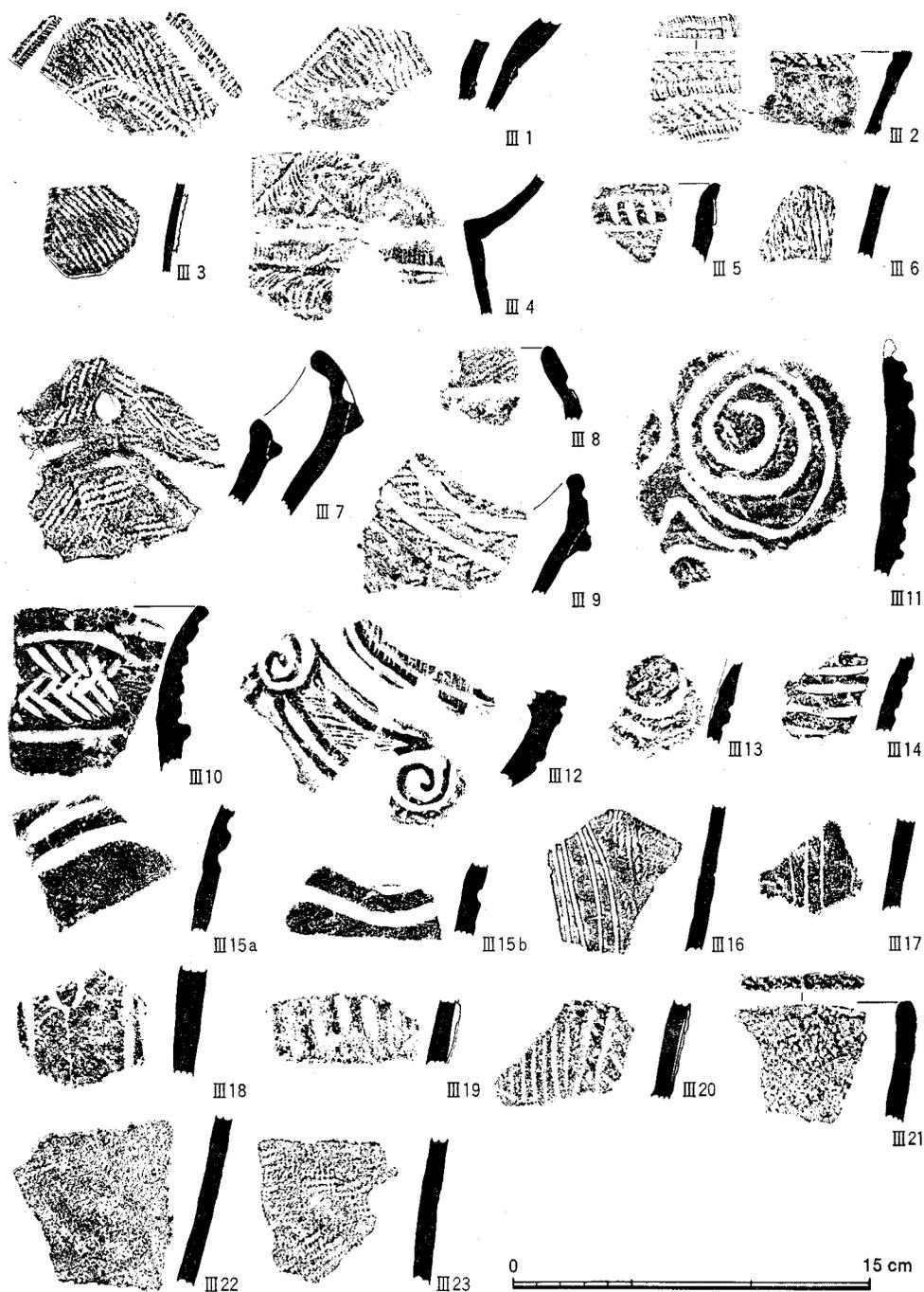


図16 縄文前期の土器(Ⅲ1～Ⅲ3大歳山式), 縄文中期の土器(Ⅲ4船元Ⅰ式, Ⅲ5船元Ⅱ式, Ⅲ6里木Ⅱ式, Ⅲ7～Ⅲ23北白川C式) 縮尺1/3

遺 物

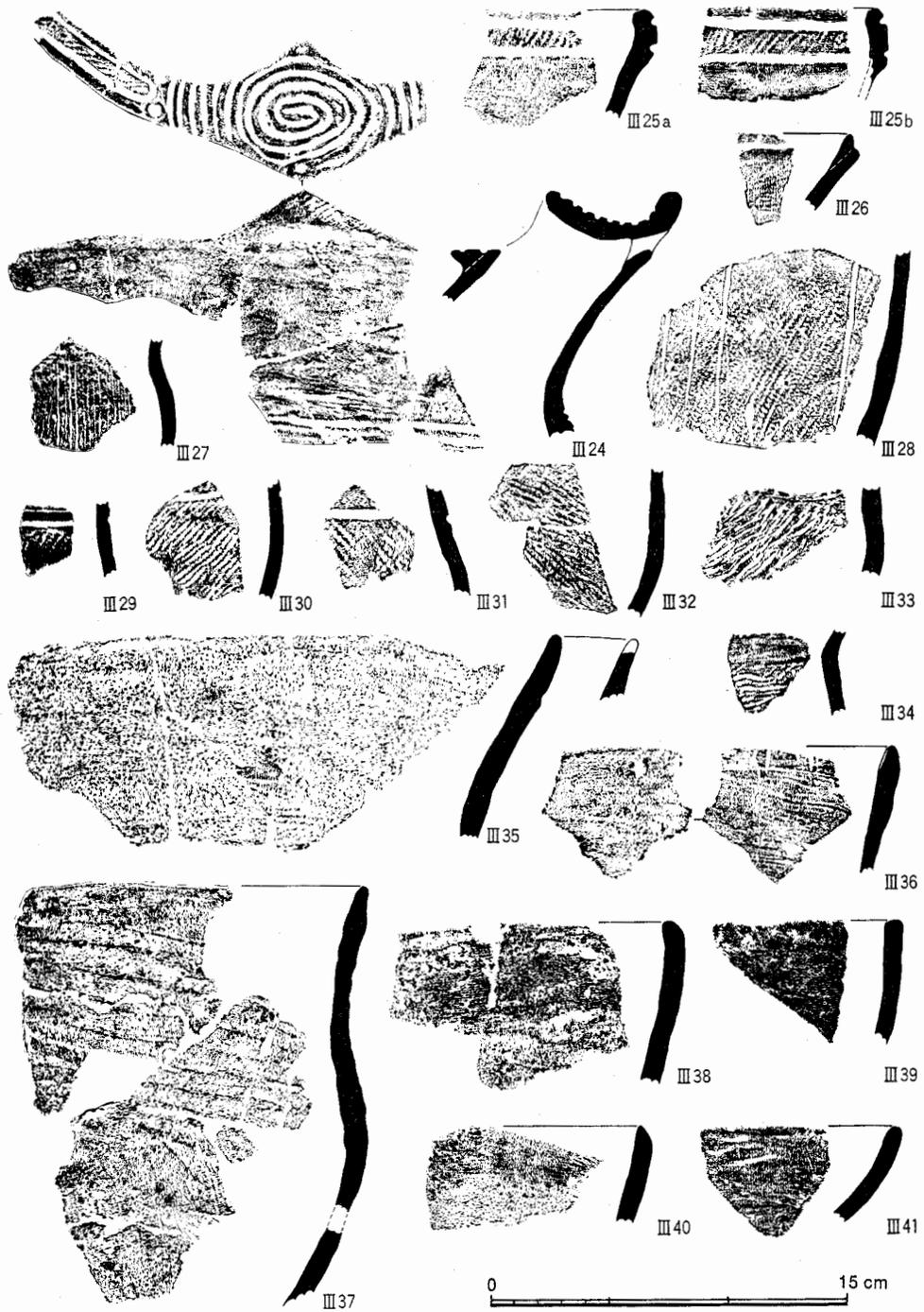


図17 縄文後期の土器(Ⅲ24～Ⅲ41北白川上層式) 縮尺1/3

Ⅲ4～Ⅲ23は中期の土器。Ⅲ4は口頸部がキャリパー形を呈する深鉢。幅17mmを測る幅広のC字爪形文を口頸部には波状に、胴上部には横位に浅く、密に施文している。中期初頭、船元Ⅰ式に属する。Ⅲ5は口縁部直下に2条の沈線を横走させ、沈線間に右下がりの刻みを加えている。船元Ⅱ式。Ⅲ6は捺糸文を地文にもつ深鉢の胴部。中期後葉、里木Ⅱ式。Ⅲ7～Ⅲ23は中期末葉、北白川C式に属する深鉢。器種の分類に関しては、泉拓良の分類〔泉ほか85〕によった。Ⅲ7～Ⅲ11・Ⅲ13～Ⅲ15は口縁下に口縁部文様帯を配する深鉢A類。Ⅲ7～Ⅲ10は口縁部と胴部を隆帯で区画する深鉢A1類、Ⅲ11・Ⅲ13～Ⅲ15は口縁部と胴部の境に横位に連弧文をめぐらせる深鉢A4類である。Ⅲ12は口縁部が屈曲し、突起状山形口縁をもつ深鉢C類。胴上部に隆帯で渦巻区画文を描き、区画内には多条沈線を充填している。口縁部も同様の文様配置をとるものと思われる。Ⅲ16～Ⅲ20は深鉢A～C類の胴部。Ⅲ21～Ⅲ23は地文に縄文のみをもつ深鉢D類。Ⅲ21は口唇にも縄文を加えている。

Ⅲ24～Ⅲ41は後期前葉の土器。Ⅲ25～Ⅲ28は、縁帯文土器。Ⅲ24は口唇を内側に肥厚させ、主文様部が突起状となる。主文様に渦巻文と弧線文を描き、従文様に長方形区画文を描いて、LR縄文を充填している。頸部は外反し、頸胴部の境には数条の沈線がめぐる。Ⅲ25は屈曲した口縁部に沈線を2条横走させ、LR縄文を充填している。Ⅲ26は内折した短い口縁部に1条の沈線がめぐり、関東の堀之内Ⅰ式に通じる特徴をもつ。Ⅲ27～Ⅲ34は胴部資料。Ⅲ27は条線文を垂下させる。Ⅲ28は地文にLR縄文を施してから沈線を3～5条垂下させる。Ⅲ29～Ⅲ34は胴部に縄文のみを加えた土器で、頸胴部の境に界線として沈線を加えるⅢ29～Ⅲ31と加えないⅢ32～Ⅲ34がある。Ⅲ35～Ⅲ40は無文深鉢。Ⅲ35は外面二枚貝による調整痕を残し、口縁部に半円形のえぐり込みを有する。Ⅲ36は口縁部内面に断面V字形の刻みを有する。Ⅲ41は無文浅鉢。後期の土器のうち、Ⅲ24～Ⅲ26・Ⅲ28は北白川上層式Ⅰ期に属し、他の土器も北白川上層式としてとらえられよう。

以上、説明を加えた前期末葉～後期前葉の土器の大部分は、茶褐色粘質土および黒褐色粘質土より出土しており、さらに上層からも少量出土していて、前期・中期・後期の土器がそれぞれ層位的に区別される出土状態は示していなかった。晩期後葉の土器は淡褐色粘質土以上で出土していて、それより下位の土層からは見つからないので茶褐色粘質土、黒褐色粘質土に関しては後期までの堆積層であることがわかる。

一方、晩期後葉の土器は、淡褐色粘質土から上位の層およびSK3～SK5から出土していて、後で述べるように、層位・遺構によって土器の様相に差異がある。

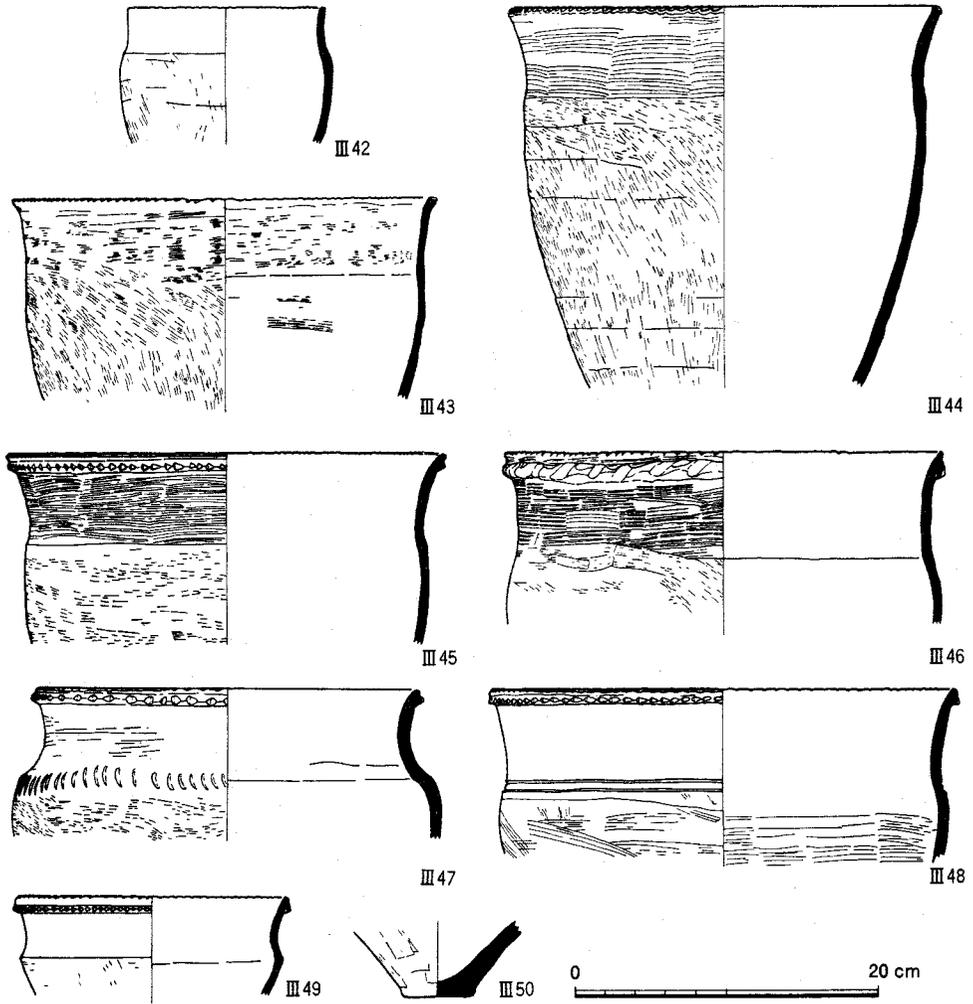


図18 SK 5 出土縄文土器(1)(Ⅲ42～Ⅲ50滋賀里Ⅳ式) 縮尺1/5

Ⅲ42～Ⅲ60はSK 5 出土土器。Ⅲ55は頸部に2条の横線をめぐらし、胴部に3条1単位の沈線を曲線的に配する。後期前葉、北白川上層式1期に属し、混入品と判断される。Ⅲ42～Ⅲ44・Ⅲ56・Ⅲ57は、凸帯をもたない無文深鉢。口唇には、Ⅲ57を除いて刻みを加えている。Ⅲ57は内面に粘土帯の接合痕が明瞭に残る。Ⅲ45～Ⅲ49・Ⅲ58・Ⅲ59は1条刻目凸帯文深鉢。口唇上にもすべて刻みを加えている。Ⅲ47は肩部に半截竹管状工具によるC字爪形文がめぐる。また、Ⅲ48は同様の位置に半截竹管状工具による沈線が横走る。刻みは篋状工具によるD字刻みが大多数だが、Ⅲ46は凸帯上のみ指おさえによる刻みが施される。Ⅲ49は口径17.8cmを測る、小型の深鉢である。Ⅲ60は深鉢の頸胴部。頸部は撫で、

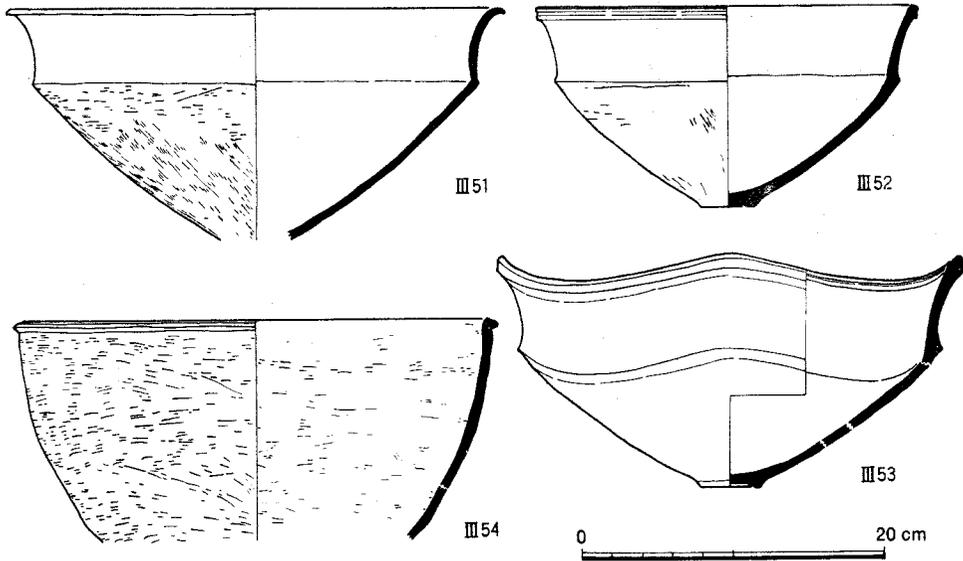


図19 SK 5 出土縄文土器(2)(III 51～III 54滋賀里Ⅳ式) 縮尺1/5

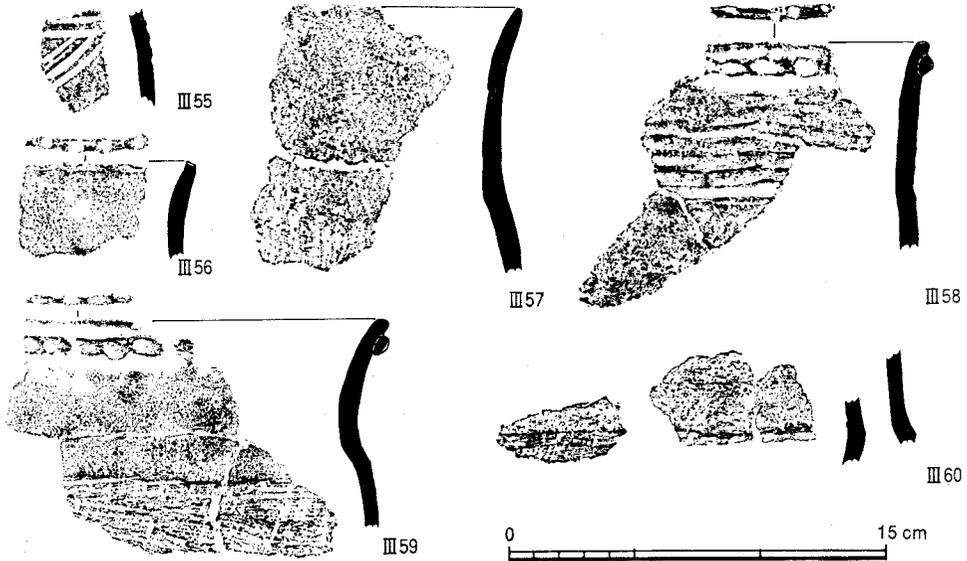


図20 SK 5 出土縄文土器(3)(III 55北白川上層式, III 56～III 60滋賀里Ⅳ式) 縮尺1/3

胴部は削って仕上っている。III 50は深鉢底部。SK 5 出土の深鉢の底部はこの1例のみである。III 51～III 53は口頸部が「く」字形に屈曲する浅鉢。III 51は口頸部が外反し、口縁端部は尖状を呈する。胴部は削って仕上げ、他は研磨する。III 52は口縁直下に、刻みのない凸帯をめぐるせる。III 53は波状を呈し、上からみて波頂部が角ばって見える浅鉢。口縁端

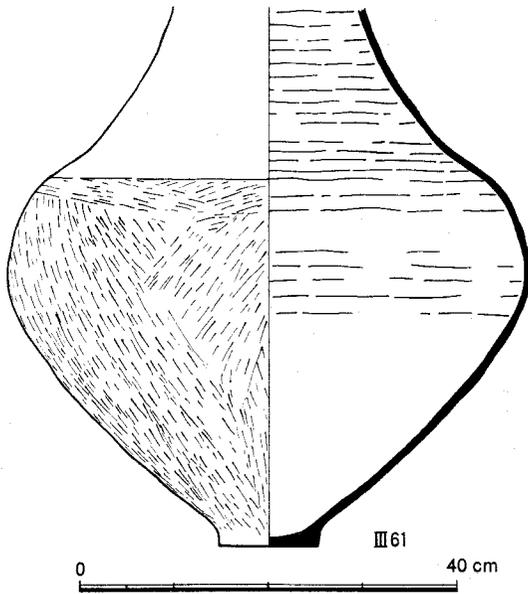


図21 SK 4出土の縄文土器 縮尺1/8

部と肩部に断面三角形の凸帯をめぐらせ、口縁部内面にえぐり状の沈線を施す。全面、丁寧に研磨する。Ⅲ54は刻みのない凸帯文を口縁部に貼付けたボウル状を呈する浅鉢。体部は削って仕上げる。

Ⅲ61はSK 4出土土器。口縁部を欠失する。残存器高56.8cm、胴部最大径55.0cmを測り、胴部が張り出す大型の壺である。胴部外面には削り痕を残し、頸部外面は無で仕上っている。内面上半には、上下幅1.5~2cmの粘土帯の継目が明瞭に残っている。底部は、低い明瞭な立ち上がりをもつ平底である。混和材として、角閃石を多量に含む。大型の壺は船橋式より顕著になる器種であり、本例は船橋式~長原式の時間幅でとらえることができよう。

Ⅲ62~Ⅲ102は包含層出土土器。Ⅲ80~Ⅲ82は頸部が外反する無文深鉢で、口唇上に刻みを有する。滋賀里Ⅲb式の主体を占める深鉢であるがSK 5出土の一括資料からもうかがえるように滋賀里Ⅳ式にまで残存すると考えてもよい。1条凸帯文深鉢と同一層位より出土しており、また、滋賀里Ⅲb式に特徴的な浅鉢がまったく出土していないことを考慮すれば、滋賀里Ⅳ式に属する可能性が高いであろう。

Ⅲ62~Ⅲ69・Ⅲ83~Ⅲ95は1条凸帯文深鉢。凸帯には篋状工具によるD字、O字刻みが施されるが、Ⅲ64は二枚貝、Ⅲ67は半截竹管を用いた刻みが加えられている。口唇は面取りする例が多いがⅢ67・Ⅲ69は刻みを加えておらず、面取りも部分的で安定していない。Ⅲ62は凸帯が口縁端部の位置にあり、凸帯高が低いことも含めてやや異質である。凸帯以外に文様を加える例が少数ある。Ⅲ66は頸部に篋状工具による斜格子文、肩部に同じ工具で沈線を横走させ、刻みを加えている。Ⅲ67は肩部に篋描きによる浅い沈線が横走する。

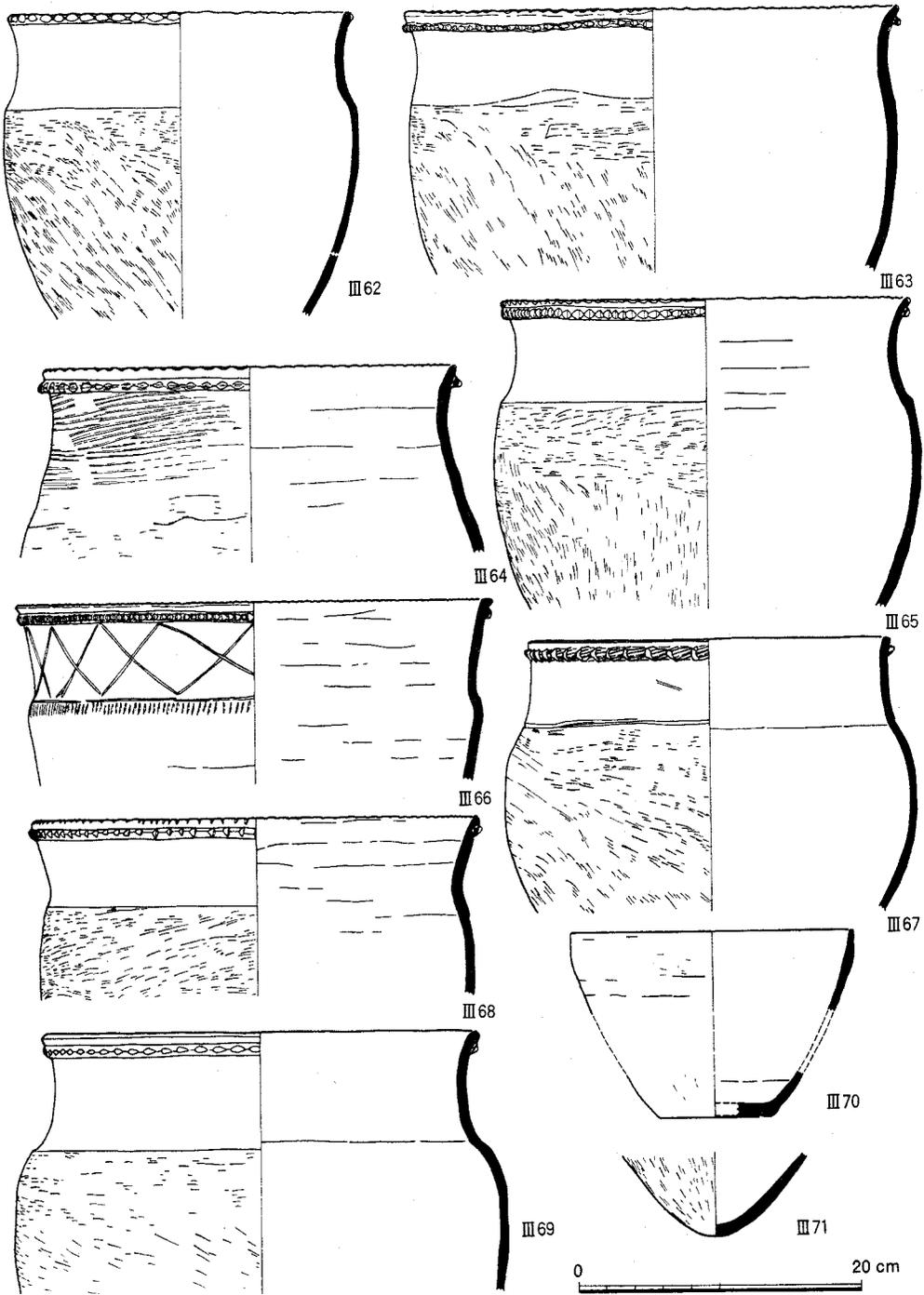


図22 縄文晩期の土器(Ⅲ62～Ⅲ71滋賀里Ⅳ式) 縮尺1/5

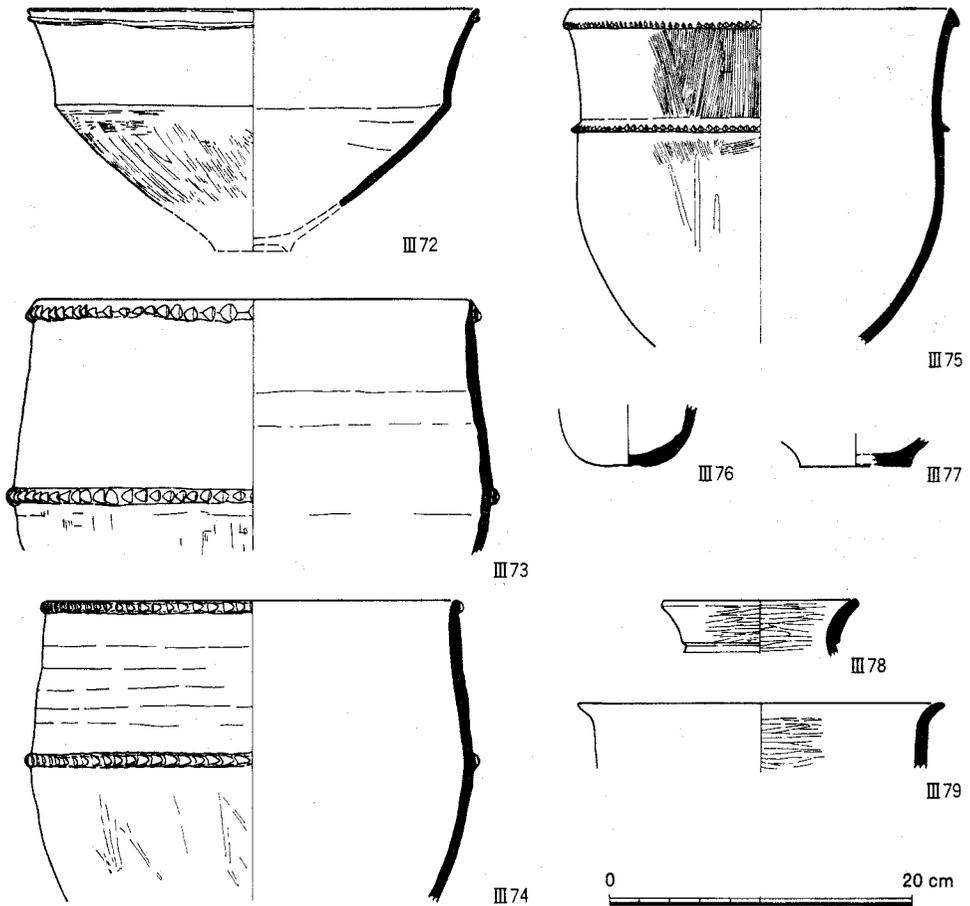


図23 縄文晩期の土器(2)(Ⅲ72滋賀里Ⅳ式, Ⅲ73～Ⅲ75長原式, Ⅲ76・Ⅲ77底部), 弥生前期の土器(Ⅲ78・Ⅲ79) 縮尺1/5

底部まで全体の形状のわかる例はないが、Ⅲ71のような丸底になるものが一般的であろう。

Ⅲ70は直線的に立ち上がる鉢。磨いて仕上げる。Ⅲ72・Ⅲ99～Ⅲ102は口頸部が「く」字形に屈曲する浅鉢。Ⅲ72・Ⅲ100は平口縁で刻みのない凸帯を口縁直下にもつ。Ⅲ100は口縁部内面にえぐりを加え、肩部に段を有する。Ⅲ99は波状口縁で、肩部にえぐるような沈線が横走する。胴部外面は削り、他は研磨する。Ⅲ102は内外面、丁寧に撫でて仕上げる。

これら1条凸帯文深鉢および鉢・浅鉢は、ほぼ滋賀里Ⅳ式に比定できる。ただし、口唇を刻まない深鉢はやや新しい様相であり、Ⅲ67の肩部に1条沈線をめぐらせる深鉢は、2条凸帯出現期に属すると考えられている〔泉89〕。また、Ⅲ99の波状口縁浅鉢はSK5出土のものと比較して肩部の凸帯が沈線に変化していて、2条凸帯出現期に属する伊丹市口酒

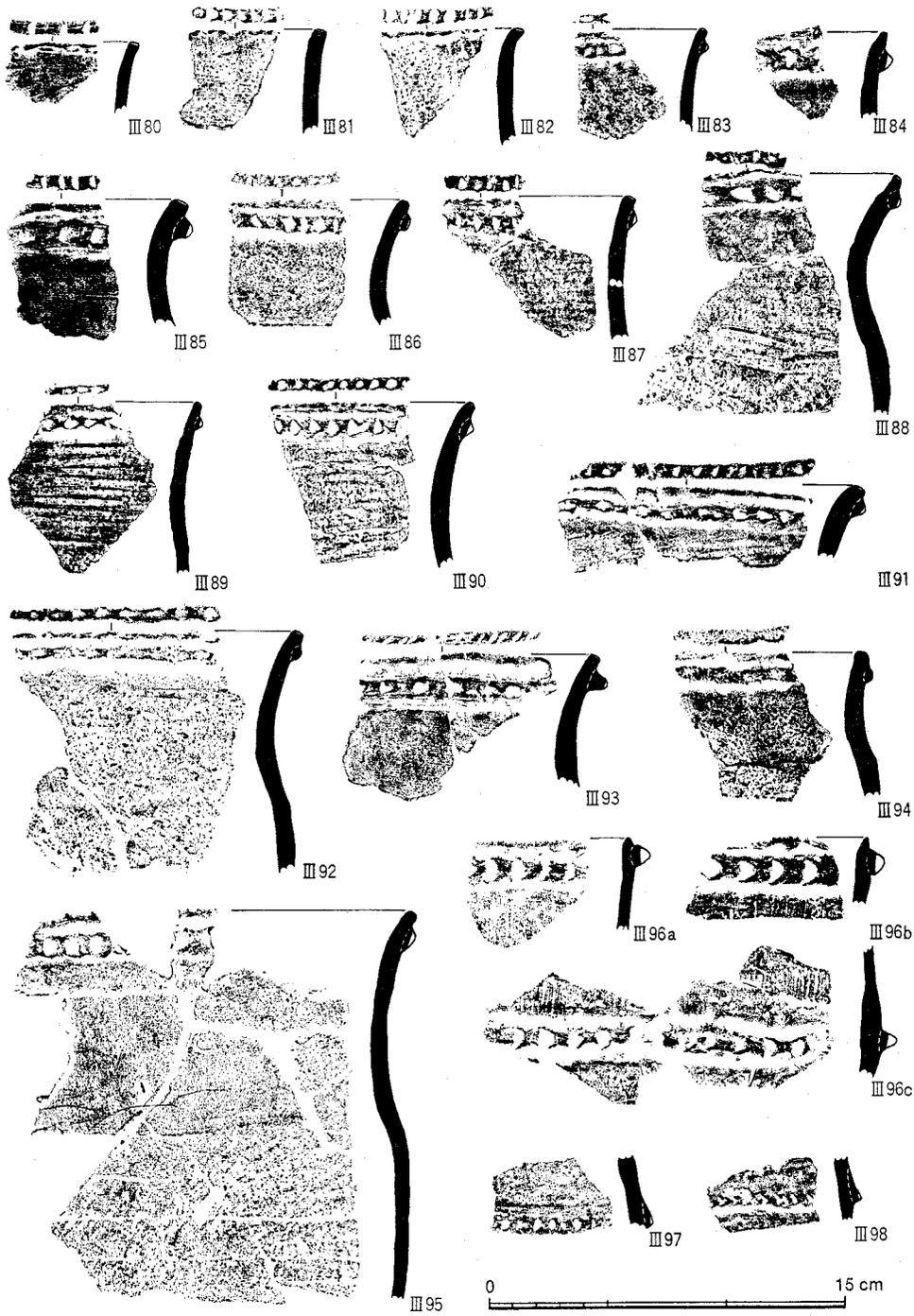


図24 縄文晩期の土器(3)(III80～III95滋賀里Ⅳ式, III96船橋式, III97・III98長原式) 縮尺1/3

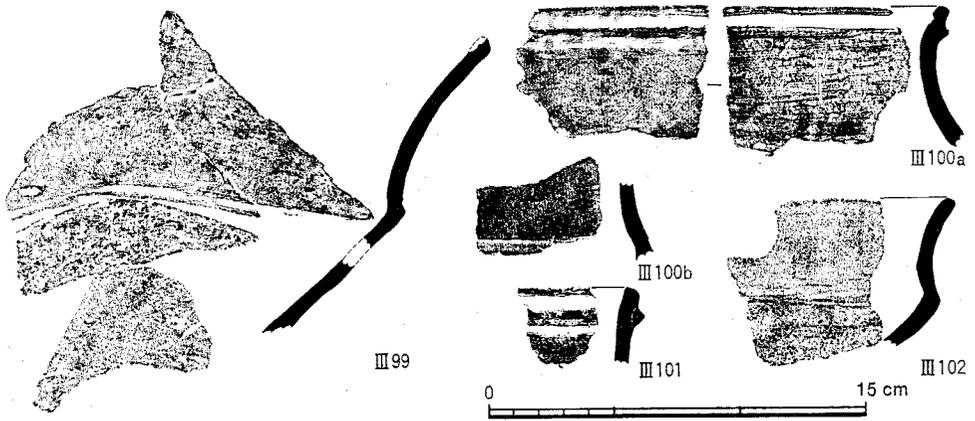


図25 縄文晩期の土器(4)(Ⅲ99～Ⅲ102滋賀里Ⅳ式) 縮尺1/3

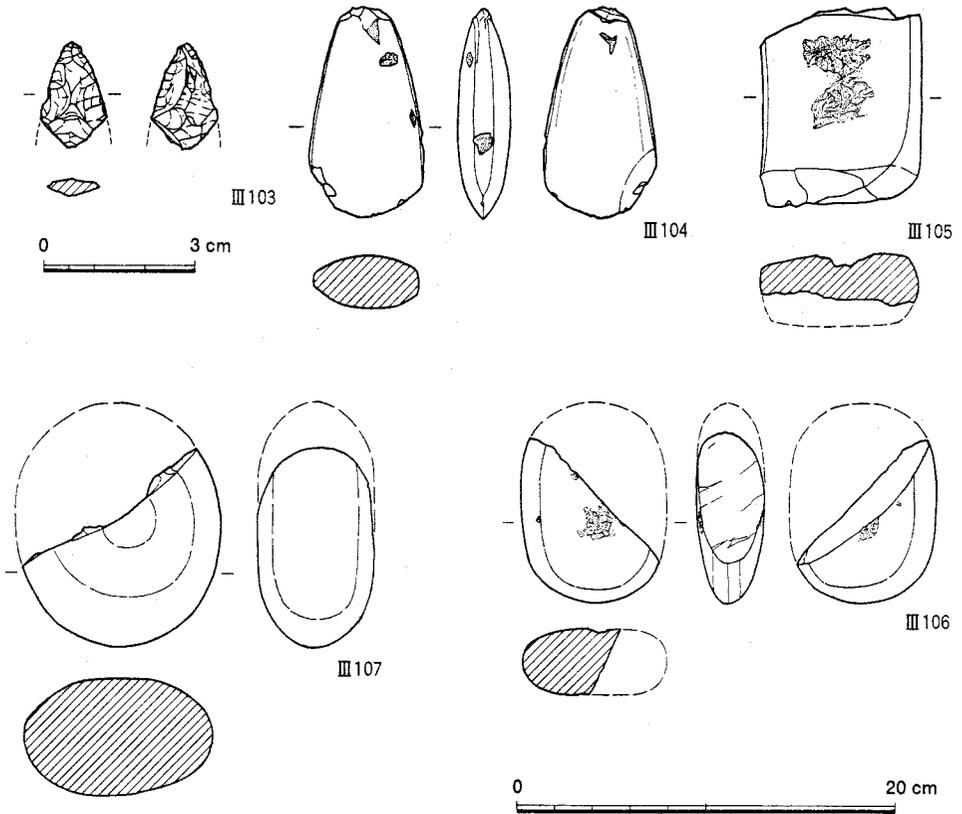


図26 石鏃(Ⅲ103) 縮尺2/3, 磨製石斧(Ⅲ104), 凹石(Ⅲ105, Ⅲ106), 磨石(Ⅲ107) 縮尺1/4

井遺跡第6次調査第2トレンチの資料中に類例が求められる〔浅岡88pp.136, 140〕。

Ⅲ96は、口縁直下と肩部に凸帯のつく深鉢。凸帯にはD字刻みを施す。肩部で屈曲しない形態は長原式に類似するが、刻みの形状と口縁部凸帯の位置は船橋式に特徴的なものである。Ⅲ73～Ⅲ75・Ⅲ97・Ⅲ98は口縁端部と肩部に凸帯を有する深鉢で長原式に比定できる。Ⅲ75は凸帯貼付け前に、細密条痕で縦位に調整し、胴下半はさらに磨いている。京都市高倉宮下層遺跡に、このような調整を施した類例がある〔京都文化財団88pp.87〕。Ⅲ76・Ⅲ77は底部。Ⅲ76は丸底、Ⅲ77は平底の形態を呈する。

Ⅲ78・Ⅲ79は弥生前期の土器。Ⅲ78は壺の口縁部で、内外面ともに磨いて仕上げる。口縁部下端に明瞭な段をもつ。Ⅲ79は甕で、内外面ともに磨いている。

以上、説明した縄文晩期、弥生前期の土器のうち、滋賀里Ⅳ式が淡褐色粘質土、淡茶褐色砂質土より出土しているのに対し、船橋式、長原式、弥生前期の土器は黄白色シルト、暗茶褐色土より出土している。層位的なあり方では、滋賀里Ⅳ式と船橋式・長原式・弥生前期の2つのまとまりに分離できる。このまとまりは、北隣のBE33区の調査でもみとめられており〔泉・三宅86〕、本調査区の北西約250mに位置するBF31区の調査でも、層位的に、滋賀里Ⅲb式・滋賀里Ⅳ式と船橋式・長原式のまとまりに分かれる出土状況を示している〔清水ほか87〕。遺跡の継続性を考える上で、注目すべき現象であろう。

出土した石器には石鏃、削器、磨製石斧、凹石、磨石、剥片、石核がある。Ⅲ103は石鏃。サヌカイト製で基部を欠損する。Ⅲ104は定角式磨製石斧。Ⅲ105・Ⅲ106は凹石。Ⅲ106はSK5出土。Ⅲ107は磨石。両平坦面とも磨った痕跡を有する。

(2) 歴史時代の出土遺物 (図版12, 図27)

Ⅲ108～Ⅲ119は灰褐色砂質土出土の遺物である。Ⅲ108～Ⅲ110は「て」字状口縁手法の土師器皿。Ⅲ111・Ⅲ112は緑釉陶器の椀で、Ⅲ111は土師質、Ⅲ112は須恵質にそれぞれ焼成されている。Ⅲ113は緑釉陶器の皿で見込みに陰刻による劃花文を施す。Ⅲ114・Ⅲ115は土師器甕。Ⅲ115は口径約27cmを測る大型の甕。Ⅲ116は土師器の高台付きの鉢。Ⅲ117は須恵器の円面硯。脚部に篋で縦方向の沈線を加えている。Ⅲ118・Ⅲ119は黒色土器の甕。ともに口縁部内面には篋磨きを施す。円面硯をのぞき、いずれも10世紀ごろの遺物と考えられる。

Ⅲ120～Ⅲ125は黄色砂混りの茶褐色土出土の遺物である。Ⅲ120～Ⅲ123は「て」字状口縁手法の土師器皿。Ⅲ124・Ⅲ125は土師器の杯。Ⅲ124は口縁端部を小さく外に折り曲げる。これらは、いずれも10世紀ごろの遺物と考えられる。

遺 物

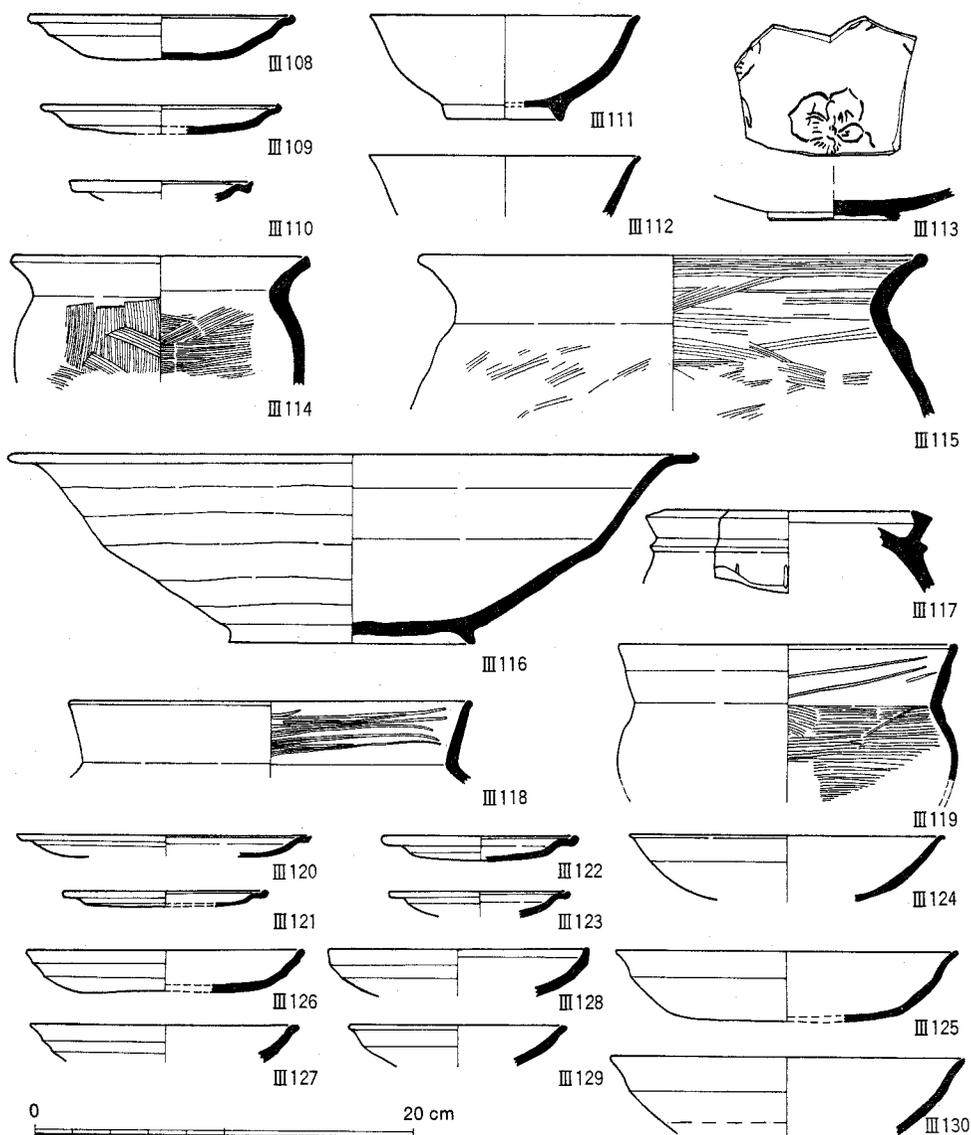


図27 灰褐色砂質土出土遺物(Ⅲ108～Ⅲ110・Ⅲ114～Ⅲ116土師器, Ⅲ111～Ⅲ113緑釉陶器, Ⅲ117須恵器, Ⅲ118・Ⅲ119黒色土器), 黄色砂混り暗褐色土出土遺物(Ⅲ120～Ⅲ125土師器), 茶褐色土出土遺物(Ⅲ126～Ⅲ129土師器, Ⅲ130白磁)

Ⅲ126～Ⅲ130は茶褐色土出土の遺物である。Ⅲ126・Ⅲ127は2段撫で素縁手法の調整を施す土師器皿。Ⅲ127は口縁部がやや外反する。Ⅲ128は2段撫でつまみ手法の土師器皿。Ⅲ129は2段撫で素縁手法の土師器小皿。Ⅲ130は白磁碗。口縁は外面下端の横撫でにより外反する。外面下半部は露胎で、削りの痕を残す。以上の遺物は12世紀のものである。

5 SK5出土縄文土器の編年的位置づけ

前節で述べたように、SK5から出土した土器は、狭い範囲から密集して発見されており、一括性が高く、時期的限定性の高い資料であると判断される。ここでは、個々の土器の特徴や系譜等、さらに詳しく検討し、本土器群の位置づけについて考察したい。

無文深鉢は頸部が外反し、胴部がやや膨らむ形態をとる。Ⅲ57を除いて口唇にも刻みを加えている。外面の調整手法は、頸部では撫でが多く、胴部では削りが主体をしめる(表1)。工具を変えるかあるいは調整の方向を変えて、頸部と胴部を区別している。こうした特徴をもつ深鉢は滋賀里Ⅲb式の主体をしめる器種であるが、滋賀里Ⅳ式の基準資料と考えられる東大阪市塚塚遺跡中・下層出土土器[泉86b]にも存在している。次に述べる、滋賀里Ⅳ式の1条凸帯文深鉢と共存していると考えても問題はないであろう。滋賀里Ⅲb式段階では、内面、頸胴部の境に明瞭な稜が形成されるのに対し、本資料ではなだらかに移行している点が細かな差異として指摘でき、年代的变化が予測される。

1条凸帯文深鉢は出土土器の主体をしめる器種で、屈曲する肩部を有し、口縁部よりやや下がった位置に刻目凸帯文を施すものである。滋賀里Ⅳ式の主要な器種である。凸帯上および口唇上にはすべて刻みを有する。凸帯の刻みの形態は表2のとおりである。なお、凸帯の刻みの分類は、家根祥多の分類[泉ほか85]によった。すべてa1型に属し、D字、O字刻みが多い。特殊なものとして、Ⅲ46は指でねじるように刻んでいる。また、Ⅲ45が工具に二枚貝を使用しているほかは篋状工具を用いている。外面の調整は、頸部では撫でがやや多いが、二枚貝とほぼ拮抗しており、胴部では削りが多く、撫でもみられる(表1)。頸胴部は調整手法を変えるのが原則である。また、肩部に半截竹管状工具を用いて、Ⅲ47はC字爪形文、Ⅲ54は横走沈線を施す。爪形文は瀬戸内地方の原下層式や前池式に特徴的

表1 深鉢外面の調整手法 (個体数)

調整手法 器種	頸部			胴部		
	撫で	削り	二枚貝	撫で	削り	二枚貝
無文深鉢	4	1	1	1	4	0
1条凸帯深鉢	5	0	3	2	5	0

表2 凸帯の分類 (個体数)

深鉢A類 凸帯a1	刻目				
	D	小DV	O	V	特殊
	4 (50%)	0 (0%)	3 (37.5%)	0 (0%)	1 (12.5%)

表3 SK5の器種組成

	個体数
深無文深鉢	6 (33.3%)
鉢1条凸帯深鉢	8 (44.3%)
小計	14 (77.6%)
波状口縁方形浅鉢	1 (5.6%)
浅平口縁凸帯浅鉢	1 (5.6%)
鉢平口縁浅鉢	1 (5.6%)
ポウル形凸帯浅鉢	1 (5.6%)
小計	4 (22.4%)
計	18 (100%)

な文様要素であり、横走沈線は爪形文の退化形態と推定することもできる。

浅鉢は、口頸部が比較的長く、肩部で屈曲するものとボウル形の単純な形態のものがあるがいずれも滋賀里Ⅳ式の浅鉢としてとらえられるものである。前者は3点出土して、それぞれ細部の形状を異にする。Ⅲ53はいわゆる波状口縁方形浅鉢である。方形浅鉢は、長頸の鍵形波状口縁浅鉢にその祖型を求め、形状の変化から数段階の変遷が型式学的にとらえられている〔泉89〕。鍵形口縁を残す段階、屈曲部が凸帯に変化した段階、凸帯が沈線に変化した典型的な方形浅鉢の段階、方形を呈さなくなる段階と大きくその変遷をとらえれば、本資料はその第2段階とすることができる。Ⅲ52の平口縁で凸帯のつく浅鉢も同様に長頸の鍵形口縁の浅鉢からの系譜でとらえられよう。凸帯の形状はⅢ52・Ⅲ54が断面蒲鉾形で、Ⅲ59は三角形を呈している。Ⅲ53の凸帯が断面三角なのは口縁の屈曲部が凸帯に転化したためと理解できる。凸帯のつかない長頸浅鉢は、滋賀里Ⅲb式の長頸浅鉢から直接的な系譜でたどられよう。

深鉢の底部と思われるものが1点出土している。わずかに上方へ立ち上がり、外傾する平底を呈する。外面は縦方向の削りの後、軽く撫でており、内面は撫でて仕上げている。底部は滋賀里Ⅳ式まで丸底でそれ以降、平底が2条凸帯の出現とともに九州地方からの影響によって出現してくるととらえられており〔家根81・84〕、共伴とすればもっとも古い例となる。混入の可能性も含めて、類例の増加をまって再考したいと考える。

出土土器の器種組成は表3のとおりである。量的にやや少ないという問題は残るが、これはごく短期間に使用された土器のセットを反映したものと想定される。深鉢と浅鉢の比が3対1と4対1の間を示し、この割合は西日本の縄文中期末以降の組成比と考えられている値であり〔泉86b〕、伝統的な器種組成を保っていることをみてとれる。

以上、SK 5 出土の土器について、細部の特徴についてふれながら、年代や系譜等の問題について若干言及してきた。平底底部の存在など一括性にやや疑問を残す要素も存在するが、ほぼ滋賀里Ⅳ式に属する時間的限定性の高い資料であると評価できよう。

滋賀里Ⅳ式をめぐっては、その後半段階あるいは滋賀里Ⅳ式と船橋式の間位置づけられる時期として、近年、「口酒井期」が設定されている〔泉86a〕。「口酒井期」には少量ではあるものの既に2条凸帯が出現しており、方形浅鉢も凸帯が沈線に変化した、さきの分類の第3段階のものであり、また、凸帯のつかない無文深鉢が消滅していることなど、SK 5 出土資料とは様相が大きく異なり、「口酒井期」はSK 5 よりも新しい段階のものとみとめることができる。

一方、滋賀里Ⅳ式の前半の基準資料としては東大阪市鬼塚遺跡中・下層出土土器が指摘されている〔泉86b〕。鬼塚遺跡中・下層資料とSK5出土資料はよく似た構成を示しており、近似した年代が想定される。ただし詳細に検討すると、鬼塚遺跡中・下層ではSK5にない鍵形口縁短頸浅鉢があること、波状口縁浅鉢は鍵形口縁を呈すること、深鉢では、口唇や凸帯上に刻みを有さないものが一定量あること、肩部がシャープに折れ曲がり、稜を形成すること、頸部調整の二枚貝が少ないこと、あるいは爪形文の位置がSK5では胴部上端なのに対して、頸部下端の位置を占めることなど細かな点では様相を異にしていることがわかる。こうした様相の差異が年代差なのか、あるいは地域差・系統差を反映しているのかは、慎重な検討を要する問題であるが鬼塚遺跡中・下層にある鍵形口縁短頸浅鉢が滋賀里Ⅲb式の系譜をひく古い様相を有していることや鬼塚遺跡中・下層の波状口縁浅鉢はさきの分類の第1段階、SK5のものは第2段階に属することを重視すれば、SK5出土土器は鬼塚遺跡中・下層出土土器よりもやや新しい様相を示していると推定することができよう。ただし、SK5出土土器は量的にやや少ない点や一括性の厳密な検討等、問題を残しているので、ここでは滋賀里Ⅳ式の前半期が年代的にさらに細かくとらえられる可能性があることを指摘するにとどめ、今後に対する問題提起としておきたい。

以上、SK5出土土器から派生する問題についてふれた。すでに、土器の様相についてみたように、そしてまた、この段階に稲作の波及が想定されているように〔泉86a〕、「口酒井期」は大きな変革の開始期であり、土器の変化という点では2条凸帯の出現をもって、それ以前と大きく区別することができる。2条凸帯出現前段階に位置づけることができるSK5出土土器は、稲作をはじめとした新しい要素が西方より流入し、土器も大きく変容していく直前段階の、縄文的器種組成をよく保持した姿として理解することができるであろう。

6 小 結

本調査区を含む北白川追分町縄文遺跡は、過去数次にわたる発掘調査によって、地点によって検出される遺構の種類や時期が異なっていることが明らかになりつつある（図11）。中期の遺跡としては123地点の竪穴住居跡〔清水84〕、後期のものとしては11地点の甕棺・配石墓〔中村74b〕、晩期のものとしては16地点の集石墓〔吉野ほか77〕などがある。このほか、125地点では晩期の河川〔泉・三宅86〕を、また、56地点では晩期に埋没した、北白川扇状地の微高地北西斜面と、西に広がる後背湿地を検出した。後背湿地を埋める泥炭質

小 結

土からは、トチ、カン、クルミなどの堅果類が多量に出土しており、56地点のあたりが食料採集のひとつの場であったと考えられている〔京大埋文研85〕。このような調査の結果から、微高地上を住居や墓地に利用し、周辺を食料採集の場などに利用していたことが遺跡のひろがりの中でとらえられつつある。

本調査区のSK5からは、多量の土器が出土し、その東側において同じ検出面で焼土坑SK6を検出したこととあわせて、晩期後葉、滋賀里Ⅳ式期にはここで生活が営まれていたことをうかがわせる。また、滋賀里Ⅳ式土器の分布は調査区の南半にかたよっており、この時期の遺跡の中心はやや南よりにあったものと推定される。

また、SK4からは晩期後葉、船橋式～長原式に属する口縁部を欠く大型の壺が1個体のみ出土した。胎土に角閃石を多量に含む、いわゆる生駒西麓産の土器の特徴を有している。SK4は墓などのある特殊な性格をもった遺構である可能性がある。

今回の調査で出土した遺物は縄文晩期後葉の土器が主体をしめている。SK5出土土器は、すでに述べたように滋賀里Ⅳ式の編年細分を進めるうえで重要な資料となろう。また、それ以外にも縄文晩期後葉の良好な土器や弥生前期のもっとも古い特徴を有する土器などがみつかり、京都盆地東部における縄文から弥生への変遷を明らかにするうえでの新たな資料とすることができる。

縄文晩期の土器に関して、立命館大学の家根祥多氏、古代学協会の南博史氏、岡山県古代吉備文化財センターの平井勝氏より有益なご教示をいただいた。末筆ながら、お礼申し上げます。

参 考 文 献

- 浅岡俊夫 1988年 「伊丹市口酒井遺跡の凸帯文土器」『歴史学と考古学』高井悌三郎先生喜寿記念論集
- 石田志朗・中村徹也 1972年 『京都大学理学部構内遺跡発掘調査の概要』
- 泉 拓良 1977年 「京都大学植物園遺跡」『佛教藝術』115号
- 1986年 a 「縄文と弥生の間—稲作の起源と時代の画期—」『歴史手帳』14-4
- 1986年 b 「縄文晩期から弥生時代—西日本における研究の現状と課題—」『日本考古学協会昭和61年度大会研究発表要旨』
- 1989年 「凸帯文系土器様式」『縄文土器大観』4
- 泉 拓良・三宅由美 1986年 「京都大学北部構内 B E 33区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』
- 泉 拓良・家根祥多・森本晋・玉田芳英 1985年 「遺物」『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ—北白川追分町縄文遺跡の調査—』
- 五十川伸矢 1981年 「京都大学本部構内 A T 27区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
- 1986年 「京都大学医学部構内 A N 20区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』
- 1988年 「鴨東白河の鋳物工房—京都大学構内の鋳造に関する遺跡—」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度』
- 五十川伸矢・浜崎一志 1989年 「京都大学病院構内 A J 18・A J 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
- 梅原末治 1923年 「京都帝国大学農学部敷地ノ石器時代遺跡」『京都府史蹟勝地調査會報告第5冊』
- 1935年 「京都北白川小倉町石器時代遺跡調査報告」『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告第16冊』
- 1936年 『摂津阿武山古墓調査報告』『大阪府史蹟名勝天然記念物調査報告 第7輯』
- 岡田保良・清水芳裕・吉野治雄 1980年 「京都大学吉田キャンパスの試掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』
- 小野山節・都出比呂志 1973年 『高槻市安満遺跡の条里遺構』
- 小野山節・中村徹也 1976年 『京都大学教養部 A 号館増築予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要』
- 川上 貢 1977年 「京都大学構内における史跡の文献的考察」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 京大調査会(京都大学農学部構内遺跡調査会・京都大学理学部附属瀬戸臨海実験所構内遺跡調査会)
1977年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51年度』
- 京大埋文研(京都大学埋蔵文化財研究センター)
1978年 a 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和52年度』
1978年 b 『京都大学埋蔵文化財調査報告第1冊—京大農学部遺跡 B G 36区—』
1979年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和53年度』
1980年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和54年度』

参 考 文 献

- 1981年 a 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ——白川北殿北辺の調査——』
 1981年 b 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和55年度』
 1983年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和56年度』
 1984年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』
 1985年 『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅲ——北白川追分町縄文遺跡の調査——』
 1986年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和58年度』
 1987年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』
 1988年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和60年度』
 1989年 『京都大学構内遺跡調査研究年報 1986年度』
 京都文化財団 1988年 『平安京左京三条四坊四町』（『京都文化博物館(仮称)調査研究報告』
 第2集）
 佐和隆研・濱田隆 1984年 『密教美術大観』
 清水芳裕 1984年 「京都大学北部構内 B F 33区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報
 昭和57年度』
 清水芳裕・吉野治雄 1981年 「京都大学医学部構内 A P 19区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査
 研究年報 昭和55年度』
 清水芳裕ほか(京都大学北部構内 B F 31区調査班) 1987年 「北白川追分町遺跡の発掘調査」『京都大
 学構内遺跡調査研究年報 昭和59年度』
 島田貞彦 1924年 「京都市北白川追分町発見の石器時代遺跡」『考古学雑誌』第14巻第5号
 島田貞彦・水野清一・小川五郎・三宅宗悦 1929年 「摂津国高槻「摂津農場」石器時代遺跡調査報
 告」『人類学雑誌』第44巻第7号
 杉山信三 1962年 『院の御所と御堂』（『奈良国立文化財研究所学報』第11冊）
 中村徹也 1973年 『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』
 1974年 a 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅰ』
 1974年 b 「京都大学理学部ノートバイオトロン実験装置室新営工事に伴う埋蔵文化財
 発掘調査の概要』
 1975年 『京都大学農学部総合館北棟建設予定地内埋蔵文化財発掘調査の概要Ⅱ』
 奈良博(奈良国立博物館) 1977年 『経塚遺宝』
 藤岡謙二郎 1973年 「北白川扇状地と教養部構内発見の遺物包含層並びにその先史地理学的意義」
 『人文』第19集
 家根祥多 1981年 「晩期の土器—近畿地方の土器—」『縄文文化の研究』4, 縄文土器Ⅱ
 1984年 「縄文土器から弥生土器へ」『縄文から弥生へ』
 藪内 清 1955年 『立杭窯の研究——技術・生活・人間——』
 横山浩一・佐原眞 1960年 『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第1部日本先史時代
 吉野治雄ほか1977年 「農学部遺跡 B E 33区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和51
 年度』

京都大学構内遺跡調査要項

京都大学埋蔵文化財研究センター要項

- 第1条 京都大学に埋蔵文化財研究センター(以下「センター」という。)を置く。
- 第2条 センターは、京都大学敷地内の埋蔵文化財についての調査研究及びその保存のため必要な業務を行う。
- 第3条 センターにセンター長を置く。
- 2 センター長は、京都大学の専任の教授をもって充てる。
- 3 センター長の任期は、2年とし、再任を妨げない。
- 4 センター長は、センターの所務を掌理する。
- 第4条 センターに、必要に応じて、助教授、助手その他の職員を置く。
- 第5条 センターに、調査研究及び保存に関する業務を処理するため、研究部を置く。
- 2 研究部に主任を置き、前条の教官をもって充てる。
- 3 主任は、研究部の業務をつかさどる。
- 第6条 センターにセンターの事業に関する基本的計画、人事その他管理運営に関する重要事項を審議するため、運営協議会を置く。
- 2 運営協議会は、次の各号に掲げる委員で組織する。
- (1) センター長
- (2) センターの研究部の主任
- (3) 前2号以外の学識経験者のうちから総長の委嘱した者 若干名
- (4) 事務局長及び施設部長
- 3 センター長は、運営協議会を招集し、議長となる。
- 4 前各項に規定するもののほか、運営協議会の運営に関し必要な事項は、運営協議会が定める。
- 第7条 この要項に定めるもののほか、センターの組織及び運営に関し必要な事項はセンター長が定める。

センター長	西川 幸治(工学部教授)	運営協議会委員	榑原 郁夫(施設部長)
運営協議会委員	小野山 節(文学部教授)	研究部主任	清水 芳裕(文学部助手)
〃	應地 利明(文学部教授)	研究部研究員	五十川伸矢(文学部助手)
〃	川又 良也(法学部教授)	〃	浜崎 一志(工学部助手)
〃	上田 正昭(教養部教授)	〃	宮本 一夫(文学部助手)
〃	足利 健亮(教養部教授)	〃	難波 洋三(文学部助手)
〃	東村 武信(原子炉実験所教授)	〃	千葉 豊(文学部助手)
〃	鎌田 元一(文学部助教授)	〃	西川恵美子(施設部教務補佐員)
〃	山中 一郎(文学部助教授)	事務室	竹内 善隆(施設部事務官)
〃	石田 志朗(理学部助教授)	〃	中村 美代(施設部事務補佐員)
〃	林 昭三(木材研究所助教授)	〃	菅原 令子(施設部事務補佐員)
〃	清水 芳裕(文学部助手)	〃	辰巳ゆかり(施設部事務補佐員)
〃	石井 久夫(事務局長)		

京都大学構内遺跡調査要項

京都大学構内遺跡調査会規約

- 第1条 この会は、京都大学構内遺跡調査会(以下「調査会」という。)と称し、京都大学の委託により同大学構内における建築物新営工事等に伴い必要な敷地内の遺跡調査を行うことを目的とする。
- 第2条 調査会は、事務所を京都市左京区北白川西町財団法人阪本奨学会内に置く。
- 第3条 調査会は、第1条の目的を達成するために次の事業を行う。
- (1) 京都大学の委託により行う当該敷地内の埋蔵文化財についての発掘調査
 - (2) 前号の調査により出土した埋蔵文化財の保存、管理に関する事項の審議
 - (3) 埋蔵文化財の調査に関する発掘調査概要報告書の作成
 - (4) その他必要とする事項
- 第4条 調査会に次の役員を置く。
- (1) 会長 1名
 - (2) 委員
イ 京都大学の学識経験者 若干名
ロ 新営工事等の敷地の属する京都大学の部局の長または部局附属施設の長
ハ 新営工事等の敷地の所在する地域の文化財保護行政当局の推薦する者 若干名
 - (3) 監事 若干名
- 2 会長は、前項2号イの委員の推薦する者とする。
 - 3 会長の任期は2年とし、再任を妨げない。
 - 4 委員及び監事は、会長が委嘱する。
 - 5 第1項第2号ロ及びハの委員は、当該敷地内の遺跡調査に関する委員としての任務が終わったときは、退任する。
- 第5条 会長は、調査会を代表し、業務を総括する。
- 2 委員は、委員会を構成し、委員会の議決に基づく業務を執行する。
 - 3 監事は、調査会の会計を監査する。
- 第6条 委員会は、会長及び委員をもって組織する。
- 2 委員会は、会長が招集し、議長となる。
 - 3 委員会は、新営工事等の敷地が京都市以外の地域にある場合で、必要と認めるときは、部会を置くことができる。
- 第7条 第3条の発掘調査の実施に当たるため、調査会に調査班を置く。
- 2 調査班は、調査班長、調査員及び調査補助員をもって組織する。
 - 3 調査班長は、委員会の議に基づき会長が委嘱する。
 - 4 調査員及び調査補助員は、調査班長の推薦により会長が委嘱する。
- 第8条 調査会の事務を処理するため、調査会に事務局を置く。
- 2 事務局に職員若干名を置く。
 - 3 職員は、会長が任免する。
- 第9条 調査会の経費は、京都大学から支出される調査委託費をもって充てる。
- 第10条 調査会は、4月1日に始まる年度ごとに、事業報告書及び収支決算書を作成し、監事の監査を経て、年度終了後3ヶ月以内に委員会の承認を受けるものとする。
- 第11条 この規約に定めるもののほか、調査会の運営に関し必要な事項は、会長が定める。

京都大学構内遺跡調査要項

調査委員会

会 長	久馬 一剛(農学部教授)	
委 員	小野山 節(文学部教授)	山中 一郎(文学部助教授)
	大山 喬平(文学部教授)	石田 志朗(理学部助教授)
	亀井 節夫(理学部教授)	西村 進(理学部助教授)
	川上 貢(工学部教授)	上野 陽里(原子炉実験所教授)
	西川 幸治(工学部教授)	清水 芳裕(文学部助手)
	足利 健亮(教養部教授)	建本 信雄(事務局庶務部長)

規約第4条1項(2)ロ

藤原 元治(放射性同位元素総合センター長)	
神野 博(工学部長)	岩井 保(農学部長)

規約第4条1項(2)ハ

	浪貝 毅(京都市埋蔵文化財調査センター所長)	
	泉 拓良(奈良大学助教授)	
監 事	南 芳美(施設部企画課長)	上田 照夫(放射性同位元素総合センター事務掛長)
	山本 清(農学部事務長)	岸本 弘三(工学部経理課長)

事務局

事務局員	竹内 善隆(施設部事務官)	松本 一代(調査会事務員)
------	---------------	---------------

調査班

調査班長・主任	清水 芳裕, 五十川伸矢, 浜崎 一志, 宮本 一夫, 難波 洋三, 千葉 豊, 西川恵美子
調査員	竹村 恵二, 福勢千鶴子, 家根 祥多
調査補助員	上野 京子, 小野 晶子, 大山 和彦, 加茂 友基, 小林 俊一, 杉本 喜仁, 竹内 洋子, 辰巳ゆかり, 谷 美之, 谷口由利子, 中村あかね, 中村 直弘, 早瀬 貴代, 藤田 良美, 村田 悦子, 吉田 広
作業員	五十棲彰雄, 右川 清, 浮田 博文, 木村 謙次, 河野 佳子, 古前 健次, 越本 梅男, 鈴木 功, 西村 邦夫, 橋本 庄次, 橋本 俊夫, 長谷川智造, 長谷川秀実, 福田 文治, 三谷 正三, 安田 秀男, 吉本 謙吉

京都大学構内遺跡調査要項

医学部構内A L20区整理調査班
 所在地 京都市左京区吉田橋町
 工事名 放射性同位元素総合センター
 有機廃液処理設備室新営
 調査期間 1987年2月2日～
 1987年5月31日
 面積 331㎡
 班長・主任 浜崎一志, 難波洋三
 調査員 2名
 調査補助員 3名

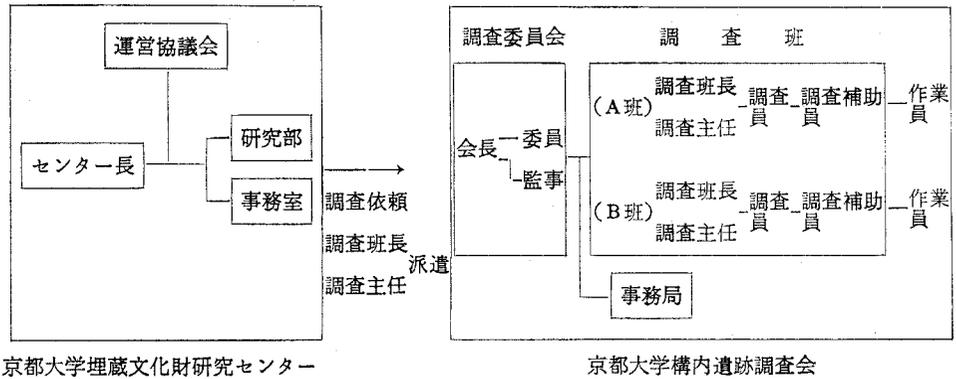
本部構内A W27区発掘調査班
 所在地 京都市左京区吉田本町
 工事名 工学部電気系学科校舎新営
 調査期間 1987年11月16日～1988年3月31日
 面積 1604㎡
 班長・主任 五十川伸矢, 千葉 豊
 調査員 3人
 調査補助員 6人
 作業員 8人

北部構内B D33区発掘・整理調査班
 所在地 京都市左京区北白川追分町
 工事名 農学部総合館東棟(第Ⅱ期)新営
 調査期間 1987年5月26日～
 1988年3月31日
 面積 618㎡
 班長・主任 浜崎一志, 難波洋三
 調査員 2名
 調査補助員 4名
 作業員 8名

北部グラウンド改修工事試掘調査
 所在地 京都市左京区北白川追分町
 調査期間 1987年9月1日～同9月14日
 面積 16㎡
 担当者 清水芳裕

理学部動植物学教室新営試掘調査
 所在地 京都市左京区北白川追分町
 調査期間 1988年3月16日～同4月8日
 面積 12㎡
 担当者 清水芳裕

京都大学構内遺跡の調査体制



京都大学構内遺跡調査要項

表4 京都大学構内遺跡のおもな調査

(地点は図版1を参照, 文献中「埋」は京大埋文研, 「調」は京大調査会をさす。)

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(㎡)	遺構	遺物	文献	備考
1923	農学部	1・2	濱田耕作	表採・試掘			縄文土器, 石器	梅原23, 島田24	
1924	農学部	不明	藤本理三郎				石 棒	横山・佐原60	
1929	大阪府 湊		島田 貞彦, 水野清一ほか	発掘			弥生土器	島田・水野ほか29	
1934	大阪府阿武山古墳		梅原 末治	発掘			乾漆棺, 玉飾枕	梅原36	
1935	北白川 小倉町		梅原 末治				縄文土器, 石器	梅原35	
1956	農学部	3	羽館 易	採集			縄文土器		
1971	農学部	4	石田 志朗	採集			弥生土器	埋79	
1972	農学部	5		採集			石 棒		
	大阪府 湊		小野山 節都出比呂志	事前発掘	1500	条里の溝	弥生土器, 石器	小野山・都出73	建物をずらし条里を保存
	追分地蔵	6	石田 志朗 中村 徹也	事前発掘	600		弥生土器, 石器	石田・中村72	
	教養部	7	藤岡謙二郎	工事中採集・実測			縄文土器	藤岡73	
1973	農学部	8	中村 徹也	事前発掘	13	瓦 溜	縄文土器, 瓦(平安)	埋78b	瓦溜埋戻し
	農学部	9	中村 徹也	事前発掘	600		縄文土器, 土師器	中村73	
	農学部	10	中村 徹也	事前発掘	40		縄文土器		
	植物園	11	中村 徹也	事前発掘	400	縄文後期 甕棺・配石遺構	縄文土器	中村74b, 泉77	甕棺・配石遺構の移築を決定
1974	農学部	12	中村 徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村74a	
	農学部	13	中村 徹也	事前発掘	800		縄文土器	中村75	
1975	教養部	14	小野山 節中村 徹也	事前発掘	750		土師器, 瓦, 陶磁器	小野山・中村76	
1976	農学部 B E 33区	16	泉 拓良	事前発掘	900	縄文晩期 土壙墓	縄文土器, 土師器, 瓦	調77	
	病院 A E 15区	19	岡田 保良	事前発掘	2200	古代・中世池, 溝, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器	調77, 埋81a	
	植物園 B D 35区	29	吉野 治雄	保存				調77	甕棺・配石の移築復原

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名	地点	担当者	調査の種類	面積(m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1976	病院AH17区	34	泉 拓良	事前発掘	200	近世溝, 井戸, 集石	土師器, 瓦	埋78 a	
	和歌山県瀬		丹羽 佑一	事前発掘	300	縄文時代土壇墓	縄文土器, 人骨	埋78 a	
1977	病院AF14区	39	岡田 保良 宇野 隆夫	事前発掘	800	古代護岸, 中世溝, 井戸	土師器, 瓦, 陶磁器	埋78 a, 埋81 a	
	医学部AO18区	41	泉 拓良 吉野 治雄	事前発掘	1200	中世溝, 土器溜, 井戸	土師器, 瓦, 陶磁器	埋79	
1978	理学部BE29区	54	岡田 保良 宇野 隆夫 吉野 治雄	事前発掘	500	弥生中期方形周溝墓, 中世火葬塚	弥生土器, 土師器, 瓦	埋79	火葬塚と方形周溝墓を現地保存
	農学部BG32区	55	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	100	古代土坑, 溝	縄文土器, 土師器	埋79	
	北 部BG31区	56	泉 拓良 宇野 隆夫	事前発掘	650	縄文晩期埋没林	縄文土器	埋80 埋85	
	本 部AW28区	57	岡田 保良 吉野 治雄	事前発掘	500	近世白川道	陶磁器, 土師器, 銭貨	埋80	
1979	医学部AP19区	74	清水 芳裕 五十川 伸矢 吉野 治雄	事前発掘	2776	中世井戸, 溝, 土器溜	土師器, 瓦, 陶磁器, 旧石器	埋81 b	
	本 部AT27区	75	五十川 伸矢	事前発掘	400	奈良後期竪穴住居, 中世土壇墓, 近世道路	土師器, 須恵器, 白磁	埋81 b	竪穴住居跡を現地保存
1980	本 部AT27区	89	泉 拓良	事前発掘	115	近世道路, 堀	土師器, 近世陶磁器	埋81 b	
	本 部AX28区	90	泉 拓良 五十川 伸矢 浜崎 一志	事前発掘	1120	近世白川道, 中世土器溜, 井戸, 建物	土師器, 瓦, 陶磁器, 銅鏃(弥生), 磨製石鏃	埋83	
	京 都 府 美 月		泉 拓良 清水 芳裕 五十川 伸矢 浜崎 一志 吉野 治雄	事前発掘	1468	弥生中・後期水路, 土坑, 中世土器溜	弥生土器, 打製石斧, 瓦器, 陶磁器	埋83	立合調査中に遺跡発見, 工事を中断し発掘調査
	教養部AO21区	91	吉野 治雄	事前発掘	112	中世井戸, 土壇墓	土師器, 瓦器, 陶磁器	埋83	
	本 部 実験排水	98	清水 芳裕	立 合		流路, 中世土器溜	土師器, 丸瓦	埋83	遺構実測

京都大学構内遺跡調査要項

年度	遺跡名 調査名	地点	担当者	調査の 種類	面積 (m ²)	遺構	遺物	文献	備考
1981	理学部 B D30区	109	泉 拓良 浜崎 一志	事前発掘	272	古代建物, 近世瓦溜	土師器, 瓦, 陶磁器	埋83	
	和歌山県 瀬 戸		泉 拓良 清水 芳裕 五十川 伸矢 浜崎 一志	事前発掘	1500	弥生土坑, 弥生配石, 古墳時代 土坑	縄文土器, 硬玉管玉, 弥生土器, 製塩土器	埋84	
	本部 A X28区	110	浜崎 一志	事前発掘	34	中世土器 溜	土師器, 瓦, 陶磁器, 硯	埋83	
	教養部 A P22区	111	五十川 伸矢 飛野 博文	事前発掘	1716	古墳, 古 代梵鐘 造遺構, 中世門, 溝, 墓	縄文土器, 弥生土器, 須恵器, 土 師器, 鋳型, 浴解炉	埋84	梵鐘鑄造遺 構を現地保 存
	京 都 市 本 山			分布調査			縄文土器, 緑釉陶器, 灰釉陶器	埋83	
1982	京 都 府 中 海 道		泉 拓良	試 掘	20	中世土器 溜	縄文土器, 土師器	埋84	
	病 院 A F15区	122	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	1028	中世井戸, 溝, 土坑	土師器, 瓦 器, 白磁	埋84	
	農 学 部 B F33区	123	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	787	縄文住居 跡, 中世 土坑	縄文土器, 土師器	埋84	縄文住居跡 を現地保存
	和歌山県 瀬 戸		泉 拓良	事前発掘	297	古代製塩 炉	縄文土器, 弥生土器, 製塩土器	埋84	古代製塩炉 を移築保存
	本 部 A T29区	124	泉 拓良 飛野 博文	事前発掘	890	中世濠, 建物	土師器, 瓦 器, 陶磁器	埋86	
	農 学 部 B E33区	125	泉 拓良 飛野 博文	事前発掘	803	中世・近世 水田, 溝	土師器, 瓦, 陶磁器	埋86	
1983	医 学 部 A N20区	134	泉 拓良 五十川 伸矢	事前発掘	863	中世井戸, 土取り穴	須恵器, 瓦 器, 土師器	埋86	
	北 部 B F31区	135	清水 芳裕 五十川 伸矢	事前発掘	737	縄文埋没 林, 古代 ・中世溝	縄文土器, 土師器, 緑 釉陶器	埋87	
1984	病 院 A F19区	141	浜崎 一志 宮本 一夫	事前発掘	863	近世池, 井戸, 野壺	縄文土器, 運月甕	埋87	
	病 院 A J19区	142	清水 芳裕 浜崎 一志	事前発掘	260	中世土坑, 近世土取 り穴	土師器, 近世陶磁器	埋87	
	医 学 部 A N18区	143	五十川 伸矢 宮本 一夫	事前発掘	1920	中世井戸, 土取り穴, 中世梵鐘 鑄造遺構	土師器, 瓦器, 鋳型	埋88	

京都大学構内遺跡調査要項

年 度	遺 跡 名 査	地 点	担 当 者	調査の 種 類	面積 (㎡)	遺 構	遺 物	文 献	備 考
1985	北 部 B J 31区	153	清水 芳裕 宮本 一夫	事前発掘	624	古代溝、建 物跡、土坑 近世溝	弥生土器、 土師器、須 恵器	埋88	
	病 院 A J 18区	154	清水 芳裕 浜崎 一志 菱田 哲郎	事前発掘	4295	中世井戸、 近世土取 り穴	土師器、近 世陶磁器	埋89	
	病 院 A J 19区	155	五十川 伸矢 宮本 一夫	事前発掘	3000	中世井戸、 近世土取 り穴	土師器、近 世陶磁器、 鋳型	埋89	
1986	教 養 部 A P 25区	167	清水 芳裕 宮本 難波 一夫 洋三	事前発掘	599	中世・近 世溝	土師器、近 世陶磁器	埋89	
	本 部 A X 30区	168	清水 芳裕 難波 洋三	事前発掘	330	古代土坑、 中世道路	土師器、 陶磁器	埋89	
	医 学 部 A L 20区	169	浜崎 一志 難波 洋三	事前発掘	331	近世土取 り穴	土師器、 陶磁器	第 2 章	
1987	北 部 B D 33区	180	浜崎 一志 難波 洋三	事前発掘	618	縄文晩期 土坑	縄文土器、 土師器、陶 磁器	第 3 章	
	本 部 A W 27区	181	五十川 伸矢 千葉 豊	事前発掘	1604	中世土坑、 近世道路	土師器、近 世陶磁器		発掘中
	北 部 B H 35区	182	清水 芳裕	試 掘	16	包含層	土師器、須 恵器	第 1 章	
	北 部 B D 28区	183	清水 芳裕	試 掘	12	包含層	土師器、須 恵器		発掘中
	病 院 A H 10区	184	五十川 伸矢	立 合		包含層	土師器、陶 磁器		
	北 部 B I 28区	185	浜崎 一志	立 合		近世野壺	近世陶磁器		
	病 院 A H 20区	186	千葉 豊	立 合		縄文河川	縄文土器		
	北 部 B A 29区	187	浜崎 一志	立 合					遺跡なし
	本 部 A T 25区	188	清水 芳裕	立 合		近世堀		第 1 章	
本 部 A U 24区	189	千葉 豊	立 合					遺跡なし	

第Ⅱ部 京都大学埋蔵文化財研究センター紀要 Ⅷ

中世前半の大型鑄鉄鑄物

五十川 伸 矢

中世前半の大型鑄鉄鑄物

五十川伸矢

1 はじめに

日本における古代・中世の鑄物資料の考古学研究は、坪井良平氏による梵鐘の研究に代表されるように、青銅鑄物の研究が先行し、それは実に大きな成果をあげてきた⁽¹⁾。しかし鑄鉄鑄物には装飾性が少ないため、青銅鑄物のように美術工芸の分野で取り上げられることはほとんどなかった。また、青銅鑄物が祭器を中心とする器物であるのに対して、鑄鉄鑄物は実用の煮炊具として作られたものが大半をしめ、破損すればすぐに新たな製品の地金として再利用されたため残存する数量も非常に少ない。こうした理由から、その研究は進展しているとはいいがたい。本稿では、中世前半の大型の鑄鉄鑄物を中心にその製作技術や特質についていささか考えてみたいと思う。材料として、口径が1mに達する大型の鑄鉄鑄物をいくつかとりあげることにする。また、近年梵鐘鑄造遺構の発見があいついで⁽²⁾、これらの大型の鑄鉄鑄物の製作技術が、梵鐘の鑄造技術などとも関連するものと予想されるため、あわせて両者を比較しつつ検討したい。

ここで検討材料とした大型の鑄鉄鑄物は、形態からいえば羽釜や鍋であるが、すべて寺社が所蔵する伝世品である。これらには、それぞれ伝承をもつものもあるが、製作された当初の歴史的背景が忘れ去られたものも多い。紀年や用途、願主、大工などの銘文をもつものに関しては、早くから金石文の研究者によってとりあげられているが、これらの鑄物には、明らかに風呂関係の用具として使用されたものがあり、風俗史的な立場からもとりあげられてきた⁽³⁾。実物に即した考古学研究には、立田三郎氏が箱根神社羽釜を、巽三郎氏が熊野三山に残る⁽⁴⁾羽釜を、それぞれ実測図を示して紹介し検討を加えている。また、小林剛氏は、俊乗坊重源の研究を通じて、鑄鉄鑄物の遺品のいくつかを重源ゆかりの作事にあてた⁽⁵⁾。このほか、江谷寛氏も、湯屋の研究を通じ鑄鉄鑄物を調査して、遺品のいくつかを俊乗坊重源ゆかりの湯釜にあてた⁽⁶⁾。しかし、両氏の指摘には、いささか検討の余地もあり、再考することとしたい。

また、それぞれの大型鑄鉄鑄物には、銘文や伝承による名称があるが、混乱を避けるため、本稿では個々の説明をおこなうにあたって、鏝のあるものを羽釜、鏝のないものを鍋と呼ぶことにする。

2 大型鉄鋳物資料

まず、本稿で取り上げる資料について実測図を示し(図28~30)、その形態や特徴について簡単に紹介する。銘文はすべて陽鋳であり、追刻とみとめられるものはない。図中の外郭線以外の太線は鋳張りを示す。

大和興福寺大湯屋羽釜⁽⁸⁾(1) 興福寺東辺の大湯屋内に安置されている。鏝を完全に失っており、口径175cm、高さ145cm。丸く球形に近い形状をなし、肩部に3本の凸線の装飾がある。胴部以下に、横方向の2筋の鋳張りを明瞭に残している。

相模箱根神社羽釜⁽⁹⁾(2) 芦ノ湖畔の箱根神社の社務所脇に安置されている。底部が抜け落ち、鏝の大半を欠失している。口径120cm、高さ120cm。肩部に3本の凸線の装飾があり、胴部に横方向の2筋の鋳張りを残す。肩部に銘文がめぐり、箱根神社神宮寺の東福寺の湯釜として、文永5(1268)年に作られたことがわかる。重要文化財に指定。

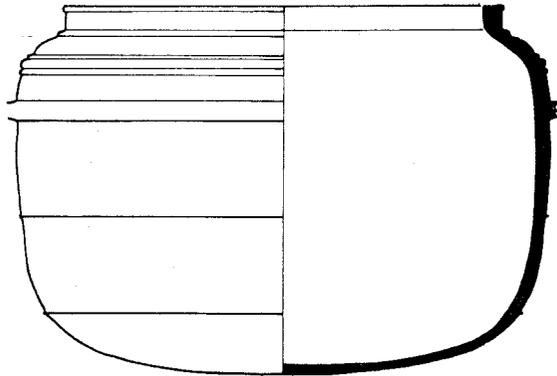
相模箱根神社羽釜⁽¹⁰⁾(3) 箱根神社の社務所脇に安置されているもうひとつの羽釜。口径120cm、高さ115cm、肩部に3本の凸線の装飾があり、鏝の上部に4個の鈎環をもつ。胴部に横方向の3筋の鋳張りを残す。文永5年銘の羽釜より器壁は厚い。肩部に銘文があり、同じく東福寺の浴堂釜として、弘安6(1283)年に伊豆国の大工磯部康廣によって作られたことがわかる。重要文化財に指定。

紀伊熊野那智大社羽釜⁽¹¹⁾(4) 熊野那智大社宝物殿の前に安置されている。鏝を欠失しているが、口径105cm、高さ114cm、肩部に3本の凸線があり、胴部に横方向の2筋の鋳張りが残る。やや厚手に作られている。肩部には「願主信範」と銘があるが、大工(鋳物師)は不明である。

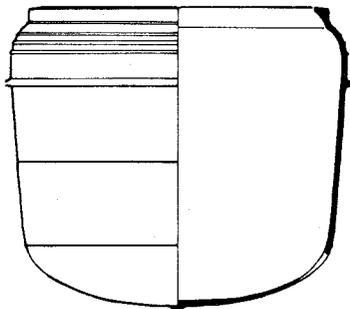
紀伊熊野速玉大社羽釜⁽¹²⁾(5) かつて熊野速玉大社の楼門の脇に安置されていた。現在、大きく大破し、全形を見ることができないが、部分観察と巽氏の報告によって図を作製した。口径105cm、高さ約105cm、表面は錆による劣化がひどいが、肩部には3本の凸線があったようである。胴部には横方向の2筋の鋳張りが残る。『熊野年代記』の新宮の条によれば、元亨2(1322)年の紀年銘のほか寄進者の名があったという。

大和興福寺大湯屋羽釜⁽¹³⁾(6) 興福寺大湯屋内に安置されているもうひとつの羽釜。現在は鏝と鏝部以下を失っている。口径165cm、口縁部と肩部の境目に段があり、鏝から上部は縦方向に6筋の鋳張りが残る。肩部には2本の凸線の装飾があり、段やその境目にも凸線があるが、鋳型の境目で線がずれている箇所がある。

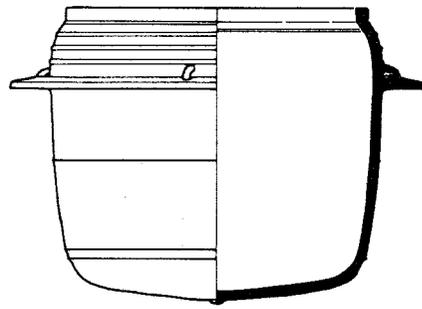
大型鑄鉄鑄物資料



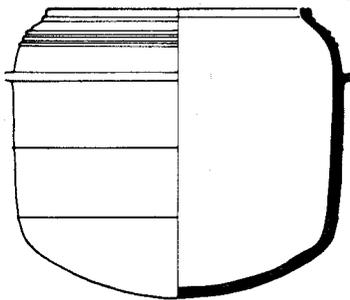
1 大和興福寺大湯屋羽釜



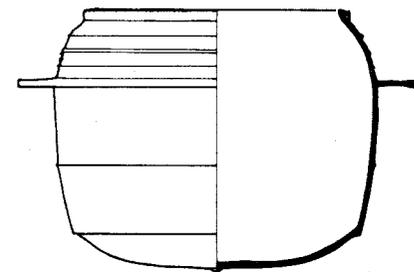
2 相模箱根神社羽釜



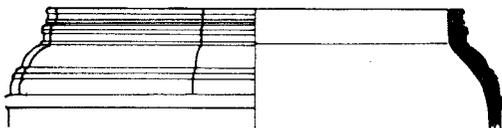
3 相模箱根神社羽釜



4 紀伊熊野那智大社羽釜



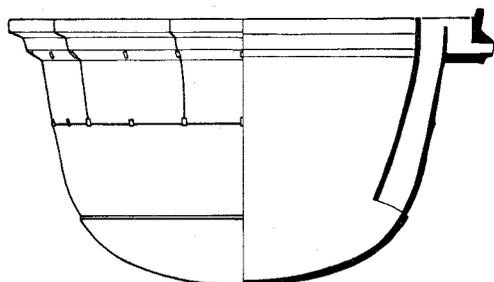
5 紀伊熊野速玉大社羽釜



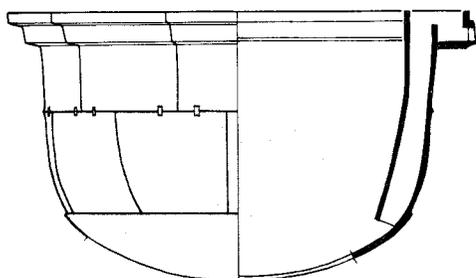
6 大和興福寺大湯屋羽釜



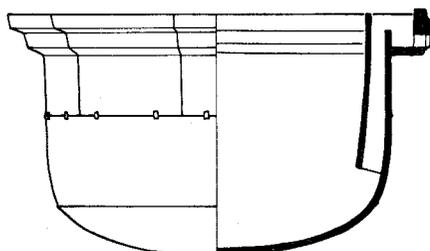
図28 中世前半の大型鑄鉄鑄物(1) 縮尺1/30



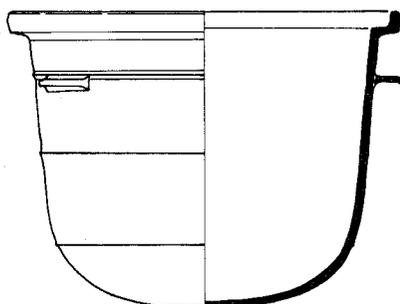
7 周防阿弥陀寺鍋



8 備中新山寺跡鍋



9 近江園城寺鍋



10 出羽黄金堂鍋



図29 中世前半の大型铸铁铸物(2) 縮尺1/30

周防阿弥陀寺鍋⁽¹⁴⁾(7) 東大寺別院周防阿弥陀寺の山門に安置。口径185cm, 高さ105cm。口縁部が2段に受け口状になっており, 1箇所⁽¹⁵⁾に特殊な構造をもつ。胴部から底部にかけては丸く, 胴部に横方向に2筋の铸張りがあり, 上1段には, 縦方向に10筋の铸張りが残る。横方向の上の铸張りの部分には, 型持が配列されている。重要有形民俗文化財に指定。

備中新山寺跡鍋⁽¹⁶⁾(8) 総社市北方の山中, 新山寺跡の一郭に覆い屋を設けて安置されている。口径185cm, 底部が欠失しているが, 高さ約105cmに復原できる。形状や構造は阿弥陀寺鍋に類似するが, 横方向の铸張り2筋のほか, 上2段の縦方向の铸張りが10筋ある。鬼の釜という伝承がある。

近江園城寺鍋⁽¹⁷⁾(9) 天台寺門派総本山園城寺の霊鐘堂に奈良時代の梵鐘とともに安置されている。上の2例に形態や構造が類似する。縦方向の铸張りは9筋ある。口径165cm, 高さ120cm。弁慶の汁鍋との伝承をもつ。

出羽羽黒山黄金堂鍋⁽¹⁸⁾(10) 羽黒修験の宿坊のある羽黒町黄金堂山門に安置されている。口径155cm, 高さ115cm。横方向の铸張りが3筋ある。胴部上端5箇所⁽¹⁸⁾に把手があり, 弁慶の粕鍋との伝承がある。

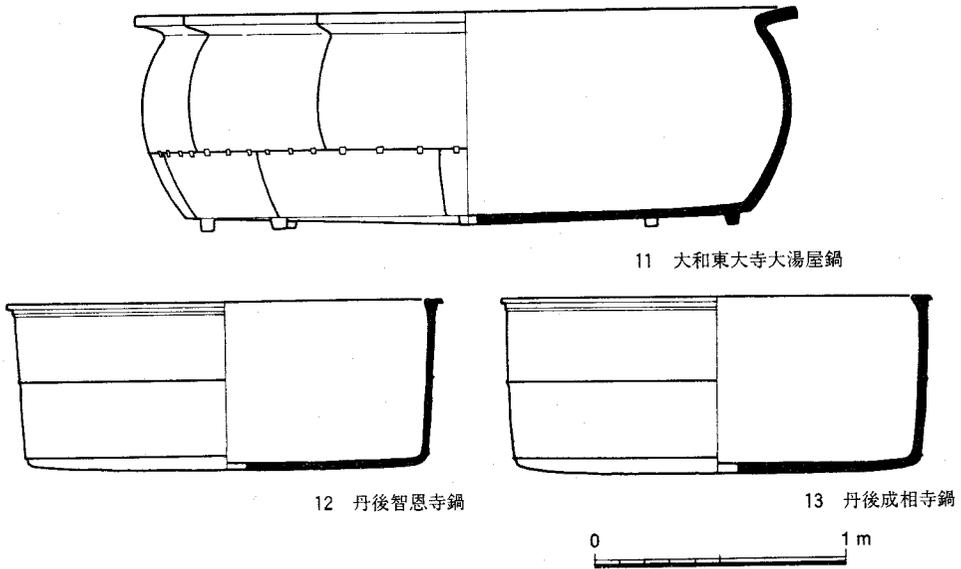


図30 中世前半の大型鑄鉄鑄物(3) 縮尺1/30

大和東大寺大湯屋鍋⁽¹⁹⁾(11) 東大寺大湯屋に安置されている。口径243cm、高さ85cm、口縁が外反し胴部は丸くふくらむ。土師器鍋によく似た形状を示すものがある⁽²⁰⁾。底部は扁平で中央に流水孔とみられる小さな穴がある。底部の端部に6個の小さな脚をもつ。胴部中央に横方向の鑄張りがあり、さらにその上下に11筋の縦方向の鑄張りが残る。鑄上がった当初からのものと思われる荒れた鑄肌を示す。胴部に、建久八年、大和尚南无阿彌陀佛、豊後権守などの銘文があり、「湯船」とよばれるものである。銘文をもつ最古の鑄鉄鑄物であり、重要文化財に指定されている。

丹後智恩寺鍋⁽²¹⁾(12) 名勝天の橋立脇の智恩寺境内に手水鉢として使用されている。口径173cm、高さ64cmのほぼ円筒形を示し、口縁端部は少し横に拡張する。胴部、胴部と底部の境目に各1筋ずつ、横方向の鑄張りがある。底部は扁平で中央に流水孔をもつ。内側面に正応3(1290)年に竹野郡の興法寺の湯船として、山河某が製作した旨の銘文がある。重要文化財に指定。

丹後成相寺鍋⁽²²⁾(13) 天の橋立を眼下にのぞむ成相寺の本堂脇に手水鉢として使用されている。口径169cm、高さ67cmのほぼ円筒形を示し、口縁端部は少し横に拡張する。胴部、胴部と底部の境目に各1筋ずつ、横方向の鑄張りがある。底部は扁平で中央に流水孔をもつ。内側面に正応3(1290)年に竹野郡の等楽寺の温屋のために山河貞清が製作した旨の銘文がある。重要文化財に指定。

3 資料の年代観

以上述べた資料には銘文によって年代を知ることができるものもあるが、紀年銘があっても、古い型式の復古や模作もあるので検討する必要がある⁽²³⁾。

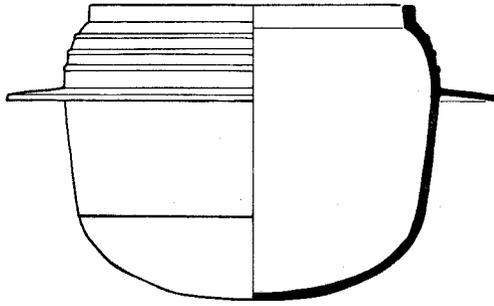
まず、羽釜には紀年銘のもつものが多いのだが、各地の社寺に保存されている紀年銘をもつ羽釜を整理して12世紀から16世紀にわたる形態変化を整理してみた(図31)。これらは一般に「湯釜」と呼ばれるもので、湯立てなどの神事に使用されたものである。

その形態変化は、肩部から口縁が内傾し、胴部から底部にかけて丸い形態を示すものから、次第に肩部が直立し胴部と底部の境目が明瞭になってゆき、やがて胴部が直立し底部は扁平になってゆくものとする。その間、14世紀には口縁部と肩部の間に、段が発生する。この段は口縁部と肩部の間に設けられた装飾の凸線が発達したものと考えられ、さらに多くの凸線でその上を飾ることとなるが、やがて16世紀にはいつて次第に失われていく。興福寺大湯屋羽釜のうち、1は12世紀にさかのぼるものであり、6は口縁部と肩部の境目に段をもうけているが、肩部はかなり内傾するので、14世紀前半ごろのものとする。熊野那智大社羽釜(4)は、その形態から14世紀を降るものではないだろう。また、熊野速玉大社羽釜(5)は、『熊野年代記』によって元亨2(1322)年製作と推定されているが、上記の段がみられず、あるいは13世紀にさかのぼる資料を模倣したものの可能性もある。その他は、それぞれの紀年銘の示す年代を想定してもよいのではないかと思う。

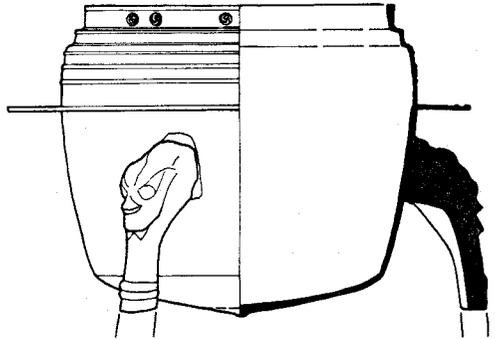
鏝のない鍋形のものには銘文が少なく、このほかにも中世を通じて銘文によって年代のわかるものは僅少である。かろうじて13世紀後葉ごろのものと考えられる大阪府美原町真福寺遺跡出土鋳型から復原しうる鍋の形状は、胴部から底部にかけて、かなりゆるやかに曲線を描くが、底部の中央はかなり扁平となっている⁽²⁴⁾。これを中世前半でも、その中ごろのものとする。鍋の形態も羽釜の型式変化とほぼ同様に、胴部から底部にかけて丸い形態を示すものから、胴部と底部の境目が明瞭になって、やがて胴部が直立し底部は扁平になってゆくものとする。こう考えると、阿弥陀寺、新山寺跡、園城寺の鍋資料はいずれも12世紀にさかのぼりうる形態を示すものであり、黄金堂鍋は胴部がやや直立することから、それよりやや下の年代のものとする。

東大寺大湯屋鍋や丹後成相寺鍋、智恩寺鍋は、底部に穴があいており、後に記すように風呂の浴槽に用いられたものと考えられるため、上記の羽釜や鍋の形をした煮沸用具とは異なった形態をしめすものとして、それぞれの銘文の紀年名の示す年代を想定しておく。

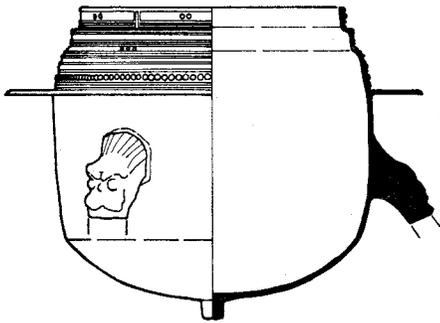
資料の年代観



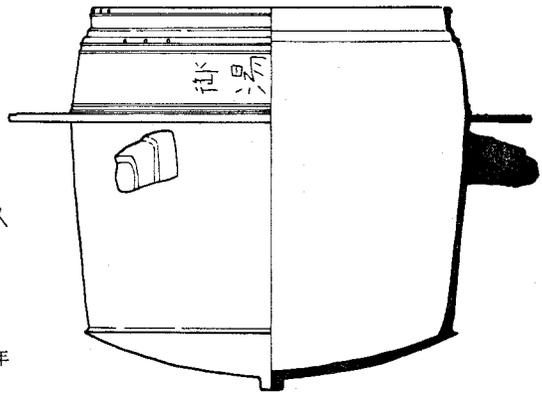
紀伊熊野本宮大社湯釜 建久9年(1198)年



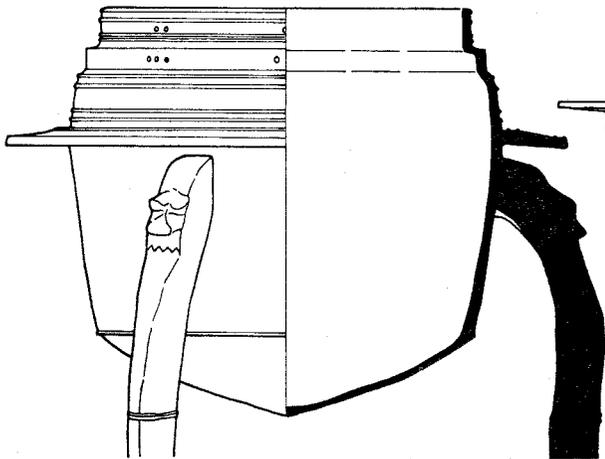
大和朝護孫子寺湯釜 永正13(1516)年



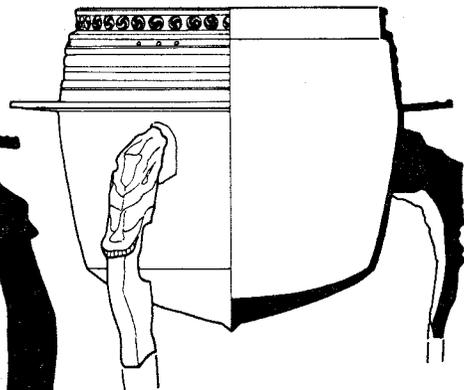
河内流谷八幡神社湯釜 延元5(1340)年



大和生駒神社湯釜 永禄6(1563)年



大和吉水神社湯釜 康暦元(1379)年



紀伊三船神社湯釜 天正16(1588)年

図31 儀式用羽釜の変遷 縮尺 熊野本宮大社湯釜 1/20, 流谷八幡神社湯釜以下 1/10

4 大型鑄鉄鑄物の製作技術

つぎに、こうした大型鑄鉄鑄物の羽釜、鍋の鑄造技術に関して、民俗例や梵鐘鑄造遺構の調査成果も加味して検討を加える。また、やや時代が下がるが、文安4(1447)年に高野山金剛峰寺大湯屋の釜を鑄造した時の記録が高野山文書にあり、作業工程や材料など当時の鑄造技術の一端をかいまみることができるので参考にした。⁽²⁵⁾

内 型 資料の内面は平滑で鑄張りの認められるものはない。しかし、以下に述べるように底部を上にした状態で鑄込みをおこなうものと推定できるため、羽釜の場合、口縁部は鑄部よりすぼまっているので、最初に内型を定盤に設置するのではなく、最下の口縁部を形作る鑄型は外型から設置してゆかなければならず、内型も鑄のあたりで上下にわかれていたものと考えたほうがよい。鑄張りはないが、羽釜の内面のこの部分に、わずかな凹凸が一周するものがあり、上段の内型を設置した時に、その境目に真土を充填して鑄型の合わせ目に鑄張りができないようにしたのであろう。小型品には内面に合印(見切り)とみられる凸線が残るものがある。

外 型 外面には、多くの資料において横方向に一周する幾筋かの鑄張りがあって、いくつか分割した外型を上下に重ねて鑄造したことがわかる。これは日本の梵鐘の場合とほぼ同じやり方である。また、羽釜の場合、鑄の先端の部分に鑄張りを明瞭に残すものもあり、この部分でも上下に鑄型が分割されていたことが確実と思われる。

そのほか、阿弥陀寺鍋(7)、新山寺跡鍋(8)、園城寺鍋(9)や東大寺大湯屋鍋(11)では、横方向の鑄張りのほかに、さらに縦方向の鑄張りが明瞭にみられ、外型がさらに縦方向にも分割されていたことを物語っている。こうした外型の製作にあたっては、かならずしも引型を使用しなくても、各単位部分のもととなる型から外型をおこしたと考えることもできるだろう。こうすれば、大きなドーナツ状の外型を最初から製作するよりも、鑄型作りの作業がかなり容易になるのではないかと思われる。

さて、鑄型は砂と粘土で形成されたものであり、内型と外型の隙間にそれより比重の高い溶湯を流し込むのであるから、原理的には外型は浮き上がる力を強く受ける。これを防ぎ、逃げ場を求めたガスによる圧力をおさえるための工夫が必要となる。京都大学教養部構内の梵鐘鑄造遺構では、これに対処して外型を固定するために設置した掛木の痕跡が明瞭に残存していた。⁽²⁶⁾ 大型の鑄鉄鑄物にあっても、こうした掛木に縄を括って掛け、鑄型を緊縛したものと思われる。また、横方向に鑄型を緊縛して固定するためには、外型の外側

を竹籬で締めあげたことが、古い伝統を残すと考えられる民俗例や文献⁽²⁷⁾によって知ることができるが、竹籬をもちいた結桶が普及するまでの時代では、もっぱら縄で縛りあげていたのではないかと考えられる。以上のように、大型の製品で組み合わせる鑄型の数が多く、鑄型の形態が複雑であればあるほど、それだけ強靱な鑄型の緊縛装置の必要があったことが推定できる。

型 持 阿弥陀寺鍋(7)、新山寺跡鍋(8)、園城寺鍋(9)や東大寺大湯屋鍋(11)では、外型の継目すなわち、鑄張りの部分にはほぼ四角形の鉄片が多数埋め込まれている。これは厚さを均等に仕上げるために、はめ込まれた型持と思われる。梵鐘は撞いて音を聞くためのものであるのに対し、上にあげた鑄鉄鑄物は、実用の煮炊具であり梵鐘より器壁を薄く作らなければならず、その点で一段と工夫を要したといえるだろう。

湯 口 青銅製品の場合、湯口によって生じた突起は除去されるのが一般であるが、鑄鉄製品は硬度が高いせい、そのまま放置したことが多い。『日葡辞書』によれば、放置された湯口は「かまのへそ」と呼ばれていたらしい。さきにあげた資料には、底部が地中に埋没していたり、底の部分が抜け落ちて欠落しているものも多く、底部の形状を確かめうるものは少ないが、箱根神社の文永5年銘の羽釜(2)、熊野速玉大社の羽釜(5)では、底部中央に円錐台状の小さな突起を観察することができる。その他の口縁部、鏝部や胴部に湯口とみとめうるような突起はまず見いだせない。すなわち、使用時と天地逆転した状態で、鑄造がおこなわれていたことが確実である。また、梵鐘鑄造の場合には、龍頭の鑄型の上部に穴がもうけられており、空気抜きの装置として機能していたらしいことがわかっている。⁽²⁸⁾しかし、上にあげた鑄鉄鑄物の資料では底部に、こうした空気抜きとみられるものを確認できなかった。基本的に湯口が空気抜きの穴を兼用していたらしい。

樋 大型鑄物の場合、1基の溶解炉では全部の溶湯を作ることができないため、複数の炉を鑄型の周辺に設置して、溶湯を出湯口に取付けた樋を通して流し込むやり方があり、民俗例をはじめ、『天工開物』の鑄鼎図などからその状況を推定することができる。金剛峰寺大湯屋釜の鑄造に際しては、「鑪^{たたら}八丁」とあるから、8組の溶解炉と樋を鑄型の周囲に配し、樋を通して鑄込みをおこなったものとみてよい。

鑄 造 坑 金剛峰寺大湯屋釜の鑄造の記事には、鑄造を首尾よく終了した後、「釜窟出」との記載があり、鑄造に際して鑄型が穴の中に設置されていたことがわかる。梵鐘の鑄造にあたっては、小型のものを除き、地面に穴を掘って鑄型を設置するのが一般であり、こうした大型の鑄鉄鑄物の鑄造に際しても、これと同じように、地面に穴を掘って鑄型を

中世前半の大型鑄鉄鑄物

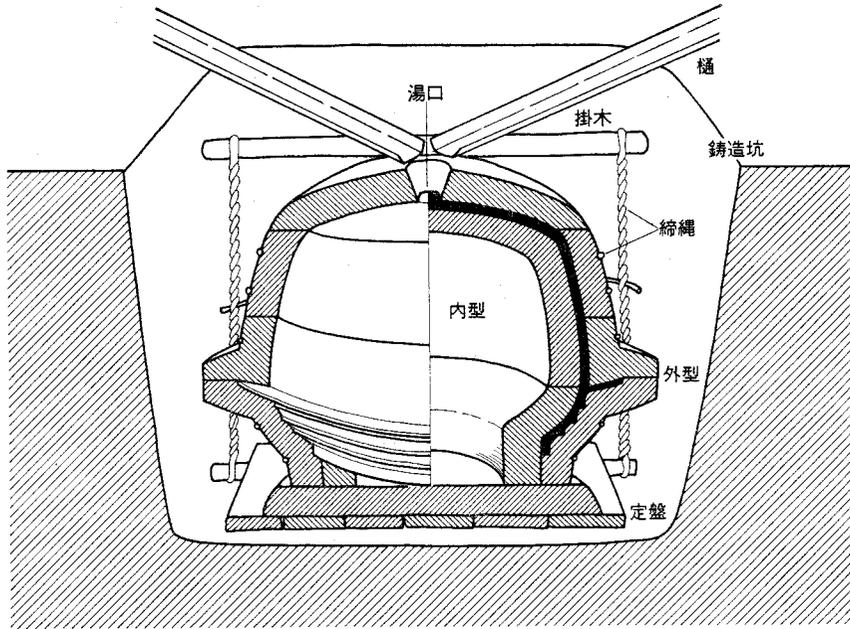


図32 大型鑄鉄鑄物の鑄造模式図

設置し、溶湯を流し込んだと考えたほうがよいだろう。現在、大型の鍋や羽釜を鑄造した土坑については、東大寺西廻廊周辺の調査で1例発見されているが、⁽²⁹⁾梵鐘鑄造坑として報告されているものなかには、大型の羽釜や鍋を鑄造したものも含まれているのではなかろうか。出土鑄型の吟味などを通じて、調査担当各位の御検討を乞う次第である。

以上のような検討をもとに、中世の大型鑄鉄鑄物羽釜の鑄造状況の想定図を作製してみた(図32)。先に述べたように、資料に残された技術的痕跡をはじめ、いくつかの民俗例や文献を参考にしたが、細部についてはさらに検討を要する点が多いと思う。たとえば、鑄型を設置する定盤やその下部構造は、梵鐘鑄造坑として報告されているものからの類推であるし、また、鑄型の設置や鑄上がった製品の取り出しのために組んだ足場の柱もあったのではないと思われる。しかし、全般的な鑄造状況は、こうしたものではなかったかと考える。

上にあげた大型鑄鉄鑄物資料には、表面が錆や腐食によるものではなく、鑄上がった当初からのものと思われる荒れた鑄肌を示すものが多い。それは、ガスが抜けきらなかったり湯回り不良によるものであると思われるが、一度に大量の溶湯を流しこまなければならない大型鑄物製作時の困難さを感じさせる。

5 大型鑄鉄鑄物の鑄造技術と鑄物師

以上あげたものについて、製作にあたった鑄物師などの歴史的背景のわかるものについて考えてゆく。まず、小林剛、江谷寛の両氏が俊乗坊重源ゆかりの作事としたものについて検討を加える。

まず、東大寺大湯屋鍋は、その銘文から建久8(1197)年に俊乗坊重源の『南无阿彌陀佛作善集』(以下『作善集』と略す)にしるされ、草部是助によって作られた「湯船」そのものであることが確実である。⁽³⁰⁾この鍋には、底部中央に円形の穴があり、底部周辺に小型の脚がつくられている。これは、そのままの状態置いて使用するためのもので、内容物を流し出す仕掛けをもっているわけであり、風呂の湯を沸かすためのものというより、浴槽として使用されたのではないかと考える。このほか、京都府宮津市智恩寺鍋と成相寺鍋は、ほぼ同大同形で同じ構造をもち、智恩寺鍋には、正応3(1290)年に山河某の作った「湯船」であることが銘記されている。以上のように、当時「湯船」と呼ばれたものは、底部中央に流水孔のついたもので、浴槽として使用されたものと考えられる。

また、小林剛氏は、興福寺大湯屋の羽釜に、かつて「永久五年」と銘が認められたという古老の言から、これを「建久五年」の誤読とし、『作善集』にいう「湯船」として、俊乗坊重源の作事にかかわるものと考えた。⁽³¹⁾小林氏が2口の羽釜のどちらを指されたのかわからないが、もし図28に示した1であれば、たしかに形態からみて12世紀ごろのものと考えてもあやまりはないが、さきに示したように「湯船」は、基本的に浴槽として、底部に排出孔のあるものと考えたほうが妥当であるため、この説にはしがえない。また、以下に述べるように俊乗坊重源に関わる鑄物には、製作にあたって縦方向の鑄型分割の手法がとられているものがあり、この興福寺大湯屋鍋(1)は、こうした手法のみとめられないことも否定的要因となるだろう。また、同じく興福寺大湯屋鍋(6)は、年代がやや下がるものであることは、すでに述べた。

さて、『作善集』には、「湯船」とともに「湯釜」と記されたものが多数あり、湯を煮沸するためのものに違いない。周防阿彌陀寺は俊乗坊重源ゆかりの寺で、草部是助によって作られた重要文化財の鉄塔が現存する。この鉄塔の銘文に「釜一口闊六尺」としるされ、『作善集』にいう「湯釜」が、さきにあげた鍋であることは確実である。⁽³²⁾また、新山寺は備中別所であることが、藤井駿氏の研究によってあきらかにされており、新山寺跡鍋も俊乗坊重源ゆかりの作事と考えてよいものである。⁽³³⁾

次に、園城寺鍋は、上記の阿弥陀寺鍋や新山寺跡鍋に酷似し、江谷寛氏の指摘通りこれもまた俊乗坊重源ゆかりの作事と考えるものである⁽³⁴⁾。『作善集』には園城寺に、こうした「湯釜」を設けた記載がないが、あるいは別寺の「湯釜」がもちこまれた可能性もある。武田勝蔵氏は、寺院の浴堂について述べた項で、正治元(1199)年12月5日早旦、興福寺西金堂の僧兵が、かねて対立の法隆寺に乱入して浴堂の湯釜を奪ったところ、法隆寺側も応戦してこれを取り返したという騒動を紹介している⁽³⁵⁾。湯釜が大切な什物であったために、こうした強奪合戦の目標になったものと思われる。同様の暴力的移動は、梵鐘の場合にもよくあることは、坪井氏が紹介しているとおりで⁽³⁶⁾ある。

このほか、江谷氏は俊乗坊重源ゆかりの「湯釜」として、上にあげた阿弥陀寺、新山寺跡、園城寺の鍋のほかに高野山金剛峰寺鍋をあげている⁽³⁷⁾。しかし、藤浪剛一氏が示した図をもとに復原した図を見るかぎり、この鍋は胴部と底部の境目がすどく屈曲し、底部がかなり扁平であり鎌倉時代のものではない。また、縦方向の鑄型分割をおこなっていないため、園城寺例、新山寺跡例、阿弥陀寺例と同列に考えがたく、俊乗坊重源に直接かわるものとするには問題が多い。ただ、口縁部には、上記3例にみられる特殊構造をもつため、あるいは俊乗坊重源ゆかりの実物が破損したため、それが改鑄されたものと考えてはどうだろうか。

さて、以上のように鍋形のものが「湯釜」とよばれたことが想定できるのであるが、熊野本宮大社の羽釜、箱根神社の文永5年銘羽釜には、あきらかに「湯釜」と銘文があり、こうした羽釜形のものも「釜」と呼ばれていたことも事実である。一方、東国の例であり、いささか時代の下がる資料ではあるが、内耳付き鍋の形態をした千葉県香取大社の天文17(1548)年銘⁽³⁹⁾の鍋には「供釜」、長野県山家神社の慶長7(1604)銘⁽⁴⁰⁾の鍋にも「湯釜」と銘記があり、地域差もあいまって、中世においては全国的に「釜」という煮炊具の名称には、形態に従った統一的なものなかったことも推定され、鏝のあるものを釜、それのないものを鍋と呼ぶのは比較的後になってからのことではなからうか。文献史料を読む際に注意を要するのではないかと思う。

このほか、箱根神社の弘安6年銘羽釜(3)には、伊豆国鑄物師磯部康廣の銘がある。この羽釜は、文永5年銘羽釜にくらべてやや厚ぼったい点など、やや地方的な作風を感じさせるが、あるいは文永5年銘羽釜が破損したために、これを手本に新たに鑄造したのではあるまいか。いずれにせよ、堂々たる作品であり、伊豆国の鑄物師の技術の高さをみる思いがする。

銘文や文献史料から鑄物師を推定しうるものは、以上のようなものである。また、現物は残っていないが、寛元4(1246)年の高野山金剛峰寺大湯屋釜の鑄造にあたっては、惣大工を丹治国高がつとめ、脇大工として丹治国貞・国則以下の10人の鑄物師が多々羅座を担当したことがわかる。⁽⁴¹⁾

このうち、俊乗坊重源に直接かかわるものについては草部是助の作品であることが、ほぼ確実である。この草部是助は、南都大仏を再興した鑄物師であり、笠置寺、東大寺勧進所や現存しないが周防阿弥陀寺の「六葉鐘」を鑄造した有力な鑄物師と推定されており、大仏鑄造にあたっては中国の鑄物師陳和卿とともにあつた人物であることは周知の事実である。一方、山河貞清は、慈光寺鐘、醍醐寺鐘の作者である。また、磯部氏も箱根神社神宮寺の鐘を鑄造しており、丹治国則には太田新次郎氏蔵鐘、菅山寺鐘、長楽寺鐘などの作品がある。

これらの鑄物師には、磯部氏のように地方において有力な活動をおこなったものもふくまれているが、その多くが、中世の前半において梵鐘を中心とする青銅鑄物生産の中核を担っていた人々であることは、坪井氏による梵鐘の研究が明らかにしてきたところである。⁽⁴²⁾ すなわち、大型の鑄鉄鑄物を鑄造した工人たちの多くは、こうした有力鑄物師であつたと考える。それは、前節で述べたように、梵鐘製作における技術内容と大型の鑄鉄鑄物のそれに、多くの共通点を見いだせることから推定しうることである。また、当時の有力鑄物師による鑄物生産が、銅鉄兼業体制のもとにおこなわれていたことも指摘しておきたい。

さきあげた文安4(1447)年の高野山金剛峰寺大湯屋の釜の鑄造にあたっては、大工高野山領山崎の右衛門尉長継と脇大工大和国三輪の衛門次郎があつている。根来寺の御用大工の山崎庄金屋の鑄物師や大和三輪の鑄物師は、中世前半には梵鐘などの作品がみられず、めだつた活動を確認できないが、中世のなかばに至つてこうした大型鑄物の製作にあつたことができるように成長をとげたことを示すものであろう。

このほかには、鑄鉄鑄物として、中世の遺品を確認することができないが、たとえば陸奥塩釜神社の末社御釜社に保存されているような大型の製塩用鉄釜が、製塩のさかんであつた能登や瀬戸内海沿岸などの地域で使用されていたと考えられる。それらの製作には、上にあげたような有力鑄物師があつたのではなく、それぞれの地方の鑄物師がこれを鑄造したのではなからうか。それらは、本稿であげた資料にくらべて底が浅く比較的単純な形態を示すものではなかつたかと推定されるためである。

6 中国の鑄造技術

最後に、東大寺大湯屋の湯船、阿弥陀寺、新山寺跡、園城寺に所在する「湯釜」に典型的にあらわれた特殊な縦方向の外型分割の手法について、若干考えてみることにしたい。

まず、目を転じて中国の鑄造技術に関して、『天工開物』に記された鑄造技術を考える。⁽⁴⁴⁾『天工開物』冶鑄第八卷の釜の条には、内型と外型を土によって精細に作製して鑄造するという記載があり、鑄釜図には、P. Hommel が紹介した民俗例⁽⁴⁵⁾さながらの製造工場の姿が描かれているが、それらは口径2尺程度の小型の釜のようである。また、『天工開物』には、中国の大きな寺では、米2石の粥を煮ることができる「千僧鍋」と呼ばれるものがあるという記載がある。この「千僧鍋」の遺例ではないかと思われるものがある。それは河南省登封県少林寺の大雄宝殿の遺跡に残る鉄鍋⁽⁴⁶⁾である。口径165cm、高さ91cmで、4方に把手があり、推定模式図を図33に示した。この鍋は、明の万暦4(1576)年に製作されたものという。写真を見るかぎり、鑄張りが明瞭にわかり、外型は上下方向に3段、上段と中段の鑄型はそれぞれ8個に分割されていたとみられる。底部や口縁部など細部には違いがあるようであるが、この鉄鍋は、阿弥陀寺、新山寺跡、園城寺の鍋に、形態や鑄型の分割手法が似ている。また、鑄型を縦横に分割する手法に注目すれば、東大寺大湯屋の遺品と基本的に同じ手法をとっている。

同じく、『天工開物』冶鑄第八卷の鐘(鐘)の条には、大型の鉄鐘や釜を作る方法は皆同じであるとの記載があるため、鐘の製法に関する記述をみると、銅鐘は蠟型を原型とする失蠟法を用いること、鉄鐘の場合は、縦方向あるいは横方向に2分した土製の外型に、文様を彫り込む方法をとるとある。地域や時代によって、鑄造の技術に大きな差違があることが確実であり、これをもって中国における梵鐘製作技術の典型とするわけにはゆかない

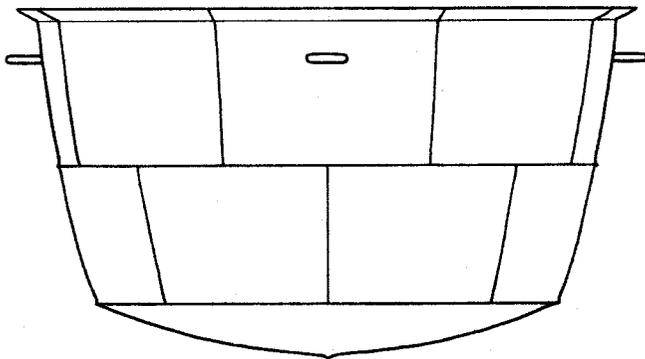


図33 少林寺鉄鍋の模式図

中国の鑄造技術

だろうが、縦方向に鑄型を分割するという、日本の梵鐘にはまったくみられない手法に注目したい。

そこで、坪井良平氏による支那梵鐘年表稿をもとに、中国鐘の鑄型の継目と考えられる鑄張りを観察してみた。ほとんどが写真判定であるため、まったく不十分にはちがいないが、とにかく表5のような結果を得ている。これをみると、中国においては古くから縦方向の鑄型分割手法が存在したことがわかる。また、12世紀以降のものをみると、銅鐘には横方向の鑄張りを残すものや鑄張りのみとめられないものがあり、後者は失蠟法によるのではないかと思う。一方、鉄鐘には、横方向の鑄張りのほかに、縦方向の鑄張りが認められるものが、いくつかみられることに注意したい。これはさきあげた鍋の鑄型のありかたとまったく同じものである。

また、朝鮮鐘には、横方向の鑄張りと考えうるものを確認できる例があるが、縦方向の鑄張り⁽⁴⁸⁾と確認しうるものはないようである。そうすると、上にあげた縦方向の鑄型分割の

表5 中国鐘の鑄型分割

年代	所在	口縁形態	材質	鑄型分割
575	奈良国立博物館	平	銅	縦
711	陝西省博物館	波	銅	縦・横
742	済南省山東博物館	平	銅	なし
833	普寧寺（江蘇省丹陽城）	波	銅	横
897	至道観（広東省肇慶府）	平	銅	横
902	長徳寺（岐阜県大垣市）	平	銅	横
1023	法浄寺（浙江省杭州市）	平	？	横
1114	開元寺（広東省湖州）	平	？	横
1184	関帝廟（山東省肥城）	波	鉄	縦・横
1202	乾州鐘閣（陝西省）	波	鉄	縦・横
1204	嵩山少林寺（河南省登封県）	波	鉄	縦・横
1320	玉泉寺（湖北省荊門州）	？	鉄	横
1403	徑山寺（浙江省余杭）	波	？	なし
永楽初年	大鐘寺（河北省北京市）	波	銅	横
1438	発心寺（長崎市鍛冶屋町）	波	銅	縦・横
1460	臨済寺（河北省正定）	波	鉄	縦・横
1525	天寧寺（河北省北京市）	波	銅	なし
1544	北山別院（京都左京区）	波	銅	なし
1561	法性寺（大阪府豊能郡豊能町）	波	銅	なし
1640	萬福禪寺（福建省福清）	平	鉄？	横
1664	大黒寺（大阪府羽曳野市）	平	銅	なし
1700	藤井有隣館	波	銅	縦・横
1875	萬福寺（福建省福清）	平	銅	横
？	長春観（山東省済南）	波	鉄	縦・横
？	五仙観（広東省広州市）	平	鉄	横

手法は、やはり中国を本家とする伝統的な手法ではないかと考えられる。そして、これまでに述べた資料のうち縦方向の鑄型分割手法をとった鑄物を、草部是助の作品と考え、そのほかにこうしたものがあまりないとすれば、これらこそ、俊乗坊重源を通じて、宋の鑄物師陳和卿、陳仏寿以下7人とともに大仏鑄造にあたった過程で中国流の技術を攝取採用して製作したものといわなければならないだろう。

また、こうした大型の鑄物を製作するにあたって、上記の縦方向の鑄型分割手法は、鑄型成形という点においては、引型を用いるよりも容易に形成しうるものの、鑄造の際には強固な緊縛を要するという点も無視されるべきではないであろう。さきあげた興福寺大湯屋羽釜(6)は、草部是助にかかわる作品とくらべて、やや時代の下がるものであって、鏝より上部にこうした縦方向の分割手法をとるものであるが、分割された外型がうまくできておらず、文様のずれや食い違いが生じ、かならずしも上出来とはいえない。製作に当たった工人はこうした縦方向の分割手法に長じていたとは思えず、この時代にはこうした手法が残存するものの、それを伝習することが難しくなっていたのではないかと思われる。

なお、草部是助は、「六葉鐘」と呼ばれる口縁部に切れ込みを入れた中国鐘の形態を模倣したものを作製しているが、縦方向の鑄型分割手法は採用していない。日本の梵鐘にはこうした縦方向の鑄型分割手法による製作とみられるものがなく、たとえ口径が1mを越すようなものにおいてもこうした手法はとられていない。これは、日本の梵鐘が、その祖型を中国の鐘にもとめるものの、その型式や製作技術において独自の発展をとげ、平安時代のおわりごろには、定式化していたためであろう。

本稿作成にあたっては、鑄物の科学技術史研究部会の石野亨先生をはじめ、多くの方々の御教示をたまわり、風呂研究家の佐藤富美房氏には、多くの資料を御垂示いただいた。また、本文中に掲げた実測図は、すべて現物を実見して作製し、諸先学の示された図や写真、解説を参考にして補筆訂正したものを用いた。この一連の作業にあたり、御所蔵の寺社各位には、多大の御協力をいただいた。末筆ながら、各位に謝意を表する次第である。

〔注〕

- 1 坪井良平『慶長末年以前の梵鐘』1939年、『梵鐘と古文化』1947年、『日本の梵鐘』1970年、『日本古鐘銘集成』1972年、『佚亡鐘銘図鑑』1977年、『歴史考古学の研究』1984年
- 2 京都府埋蔵文化財調査研究センター『梵鐘鑄造遺構の現状とその諸問題』1983年
- 3 藤浪剛一『東西沐浴史話』1931年、武田勝蔵『風呂と湯の話』（塙新書6）1967年
- 4 立田三郎「箱根神社の鉄の大釜」『ミュージアム』144号 1963年
- 5 巽三郎「紀州の古銘資料(四) 熊野三山の鉄釜」『熊野路考古』4 1964年
- 6 小林剛『俊乗坊重源の研究』1971年
- 7 江谷寛「湯屋の石風呂と鉄釜」『物質文化』26 1976年
- 8 奈良県文化財保存事務所『重要文化財興福寺大湯屋・国宝同北門堂修理工事報告書』1966年 p.40
- 9 立田三郎 注4論文、箱根神社社務所『箱根神社大系』下巻 1935年 pp.1-2
- 10 注9に同じ。
- 11 巽三郎 注5論文、蔵田蔵ほか『秘寶』第9巻 熊野 1968年 p.221、巽三郎・愛甲昇寛『紀伊國金石文集成』1974年 p.366
- 12 巽三郎 注5論文、巽三郎・愛甲昇寛 注11文献 p.364
- 13 注8に同じ。
- 14 小林剛 注6文献 p.206
- 15 藤浪剛一 注3文献 図28~31、江谷寛 注7論文 pp.66-7 参照。
- 16 永山卯三郎『吉備郡史』1937年 pp.922-3、総社市史編さん委員会『総社市史』美術編 1986年 pp.246-9
- 17 蔵田蔵ほか『園城寺』1971年 pp.292, 313
- 18 佐藤富美房「風呂図鑑 59 羽黒釜」『生活』第52巻12月号 1986年
- 19 国宝建造物東大寺大湯屋・法華堂北門修理工事事務所『国宝建造物東大寺大湯屋・法華堂 北門修理工事報告書』1938年 p.17、図版23
- 20 たとえば、京都大学病院構内A F 15区S X 2・S E 15出土の土師器鍋は、やや底部が丸いがこれに類似した形態をとるものであり、年代も近い。浜崎一志「京都大学病院西構内A F 15区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』1984年 p.35
- 21 京都府文化財保護基金編『京都の美術工芸』与謝・丹後編 1963年 p.115
- 22 同上文献 p.121
- 23 たとえば、奈良県吉野郡吉野町の吉野水分神社蔵湯釜は、銘文から、慶長9(1604)年に豊臣秀頼寄進のものであることがわかる(藤井直正「豊臣秀頼の社寺造営とその遺構」『大手前女子大学論集』第17号 1983年 pp.66-8)。しかし、その器形は南北朝時代を下らないものである。おそらく、製作にあたって古い型式の湯釜を手本にしたのであろう。
- 24 大阪府教育委員会『真福寺遺跡』1986年 p.27
- 25 大日本古文書 家わけ第一『高野山文書之八』〔又統宝簡集 百九 大湯屋釜鑄目録並勅進帳〕
- 26 五十川伸矢・飛野博文「京都大学教養部構内A P 22区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報 昭和57年度』1984年 pp.16-7
- 27 滋賀県教育委員会『近江の鋳物師』2 1988年 p.86、ジーボルト『江戸参府紀行』(東洋文庫87) 1967年 p.167
- 28 五十川・飛野 注26報告 pp.18-9
- 29 東大寺・奈良県立橿原考古学研究所『東大寺大仏殿西廻廊隣接地の発掘調査』1988年
- 30 筒井英俊編『東大寺現存遺物銘記及文様』(『寧楽』14) 1931年 pp.12-3、小林剛 注6文献 p.206
- 31 小林剛 注6文献 pp.305-6

中世前半の大型鑄鉄鑄物

- 32 小林剛 注6文献 p.206
- 33 藤井駿「俊乗坊重源遺蹟の研究——備中新山寺と備前吉備津常行堂——」『岡山史学』第13号 1963年（『吉備地方史の研究』1971年 pp.393-403 所収）
- 34 江谷寛 注7論文 pp.68-9
- 35 武田勝蔵 注3文献 pp.26-7, このほか『嘉元記』延文2（1357）年12月6日条に、中院と金剛院が合戦をして、取物の大鍋が返出されたという記事がある。
- 36 坪井良平「無情をかこつ鐘の数々」『學鐙』62-8 1965年（『歴史考古学の研究』1984年 pp.232-37 所収）
- 37 江谷寛 注7論文 pp.67-8
- 38 藤浪剛一 注3文献 図28・29
- 39 大場磐雄『官幣大社香取神宮宝物図鑑』1940年 pp.18-9
- 40 信濃史料刊行会『信濃史料』第19巻 1962年 p.181
- 41 高野山文書刊行会『高野山文書』第1巻（復刻版）〔勸学院文書 第七〕
- 42 坪井良平 注1文献
- 43 近藤義郎・渡辺則文「製塩技術とその時代的特質」『日本の考古学』歴史時代 上 1967年 p.57
- 44 藪内清編『天工開物の研究』（『京都大学人文科学研究所研究報告』）1953年, 石野亨『鑄造 技術の源流と歴史』1977年 pp.233-7
- 45 P. Hommel, *China at Work* 1938年 pp.28-33
- 46 翁一・影子『少林寺』1982年
- 47 坪井良平「支那梵鐘年表稿」『歴史考古学の研究』1984年
- 48 坪井良平『朝鮮鐘』1974年

京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度

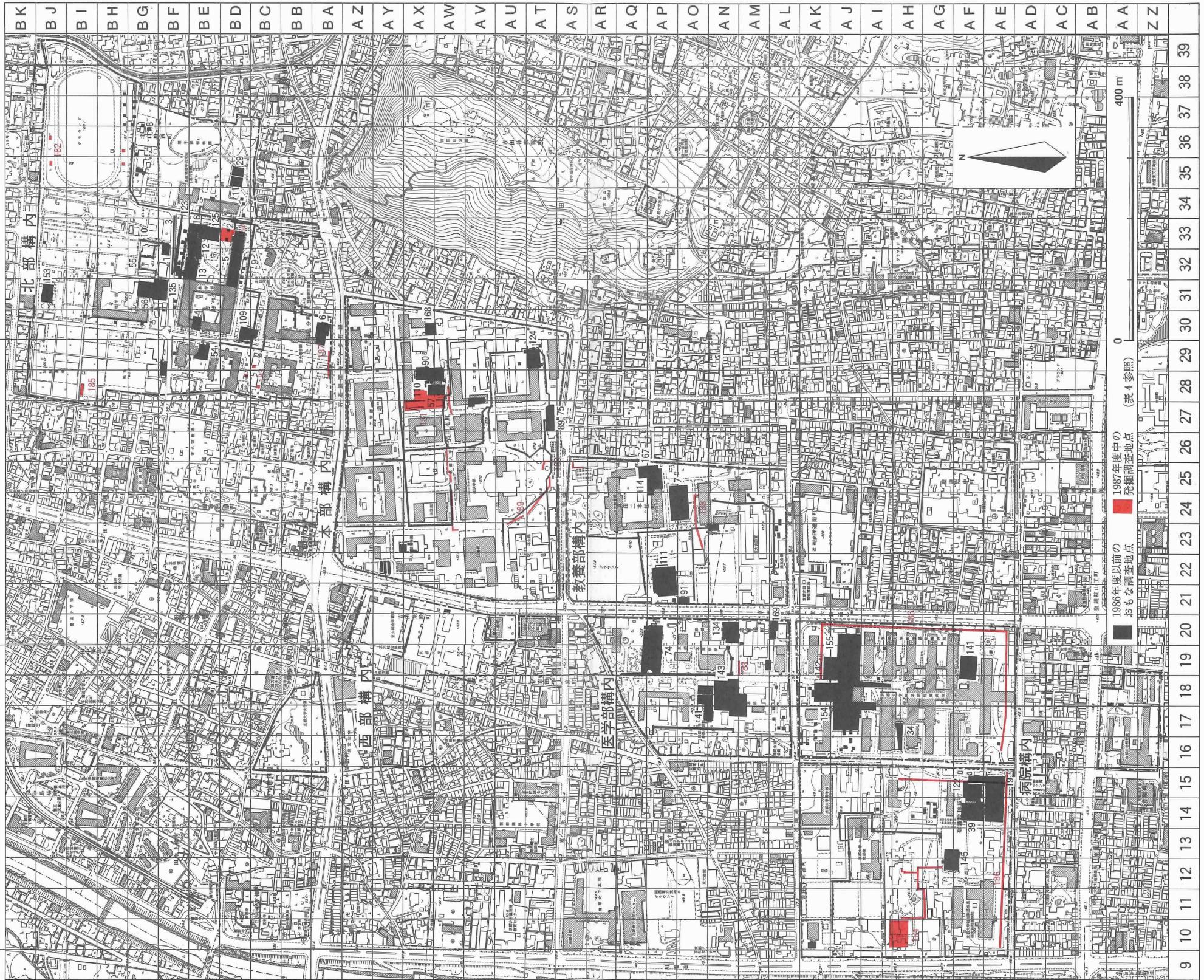
図 版

- 1 京都大学吉田キャンパスの地区割りと調査地点
- 2～5 京都大学医学部構内 A L 20 区
- 6～12 京都大学北部構内 B D 33 区

Y=1500 (構内座標)
y=-20500 (国土座標)

Y=2000 (構内座標)
y=-20000 (国土座標)

Y=2500 (構内座標)
y=-19500 (国土座標)



X=2000 (構内座標)
x=-108000 (国土座標)

X=1500 (構内座標)
x=-108500 (国土座標)

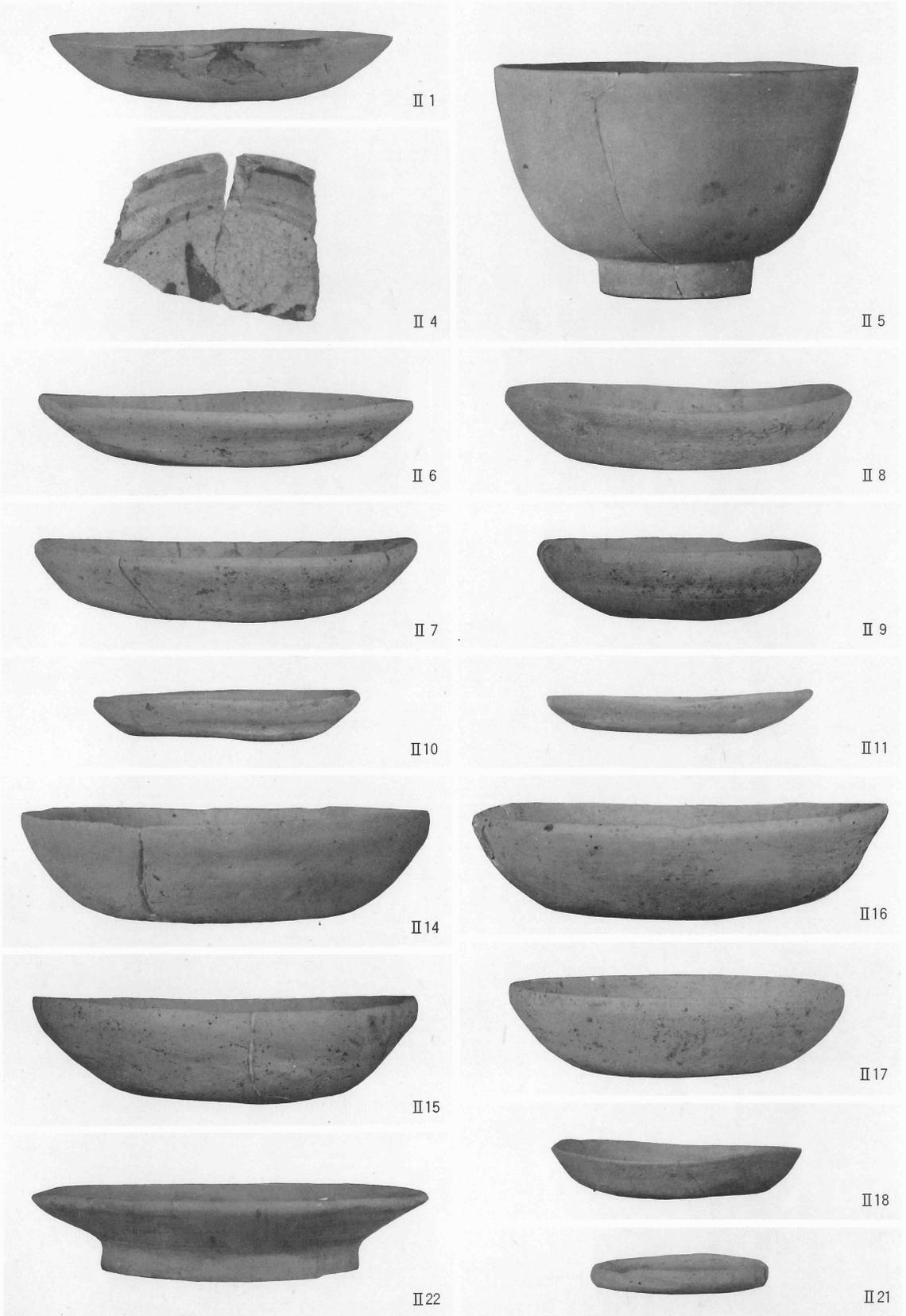
X=1000 (構内座標)
x=-109000 (国土座標)



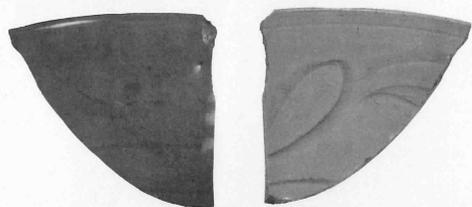
1 江戸後期の遺構（西から）



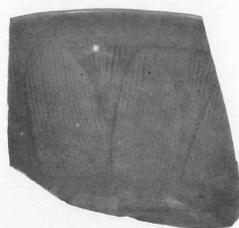
2 江戸前期の土取り穴（西から）



土取り穴出土遺物(1) (II 1・II 6～II 11・II 14～II 18・II 21・II 22土師器, II 4陶器, II 5磁器)



Ⅱ32



Ⅱ33



1/3

Ⅱ29



1/3

Ⅱ41



Ⅱ45



1/3

Ⅱ42

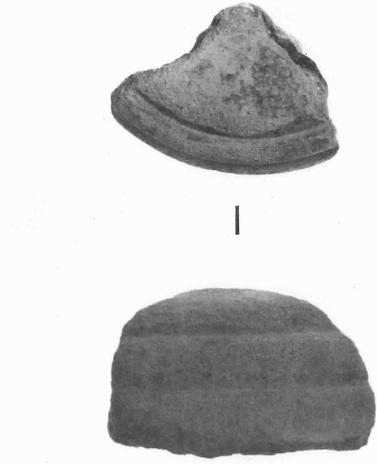
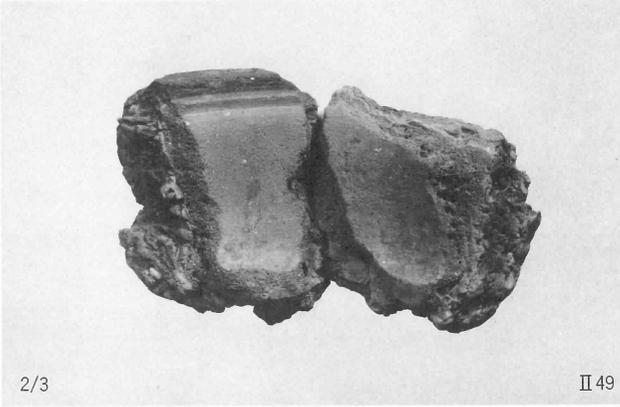
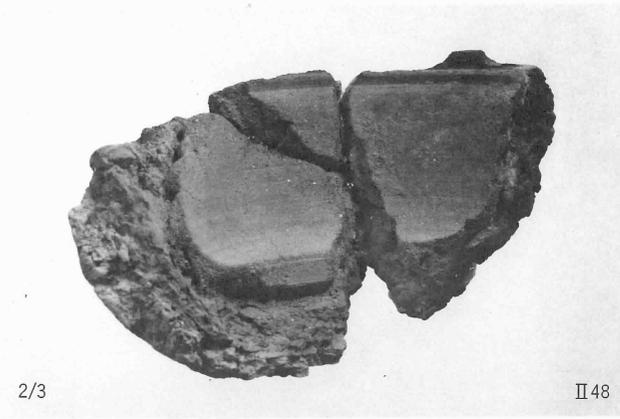


Ⅱ39



Ⅱ37

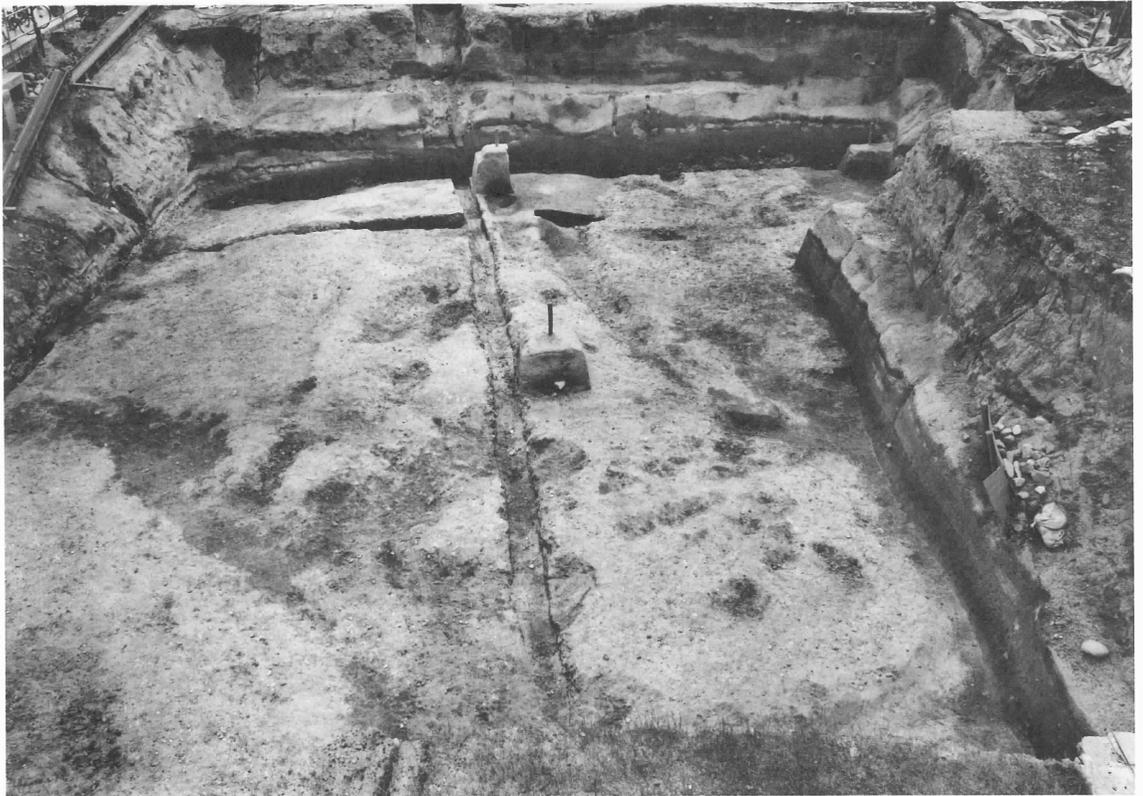
土取り穴出土遺物(2) (Ⅱ32・Ⅱ33青磁, Ⅱ45青白磁, Ⅱ37・Ⅱ39白磁, Ⅱ29瓦器, Ⅱ41・Ⅱ42須恵器)



土取り穴出土遺物(3) (II 48~ II 53鑄型, II 54取瓶)



1 江戸後期の遺構（北から）



2 縄文晩期の遺構（西から）



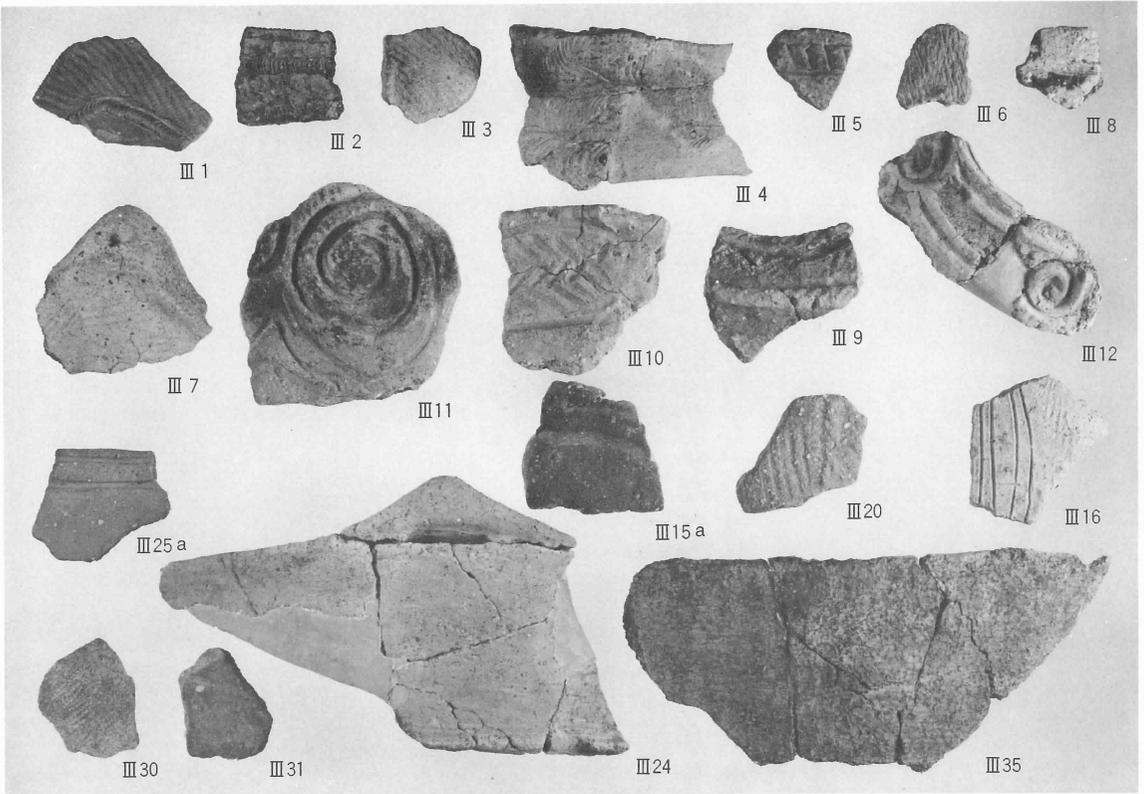
1 土坑SK 5 (西から)



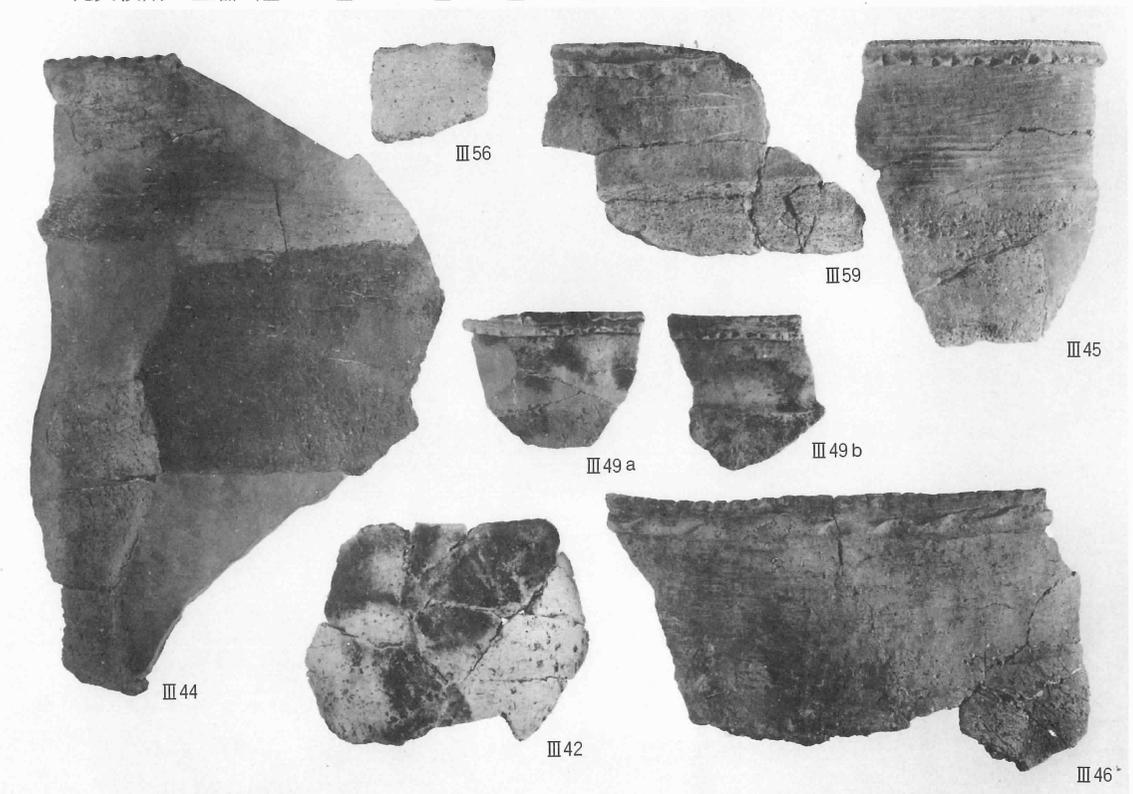
2 土坑SK 3 (西から)



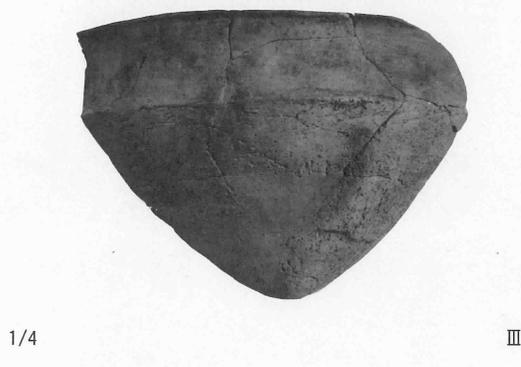
3 土坑SK 4 (西から)



1 縄文前期の土器(Ⅲ 1～Ⅲ 3), 縄文中期の土器(Ⅲ 4～Ⅲ 12・Ⅲ 15 a・Ⅲ 16・Ⅲ 20), 縄文後期の土器(Ⅲ 24・Ⅲ 25 a・Ⅲ 27・Ⅲ 30・Ⅲ 31・Ⅲ 35) 縮尺1/3



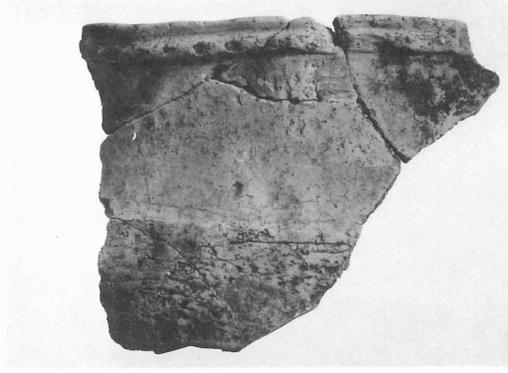
2 縄文晩期の土器(Ⅲ 42・Ⅲ 44～Ⅲ 46・Ⅲ 49・Ⅲ 56・Ⅲ 59滋賀里Ⅳ式) 縮尺1/3



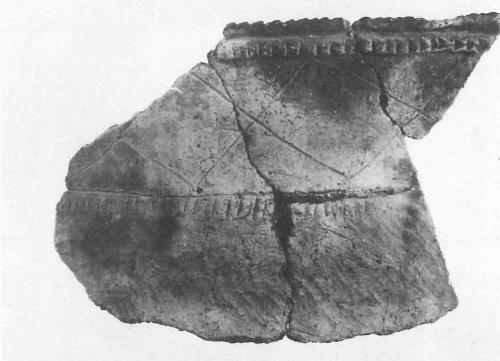
縄文晩期の土器 (III 47・III 51・III 52・III 54・III 63滋賀里IV式, III 61船橋式～長原式, III 75長原式)



Ⅲ68



Ⅲ69



Ⅲ66



Ⅲ95



Ⅲ64



Ⅲ74



Ⅲ67

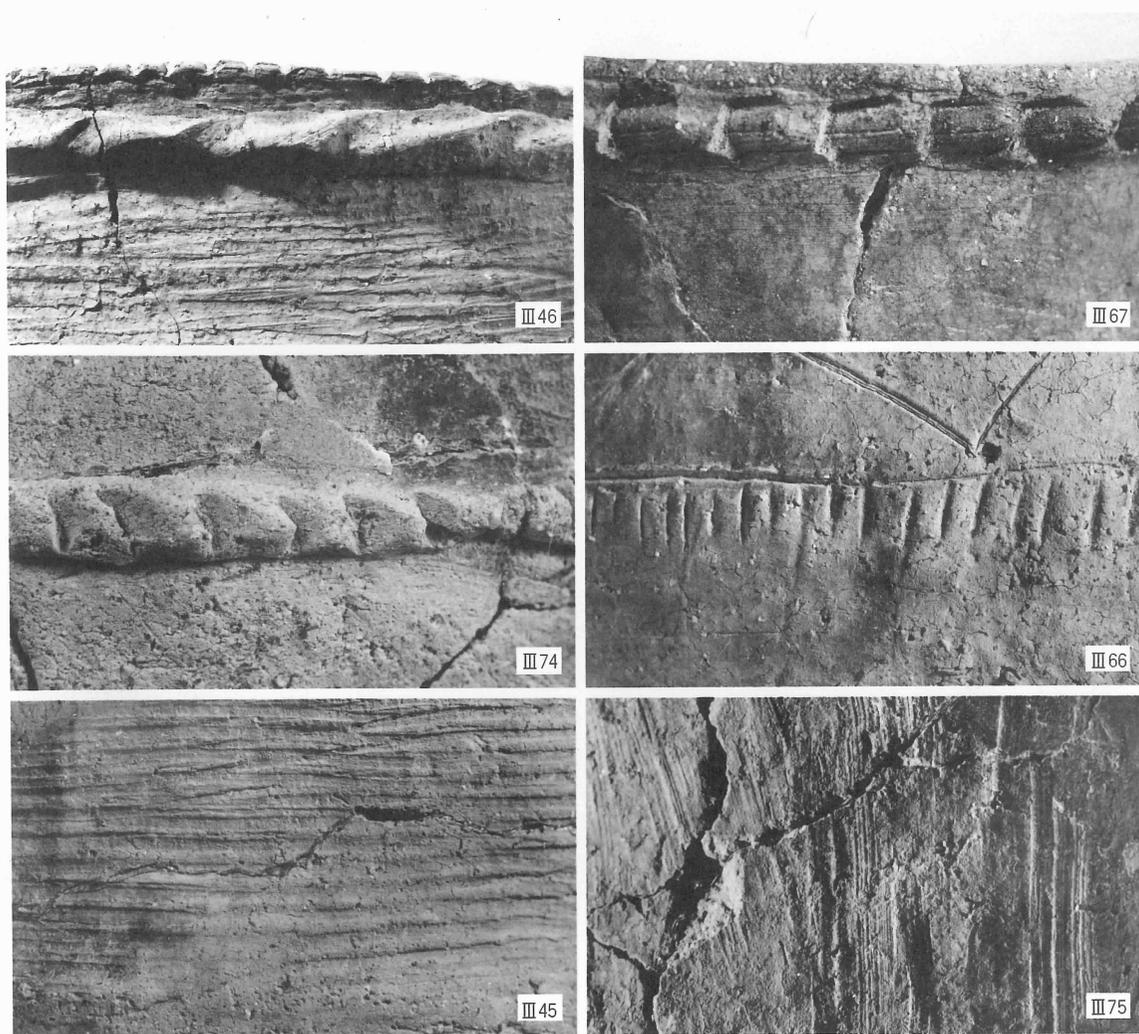


Ⅲ78



Ⅲ79

縄文晩期の土器（Ⅲ64・Ⅲ66～Ⅲ69・Ⅲ95滋賀里Ⅳ式，Ⅲ74長原式），
弥生前期の土器（Ⅲ78・Ⅲ79） 縮尺1/3



1 縄文土器細部(Ⅲ46口縁部凸帯, Ⅲ67口縁部凸帯, Ⅲ74肩部凸帯, Ⅲ66肩部爪形文, Ⅲ45頸部二枚貝条痕, Ⅲ75頸部細密条痕) 縮尺1/1



2 石器(Ⅲ104磨製石斧, Ⅲ105・Ⅲ106凹石)

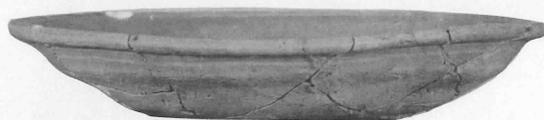


Ⅲ111



2/3

Ⅲ113



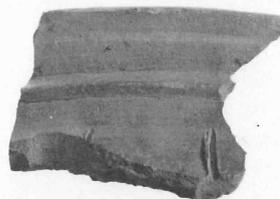
Ⅲ108



I



Ⅲ126



Ⅲ122

2/3

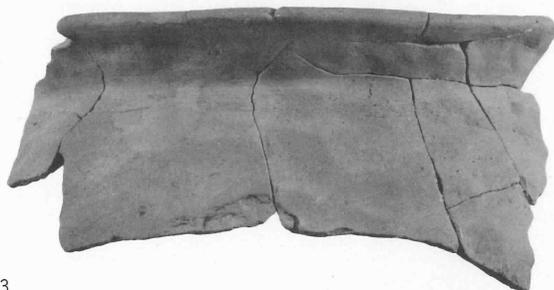
Ⅲ117



1/3

Ⅲ119

1/3



Ⅲ115



1/3

Ⅲ116

灰褐色土出土遺物 (Ⅲ111・Ⅲ113緑釉陶器, Ⅲ108・Ⅲ115・Ⅲ116土師器, Ⅲ117須恵器, Ⅲ119黑色土器), 黄色砂混り暗褐色土出土遺物 (Ⅲ122土師器), 茶褐色土出土遺物 (Ⅲ126土師器)

1990年3月30日発行

京都大学構内遺跡調査研究年報

1987年度

編 集 京都大学埋蔵文化財研究センター
発 行 京都市左京区吉田本町
印 刷 山代印刷株式会社
製 本 京都市上京区寺之内通小川西入

正 誤 表

京都大学構内遺跡調査研究年報 1987年度

頁	行	誤	正
vi	27	器種構成	器種組成
3	14	白砂	白色砂
19	9	図16~27	図16~26
30	28	黄色砂混り茶褐色土	黄色砂混り暗褐色土
40	9	藤原元治	藤原元始